

平成25年3月NHK中央放送番組審議会（議事概要）

3月のNHK中央放送番組審議会は、18日（月）、NHK放送センターにおいて、9人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、プレミアムドラマ 宮崎局発地域ドラマ「命のあしあと」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向、4月の番組編成について説明があり、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	福井 俊彦（前日本銀行総裁）
副委員長	岸本 葉子（エッセイスト）
委員	大野 博人（朝日新聞社役員待遇論説主幹）
	小田 尚（読売新聞東京本社専務取締役論説委員長）
	倉重 篤郎（毎日新聞社論説委員長）
	駒崎 弘樹（NPO法人フローレンス代表理事）
	紫 舟（書家）
	龍井 葉二（連合総合生活開発研究所副所長）
	若月 壽子（主婦連合会事務局）

（主な発言）

<プレミアムドラマ 宮崎局発地域ドラマ「命のあしあと」

（BSプレミアム 1月27日(日)放送）について>

- とてもおもしろかった。口てい疫が発生した現場で何が起きていたのか、関わった人々の葛藤はどうだったのかがよくわかった。地元の人を応援したい、頑張りを全国に伝えたいということはよく伝わったのではないか。ある特定の町を突然襲いかかってきた伝染病と闘う人々といえ、アルベール・カミュの「ペスト」を思い出す。「ペスト」と重ねてみると、このドラマももっと陰影があるとよかったと思う。口てい疫という実際に起きたことを基にしているので、社会・時事問題に根ざしたドラマと人間ドラマの両方の側面があると思う。「ペスト」は後者に傾いているので、その違いがあるのかもしれない。このようなドラマでは、社会性を出すのか、人間ドラマにするのか、方向をはっきりすると、もう少しおもしろくなった気

がした。

- 口てい疫で何万頭もの牛が殺されたことはニュースで知っていたが、ドラマを見てあらためてたいへんなことだとわかった。畜産農家の人たちも外へ出ることができず、救援物資が配られている場面があり、こんなことまであったのかと思った。その後はどうなったのだろうと思ったが、番組の最後に6割の人が畜産の再開を決意したと紹介されており、希望が持ててよかった。口てい疫がたいへんな病気だとは知っていたが、本当はどのような病気なのかよくわからないこともあり、ドラマの中で、口てい疫について説明できればよかったのではないか。ワクチンを打って、その後、牛を殺すシーンもあったが、どうしてそのようなことをしなければいけないのかについても説明がほしかった。
- 口てい疫についての説明がもう少しあればという指摘があったが、宮崎県の視聴者を対象に作ったドラマなのか、全国向けに作られたドラマなのか。また、宮崎県の視聴者と全国の視聴者からの反応に違いはあったか。

(NHK側)

全国放送向けに作ったドラマだ。宮崎県と全国から寄せられた声には、あまり違いはなかった。宮崎県では復興がある程度形になり、5年に1度開かれる「全国和牛能力共進会(和牛のオリンピック)」では、ドラマの撮影のさなかに宮崎牛が優勝した。産業的に復興が果たされたわけではないが、宮崎県の牛が日本一になった時期に放送したので、とても反響が多かった。「すごく泣きました」「こういうことだったのですね」「農家の気持ちがわかりました」など、畜産に直接携わっていない人からもたくさんの反響があった。他県からも「こういうことだとは知りませんでした」「農家の気持ちに共感しました」といった声が多く寄せられた。

- 3月17日(日)に、「明日へー支えあおうー証言記録 東日本大震災 第15回福島県葛尾村」を見た。自主避難した村長と住民を取り上げていて、牛を餓死させてしまう話があったが、そうせざるをえなかった場面をドラマと重ね合わせながら見た。おそらく葛尾村がそうであったように、宮崎県の場合も政府、県、役所など、それぞれのレベルで、どこが当事者なのか、本当にわからない状況だったと思う。あえて、主人公の農家と隣の家という、まだ感染していない中間地帯にフォーカスしたことでドラマが成り立ったのだろうと感じた。飲み屋で言い争いになった

シーンのようなレベルだけではなく、畜産農家の中でもたくさんの議論があったと思う。単純化したことでインパクトが出たが、逆に“うそっぽい”と見えてしまう側面もあった。今の宮崎県のことを思えば、メルヘンとわかっている、地元の人々がそういうものを求めているのかもしれないと思った。ドキュメンタリー番組ではないので、少しもどかしさがあったが、そういうことなのかと自分なりに納得した。

○ 現実起きたことをテーマにするとき、ドラマでより表現できるものとそうでないものがあると思う。今回は、ドラマにドキュメンタリーの力を必要としたのではないか。現実そこで苦しんだ人がたくさんいるので、記録映像のようにあまり主観を含めず、演出を加えすぎない作りをして、その人たちの力をもう少し借りてもよかったと思う。たとえば映画では、ストーリーはあるが演技をしているのではなく、実際に起こったかのように見せていく表現方法がある。今回のドラマの場合、宮崎県の人たちの感情をもっと伝えるような表現方法を検討できたらよかったと思う。NHKでも現場の風景や、葉っぱの間から木漏れ日が差し込むといったシーンを、ドラマをはじめドキュメンタリーやニュースなどで見るが、何となく入れていることが多いと感じる。以前、ある映画を見たときに、物語のシーンの中に風景が差し込まれていて、その木漏れ日を見た瞬間に、それまで見てきたストーリーの感情が高まって自然に涙がこぼれる経験をしたことがある。何となく風景を差し込むのではなく、意味のある表現をしてほしい。今回のドラマに関しては、ドラマ以外の表現方法があったように感じた。

○ ノンフィクションに基づいたドラマで、こういう手法によって、宮崎県で何が起きたかを明らかにすることはありうる手法だと思った。農家の1軒1軒にどういった苦悩があったのか、当時の報道ではほとんど伝わっていない。今回のような形で取り上げていくことはよいと思う。一方で、行政のミスや危機管理ができていなかったところを取り上げられていなかった。「みんなが今がんばっているからよいではないか」というまとめ方になっている。今後はドキュメンタリーなど、何らかの形で検証していくことも必要だと思う。これで終わりにしてしまうのはもったいない感じがした。

(NHK側)

口てい疫の発生当時に、宮崎局として十分な取材ができなかったという反省がある。ウイルスを人間が運んでしまう可能性があり、現場に入ることができず、役場などの周辺取材だけの報道だった。そのため全国の人たちは、口てい疫のことは知っているが、何が起こっていたのかわからない状態に

なった。それは、宮崎県内でも同じことで、当時、口てい疫のため牛が殺処分されたことは伝わっているが、畜産農家のひとたちに何があったのかは伝わっていない。畜産農家のひとたちの心の動きも含めて、当時何があったのかを伝えたいと考えたのがドラマを作ることになった第一歩だった。各委員からのいろいろな意見を伺い、さまざまな手法があることもあらためて認識した。

- 畜産の現場としてはとてもきれいで現実感が薄かった。実際は、えさをあげるだけでもほこりが立つと思うので、もっと畜産農家の実感が画面から伝わってくるとよかった。
- 私もニュースで知っていることしかなく、特に、終息した後のことにはまったく思いが至らなかったことに気がついた。終息後でも、畜産農家を続けるのか、お金を受け取ったところとそうでないところで地域が割れてしまうなど、さまざまな課題が生まれていたこともわかった。ドキュメンタリーでもなく、ニュースでもなく、ドラマでできることは何だろうと考えた。ニュースは即時性だ。ドキュメンタリーでは、継続的に取材をしていないとうまく表しきれないという限界があると思う。家庭内の話し合いや飲み屋だから出てくるようなさまざまな心の葛藤といったもの、そういったところまでは密着できない。そのあたりはドラマならではの表現だと思う。そういう観点で見ると、このドラマ一本だけで批評するのは難しく、どういふニュースが宮崎県から全国に流れ、ドキュメンタリーではこの問題をどのように取り上げ、全体の中でこのドラマはどういう役割をしたのかという検証が必要ではないかと思った。

宮崎県外の人にとっては、地域発のドラマによって、ニュースでは知り得なかった部分を、ひとつの畜産農家に寄り添う演出によって、感情の動きを含めて受け止めることができたのではないか。一方で、将来のために検証が必要なところはドラマに盛り込まれていない。口てい疫とは何だったかということは、このドラマを見た限りでは理解できなかった。ニュースで口てい疫の問題が報じられているときは、ある程度知識が共有されているが、そのニュースが出なくなったときに、このドラマは放送されている。ドラマだけを見て口てい疫についてわからなければならない。口てい疫の基礎情報がこのドラマに必要だったのではないか。

フィクションとノンフィクション、特にフィクションをどう構築していくかという方法についての意見があったが、それを考える前提として、テレビドラマは映画と比べて受け手の数に違いがある。また、その受け手の視聴状況も、映画館やDVDを見るときと違い、食事をしながらなど、それほど集中しない状況で見ているの

がテレビドラマだ。その視聴状況でも、意図したことが伝わるには、フィクションとしての虚の混ぜ方に、ある程度“べた”な手法があるほうがよいと思う。そういう意味で、このドラマは“べた”なことができていて、最大公約数的に受け取れる部分があり、よくできていたと思う。家から牛を出す前日に子牛が生まれるなど、あまりにも“べた”な部分はあったが、お茶の間の視聴者が、口てい疫が発生したときの現地の人の思いや、そのとき起こっていたことを知るには、よい構成のしかただと思った。

(NHK側)

こうした形式の地域発ドラマは、平成14年の福岡局が最初だ。当時は、県域やブロックの範囲で放送し、全国放送を考えていなかった。地域の素材を、地域の放送局が、地域の視聴者を考えて作る発想で始まった。その後、「ドラマをぜひやってみたいという」という声が各地域局からあり、拠点局や本部とも連携をしながら作っている。大阪局、名古屋局以外では、ドラマ専門の制作スタッフがいないので、初めての人ばかりで作る場合や、経験者が応援に行って作る場合もある。

地域で作るドラマには、作り手側のメリットが2つある。ひとつは、地域の視聴者がたいへん喜んでくれることだ。地元の人がエキストラとして出演し、プロ顔負けの芝居をする。あるいは、企画発表、主題歌の募集、完成時の取材会、応援してもらった皆さんとの上映会などさまざまなイベントも実施できる。いろいろな意味で地域の放送局として、NHKと視聴者との距離を身近にするメリットがある。もうひとつは、地域ごとにさまざまなトライアルをすることで、今までにないNHKのドラマの財産が、増えることだ。本部で作っているドラマでは、作り方も発想も、「こういうものがドラマ」という思い込みがあるかもしれない。地域ドラマでは、そういった作り方ではないドラマの可能性にチャレンジできる。

昨年までは、全国放送が必ずあるわけではなく、完成してから評判を聞き、そのうえで全国放送を何らかの形で行ってきた。今年はBSプレミアムでの放送を前提に地域局からの提案を募り、協力体制を組んだ。

- 「命のあしあと」は初めから全国放送が予定されていたということか。

(NHK側)

当初から全国放送として制作した。しかし、地域局が制作するとき、地域に向けての強い思いがないと作る意味はない。そこは本部で作るものとは違ってくる。

- 編集の基本計画の中に、地域の機能充実としてドラマについて書かれていたが、いまその意味が理解できた。ドラマを作ることで、地域との協力関係を強めながら発信力を上げられる。さらに、ドラマを作る作業の中で、ドキュメンタリーを作るための取材が足りなかったというような振り返りから、有機的な連関や活力が生まれていく効果もあると感じた。私たちはそういう事情に関係なく、できあがった番組がどうなののかについて意見を述べるが、その位置づけに関して、よく理解できた。
- クライマックスで、牛にワクチンを打つことを受け入れるシーンは、葛藤がそこで集約されていると思う。しかし、ワクチンを打つことに納得する理由に疑問を持った。行政など、みんなが葛藤を持って、悩みながらぶつかって、そこでどうしようもなくなる中で結論を出していく。いろいろな力学が重なって最後に決断するのが獣医の生きざまではないかと思った。そこはむしろ納得せずに強行してしまったほうがリアリティーを感じる。それぞれの生きざまのレベルで納得しながらも、亀裂を見せたほうがリアリティーはあったように思う。あのクライマックスシーンの設定について、そのあたりの議論はあったのか。

(NHK側)

ご指摘のクライマックスシーンについては、特に議論にはならなかった。なぜなら、このドラマはすべて実話をもとにしたものだったからだ。農家や獣医にさまざまな話を聞き、多くの人が同じような経験をしていたので、ドラマに採用した。また、行政に対する批判については、ドラマに登場した村役場でいえば、畜産農家と同じように闘っている側という印象が強い。みんながウイルスと闘っているというのが宮崎県の現実だ。それをそのままドラマにした。もちろん微妙なディテールは、脚本家とディレクターが相談し、よりドラマチックに見えるものにした。

- ドラマそのものはよくできていると思った。俳優も適役でいっそう盛り上がった

と思う。ドラマと危機管理、危機対応を巡る大きな問題が込められたテーマなので、広い意味で日本全体の危機管理体制にメスを入れるひとつのきっかけになったと思う。感染をいかに防ぐか、もし起こったときの緊急対応は何か、さらに拡大させないための対応は何か、行政と当事者である畜産農家との連携体制は急には構築できない。だから、普段からシナリオをもってシミュレーションが行われているかどうか、行われていると機敏に対応できる。その点について私は関心を持つ。そういった視点から追跡取材し、ドキュメンタリーや全国的な問題意識を盛り上げる番組に展開できる潜在的な種がたくさん含まれているドラマだと思った。危機対応に焦点をあて、今後の番組で取り上げてほしい。

<放送番組一般について>

- 3. 1 1 関連の番組は「NHKスペシャル」を中心にどれも水準がとても高いものだった。3月3日（日）のNHKスペシャル「“いのちの記録”を未来へ～震災ビッグデータ～」を見た。いったん避難し、戻ってきて被災した人が多くいたことは、こうした分析がなければわからないことだと思った。被災された方が記憶をよみがえらせて、つらい状況について勇気をふるって話している姿に感動した。
- NHKスペシャル「“いのちの記録”を未来へ～震災ビッグデータ～」では、そのとき起きていたさまざまな事象を捉えたデータが残されていたことがわかった。ネクストメガクエイクとして、今後起こる可能性のある、三陸沖の地震や東南海・南海地震、首都直下地震、富士山の噴火などについて取り上げたことは評価したい。これからNHKに最も望まれることは、災害の発生時に、直ちに有益な情報を冷静に伝えることと、これから先、10年、20年、あるいはもっと近いうちに起こりうる事態に対し、われわれが備えを持っているのか、行政は対応しているのか、シミュレーションがどこまでできているのか、そういったことについて国民的なコンセンサスを作るという役割だ。そのためにも3. 1 1の前後だけではなく、定期的に取り上げてほしい。
- 3月8日（金）のNHKスペシャル 3. 1 1あの日から2年「わが子へ～大川小学校、遺族たちの2年～」(総合 後 10:00～10:49) は、心身の傷を負った人々の姿と、その絆が深まっていくところが伝わってきた。
- 3月10日（日）のNHKスペシャル 3. 1 1あの日から2年「メルトダウン 原子炉“冷却”の死角」を興味深く見た。とても引きつけられた。イタリアまで行っ

て実験をしたことはすごいと思った。原子炉の設計図のようなものを入手し、専門家を集め、問題箇所を見つけ出したことにも驚いた。国会、民間の事故調査委員会でもできなかったことを、NHKが明らかにした感じがする。単に、消防車の注水が半分以上原子炉に届いていなかったという事実だけでなく、われわれが、まだわからずにいることがたくさん残っていると認識させた点でも優れていた。ドラマ仕立ての部分も興味深く、注水したときの水の経路を説明するCG画像や映像もわかりやすくとてもよかった。

○ NHKスペシャル 3.11あの日から2年「メルトダウン 原子炉“冷却”の死角」は、1時間と思えない深い内容だった。1号機の水位が下がりすぎていることが現場からきちんと伝わっているにもかかわらず、それに対して対策ができなかったという、1号機の問題で最も大きなポイントを指摘していた。また、3号機の水の話もよく検証され真相に迫っていると思う。さらに言えば、1号機のメルトダウンを阻止する手立てはなかったのか、この点が今回の検証における最大の論点だと思う。津波が来てから、数時間後にメルトダウンしたため、多くの人が1号機のメルトダウンを防ぐことは無理だったとしている。しかし、その数時間の中で、どれだけそれを防ぐべきだという認識を持ち、それが起きると取り返しがつかなくなるという認識で対応した人がいたのか。海水を入れる、ベントをする、いろいろな動きがあったが、もう少し認識があれば、電源を確保するなどの作業もほかの手立てがあったのではないかと思ってしまう。こうしていれば防げたのではないのかという視点で検証をしてほしい。事故調査委員会もさまざまな角度から検証しているが、メルトダウンを阻止することは無理だったというニュアンスで、あいまいな形にとどめている。アメリカのNRC（原子力規制委員会）などとも協力して検証できればよいと思った。

○ 群を抜いてすごいと思ったのは、NHKスペシャル 3.11あの日から2年「メルトダウン 原子炉“冷却”の死角」だ。結果がどう出るかわからない中で、相当の陣容、スタッフ体制で、精力的に調査されていた。同日のE TV特集「何が書かれなかったのか～政府原発事故調査～」も合わせて見た。NHKが独自に事故調査を行ったと言えるもので、識者への取材による裏付けから、有力な仮説を示していた。あそこまで出されたことに対し、政府や東京電力などの反応はどうだったのか。1時間の放送で終わるのはあまりにももったいないと感じた。事故調査委員会が検証作業のやり直しをするきっかけになるくらい貴重な問題提起だった。今後、さらに発信してほしい。

(NHK側)

まだわかっていないことがたくさんある。「メルトダウン 原子炉“冷却”の死角」はシリーズの3回目だったが、これからも続けていく。原発事故の原因解明は、各国も興味をもって見ており、海外での展開も考えていく。

- 3. 11に向けての1週間は、ほとんど「NHKスペシャル」の本放送や深夜の再放送を見る1週間だった。NHKスペシャル 3. 11あの日から2年「メルトダウン 原子炉“冷却”の死角」、「いのちの記録」を未来へ～震災ビッグデータ～」、3月7日(木)の3. 11あの日から2年「何が命をつないだのか～発掘記録・知られざる救出劇～」、また3月11日(月)に再放送していた「アラオを尋ねて」(総合 前 2:00～3:13)が印象に残っている。私は1年前の番組審議会で、3. 11のときに集中的に東日本大震災関連の番組が放送されることについて、2つの懸念を感じると言った。1つは、意義があってもだんだん視聴者が既視感にとらわれないかという点、もう1つはある時期に集中的に放送されると、見たくても見きれない、意義はあるが受け止めきれないということが視聴者に出てくるのではないかという点だった。その発言から1年が過ぎ、現在はその懸念は杞憂だった感じている。既視感については、2年目の今回、「NHKスペシャル」を見ても同じことをやっている感じはなかった。むしろ1年、2年と経過するにつれ、復興の課題も変化しており、将来の災害に対する防災、減災の課題も変化している。また、社会も、被災地の人も変化していることを考えると、継続的かつ長期的に何回も、さまざまな側面から取り組んでいくべきテーマであり、今回の災害が、それだけ深刻な災害だったのだとあらためて思った。そういった意味で「アラオを尋ねて」は再放送だったが、それを感じさせないぐらいにとっても力のある番組だった。

また、この時期に集中的に放送することについても、懸念・疑問を撤回したい。今の人の視聴行動は必ずしもリアルタイムで見るものではなくなっている。録画やオンデマンドでの視聴など、自分の好きなときに見るスタイルに変わりつつある。そういうことを考えると、この時期に集中的に編成することは、風化を防ぎ、課題がいまだにあることを思い出す役目を果たしていると思う。視聴者はこれによって思い出し、好きなときに、または受け止められるときに分散して見ればよい。この時期の集中的な放送でよいと自分の中で整理できた。

- 3. 11関連の2年目の番組はよくできていると思う。その上で、NHKに取り上げてほしいと思うことがある。日本は新しいエネルギー基本計画をこれから作らなければいけないが、まだ着手もされていないという重要な点についてだ。「アベノミクス」が動き始め、「3本の矢」と言われているが、本当は4本目の矢が必要

だ。エネルギー計画を欠いたままでは経済競争力がまったく確立できない状態になる。日本は原発事故以降、大事なことではあるが後処理に追われている。止まっている原子力発電所の再稼働に力を入れている人もいる。このことも見方によっては大事だが、今のところはそれがすべてになっている。実際に、日本以外の国、特にアメリカや中国では原発事故の教訓を受け、新しい原子炉や火力発電の開発など、新しいエネルギーの根幹になるような技術開発がどんどん進んでいることは事実だ。これに対して、日本は無関心でいると決定的に遅れるリスクをはらんでいると思う。しっかりとした今後の新しいエネルギー計画を日本が持つために取材できる種は、世界に目を転ずればそうとうある。そこを敏感にとらえ、番組で取り上げてほしい。これはNHKだけでなく、各メディアがそうであってほしい。日本の原子力委員会、各官庁にしても、事後検証と再稼働の問題で余力がまったくない状況だ。新しいエネルギー計画を作る基礎作業もまだ十分に始まっていないと思う。それを促すような世論喚起、材料を知らしめることは大事なことだ。これから番組を作るとき、ひとつの視点として考えてほしい。

- 3月11日を中心に、東日本大震災からの2年を振り返る企画がたくさんあった。いま気になっているのは、NHKが報道する際の放射線量の扱いだ。福島を除染については、民主党政権のときに1ミリシーベルト未満にしないといけないというルールがスタートしている。最近、それは厳しすぎるので20ミリシーベルト未満でもよいのではないかという議論が出ている。このことについて何か客観的な比較データなどが出てきてもよいのではないか。ニュースや番組で数値は出てくるが、その意味するところをもう少しわかるようにしてほしい。最近、福島県知事が1ミリシーベルト未満を除染ではなく、新しい安全基準を作ってもらいたいと発言している。時間が経過し、放射線量に対する感覚にも変化があると思う。そのあたりのフォローがあってしかるべきだと感じる。もう少し国際基準も含め、考えるべきだと思う。

(NHK側)

放射線量については、新聞によっては上限の1ミリシーベルトは事実上無理であり、見直しが必要ではないかと論陣を張っているところもある。国際基準で20ミリシーベルトが出てきていることも承知している。この問題については、何らかの形を考えなければいけないと考えているが、慎重に検討しているところだ。

- 3月16日(土)の「週刊ニュース深読み」でTPP＝環太平洋パートナーシッ

プ協定を取り上げていたが、説明用の模型がたいへんよくできていて感心した。原発事故を説明するときに使っていた原子炉建屋の模型も、たいへん精巧に作られていて、いつもびっくりする。

(NHK側)

「週刊ニュース深読み」は、VTRの取材よりもスタジオでいかにわかりやすく解説でき議論できるかを、一生懸命に考えて制作しているので、スタジオで使用する模型についても丁寧に、力を入れて作っている。

- ニュースのなかで、事件の容疑者を「2人組 (ににんぐみ)」と言っていたが「ふたりぐみ」という言い方もある。どちらが正しいのか。

(NHK側)

NHKでは、用語については放送用語委員会で決めている。「2人組」の言い方は、事件のときと、事件でないときで分けている。ペアで玉入れをするときなどは「2人組 (ふたりぐみ)」で、事件などの場合は「2人組 (ににんぐみ)」とするなど、はっきりわかるようにしている。ただし二人三脚は「ににん」で、熟語として成り立っている音声表現は「ににん」という読み方にしている。ほかにも人力車は「2人乗り (ににんのり)」、和語で後ろに「前」がついているお寿司は「2人前 (ににんまえ)」という言い方になる。

- パソコンの遠隔操作事件では、ニュースで容疑者の氏名が出ていた。おそらく検察情報をそのまま流したもので、NHKを含め、各社メディアが報道していたと思う。まだ刑が決まっておらず、真犯人であるかどうかもわからない段階で、容疑者としてフルネームが出てしまうと、その人の人生が社会的に抹殺されてしまうおそれがあると思う。日本では検察が名前を出せば間違いないということで、これまでそういう報道がされてきたかもしれないが、過去にえん罪事件もあった。検察からの情報をそのまま流すことによって、えん罪事件にメディアが加担してしまうことにならないか。

(NHK側)

警察が正式に発表したものを伝えている。日本の場合は、検挙後の有罪率が高いため、これまで実名報道を行ってきた

いる。犯罪者の氏名を出すことで、再犯防止という意味でもリアリティーのある報道をしている。ただし、えん罪はありえる。パソコンの遠隔操作事件については、被疑者が否定する中、誤って逮捕したケースが各地であった。もちろんそのことについても報道で伝えている。NHKでは、検挙されている案件と実名報道するバランスを考え、実名報道を自粛するといった判断をすることもある。

- 痴漢報道などで、のちに無罪だった場合、そのニュースは最初のニュースより相対の量として少なくなると思う。報道されたら、その人にレッテルが貼られてしまい、メディアが暴力になってしまう危険性がある。警察が誤認逮捕したときは、なぜ誤認逮捕したのかというプロセスをきちんと追って、えん罪であったことを世の中に知らせていくべきだ。何らかのガイドラインや名誉回復に資する報道等のアクションがないと、犠牲者を出すことにつながりかねないと思う。

(NHK側)

誤認逮捕があつて報道した場合、わかったことをあらためて報道している。痴漢などの場合、社会的に大きなダメージがあることは事実で、そのことをテーマにした企画、番組も作っている。

- 取り調べの可視化を含め、検察の捜査体制等に対し、もう少しきちんと透明性を高めるようにしていくことなどが、NHKの社会的使命なのではないか。

(NHK側)

現在は、肩書や、容疑者をつけるなど報道全体が容疑者の人権に配慮するようになってきている。特に、裁判員制度が始まったときに、NHKは、取材、報道の指針として、独自に「取材・放送ガイドライン」を作っている。「容疑者や被告を犯人と決めつける報道をしない」、ニュースでは「警察からの取材によると」といった表現を入れるなど「情報の出所をできるかぎり明示する」、さらに「容疑者や被告側の供述や主張をできるかぎり取材・放送する」、「専門家のコメントは犯人と断定した言い方にならないように注意する」、「ニュースタイトルや字幕スーパーの表現、映像の使用・編集にも細心の注意を払う」といったガイドラインだ。

事件を報道することによって、たとえば振り込め詐欺のような犯罪の再発を防止することや、報道の過程で捜査当局、裁判の手続きがきちんに行われているかをチェックする役割が機能として果たせる。これは新聞もテレビも共通した、犯罪報道についての考え方だ。

誤認逮捕は、本当に起きたときにはニュースで大きく扱っている。パソコンの遠隔操作事件でも、誤認逮捕されたことについては、さまざまなニュースや報道番組で取り上げている。警察も本部長、刑事部長が誤認逮捕した相手に直接陳謝に行ったが、そのことも報道している。事件報道されることによる人権上の負の側面はあるが、報道する側もガイドラインや意義を踏まえて、報道する姿勢を現場として徹底している。事件報道をすることで、社会全体の安全に対して一定の役割を果たしているというのが、テレビ、新聞がとっている事件報道に対する立場だ。

- 日銀の総裁人事の解説では、経済部と政治部の縦割りがあるように感じられる。日銀総裁の人事の解説には、経済の担当者しか出てきていない。新総裁に代わることの意味づけや方向性には触れているが、国会がねじれている中で、国会の同意の取り付け方も難しさがあリ注目された人事だった。今国会の最大のハードルを乗り切ったことを考えると、政治の担当者の解説があってもよかったのではないか。手堅い解説はあるが、もう少し踏み込んでよいと思う。

(NHK側)

政治部と経済部の縦割りといったことはなく、一緒にチームを作って対応した。日銀の総裁、副総裁の人事は誤りのないよう、格別に、慎重を期して報道した。

- 連続テレビ小説「純と愛」は、とてもテンションが高く、相変わらずやりあっているという印象で、主人公の父親がむちゃくちゃなことを言っていると思っていたが、急に亡くなっていて驚いた。ゲームをリセットして終わりのような印象を受けた。
- 毎週見ている好きな番組に、「オイコノミア」と「100分de名著」があり、司会の力を感じる。司会が自分の心で感じたことばを丁寧に話すことによって、番組が盛り上がっている。しかし、「オイコノミア」は、周りの人に「この番組はお

もしろい」と言ってもなかなか見てもらえない。若い男性タレントが司会をしている「Rの法則」「テストの花道」「追跡者 ザ・プロファイラー」などと比較して、番組への共感という点でどうなのか気になった。2月27日(水)の100分de名著「デュマ“モンテ・クリスト伯”」は、ゲストに安部譲二さんが出演していて盛り上がった回だった。

(NHK側)

「Rの法則」「テストの花道」は、主に高校生を対象にした番組だ。「オイコノミア」は、夜遅い時間帯ということもあり、比較的年齢の高い視聴者に、経済を中心とした社会事象をわかりやすく見てもらおう内容だ。Eテレの番組は、対象をより明確にすることをコンセプトにしている。出演者は番組の趣旨、対象によって変えている。

- 2月20日(水)、27日(水)、3月6日(水)の「80年後のKENJI～宮澤賢治 映像童話集～」(BSプレミアム 後10:00～10:59)は、若い人や宮澤賢治を知らない人たちにも、興味を喚起する、表現がおもしろい番組だった。

NHK編成局
番組審議会事務局

平成25年2月NHK中央放送番組審議会（議事概要）

2月のNHK中央放送番組審議会は、18日（月）、NHK放送センターにおいて、13人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、視聴番組「為末大が読み解く！勝利へのセオリー スペシャル 世界とたたかう“逆転”の戦略」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、3月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	福井 俊彦（前日本銀行総裁）
副委員長	岸本 葉子（エッセイスト）
委員	青柳 正規（国立西洋美術館館長）
	大野 博人（朝日新聞社役員待遇論説主幹）
	倉重 篤郎（毎日新聞社論説委員長）
	紫 舟（書家）
	平 朝彦（独立行政法人海洋研究開発機構理事長）
	龍井 葉二（連合総合生活開発研究所副所長）
	田中ウヰェ京（(株)MJコンテス代表取締役、メンタルトレーナー）
	富士 重夫（全国農業協同組合中央会専務理事）
	細谷 亮太（聖路加国際病院副院長、小児総合医療センター長）
	若月 壽子（主婦連合会事務局）
	和田 章（社団法人日本建築学会会長）

(主な発言)

<為末大が読み解く！勝利へのセオリー スペシャル

「世界とたたかう“逆転”の戦略」(BS1 1月3日(木)放送)について>

- おもしろい番組だった。番組の中で、男性と女性の違いについて言及していたが、それが適切であったのか疑問だった。また、スポーツとビジネスの世界を比べていたが、オリンピックや世界選手権に向けて努力をすることと、ビジネスの管理、指導、事業の成功を無理に比べないほうがよいと思った。スポーツの指導に関しては、バスケットボール部の体罰による生徒の自殺という出来事があったが、そういったことも考えながら取り上げていくべきではないか。

(NHK側)

体罰のことは番組でも意識している。番組としても体罰に対するアンチテーゼとして、指導のあり方や若い人の育成について、さまざまな方法があることを提示していきたい。実績を残した人、指導を受ける側からも評価が高い人のことばは、指導のあり方やコミュニケーションの取り方として、よい手がかりになると考えている。

- バレーボール女子日本代表の眞鍋政義監督が、試合中にタブレット端末を見て何をしているのか、従来の根性型とは異なり、データ型と言われているのは何が変わったのか、そこを知りたかった。リーダー論というねらいはわかるが、実際にプレーしているのは選手だ。監督の視点は出ていたが、意識改革によって、選手たちがどう感じ、どう変わったのかも知りたかった。ビジネスで応用の利く教訓もあると思うが、教訓風にまとめると逆にインパクトが弱くなるので、あまり無理に結びつけようとしたくないほうがよい。
- とてもおもしろかった。「世界とたたかう“逆転”の戦略」をぜひ知りたいと思う一方で、日本は世界と戦うための戦略や勝つための技術を、スポーツでも産業でも、簡単に流出させすぎではないかと気になった。
- 野球などのスポーツで、データを駆使してさまざまな戦略を立てることは、ある意味古い話であり、これまでも行われてきたことだ。眞鍋監督の戦略のポイントは、データを重視して決断の材料にしたことで、組織を束ねるためのツールとして使い、スタッフも組織化し、きちんと戦略をもって進めたことだと思うが、これが

新しい視点かというところとそれほど目新しいという感じはしない。

「マネー・ボール」という有名な本がある。大リーグのオークランド・アスレチックスというチームが、選手の平均年俵が最も低い中で勝っていくという話で、映画化もされた。アスレチックスは、野球というスポーツを統計的に処理し、統計的に有利だがあまり注目されていなかった選手を集め、低コストでプレーオフに進出するチームを作ったのだが、その話に比べると、この番組はいまひとつインパクトに欠けた気がする。

また、スポーツの方法論は、日本の組織のあり方や社会の現場に通じるものがあると思う。現場は、野球であろうがバレーボールであろうが同じであり、オリジナルなデータを作って、それを読み解き、組織運営に生かしていく。特に人をどのように客観化していくかというところがポイントだ。そのメッセージは十分に伝わっていたので、よい番組だったと思う。しかし、あまりその部分を強調してしまうと、単なるサクセスストーリーになってしまう。ナビゲーターの為末大さんには失敗談などの陰の部分の深く読み解いて、指導者と一緒に考えていくような進め方で、掘り起こしてもらうことが必要だったのではないか。

(NHK側)

無理に実社会とスポーツの世界を結びつけることで、勝負の“あや”だったり、ヒューマンな部分など、番組の味わいの部分が伝わりにくくならないように気をつけて、演出方法を改善していきたい。サクセスストーリーの中に、さまざまな試行錯誤や“トライ・アンド・チェンジ”のプロセスをきちんと深読みできるようになることが、番組の目指すべきものだと考えている。

今回は、データを活用したバレーボールを取り上げたが、今後は個人スポーツをはじめ、さまざまな競技や選手を取り上げていく。個人でメンタルや肉体のトレーナーなどを集めてチームを組み、組織づくりから戦略づくりまで行っている事例や、海外の指導者、スクールなど、さまざまな活躍の事例や関心の高いものにスポットを当てていきたい。

- いまスポーツに人気があるのは、世界がボーダレスに相互交錯している中で、輪郭がはっきりして、その中で完結していること、原因と目的と結果があって、作戦、戦略がストレートに結果として出るからだ。世界が複雑になればなるほど、スポーツの仕組みとわれわれの社会の仕組みはますますかい離して、だからこそ人気が出る。そのため、これからもこうした番組は人気が出ると思うが、それを実社会に適

合させようとする、とんでもなく距離がある。そういうことを認識し、軽やかさと自虐気味なところ、遊びの部分を入れて作れば大人の番組になると思う。世間が複雑になるなか、閉ざされた世界はみんながあこがれる世界であり、そのことを作る側がどれだけ認識しているかが、番組の厚みを増すことにつながると思う。

- 医療の領域でも、データにのっとった“エビデンス・ベースド・メディスン（根拠に基づく医療）”と“ナラティブ（語らせること）”によって浮き上がってくる人間の両方がないと成立しないところがある。ヒューマンな面を見せるために、スターティングメンバーに起用した控えの選手に、欠場した選手のユニフォームを内側に着て試合に出場することをたずねていたエピソードは、多少わざとらしく感じた。選手ひとりずつの関係や、選手自身がデータで操られることについてどう感じているのかなどについて、また、チームプレーと個人で競技することの違いや、データで操られることの意味合いなどを、為末さんが“走る哲学者”として、突っ込んでいけばおもしろかったのではないか。
- 番組を見て、スポーツの世界が分業化されていることや、それを監督やコーチが個性でとりまとめていることもよくわかった。試合中にコートでデータを入力しているアナリストに驚いた。コートを45分割し、どのエリアにボールが落ちたかを記号で入力していたが、瞬時に判断しないと間に合わない。こうした裏方の人たちがいることで、データ主義は成立している。そこをもう少しクローズアップしてほしかった。彼らの苦労や、ほかの国のチームの状況についても知りたかった。また、スポーツの世界では、ことばで表現することが得意でない人も多いが、為末さんは的確に話を引き出して、これからも楽しみだ。
- おもしろい内容だと思った。データがテーマの1つだったが、単にデータを紹介するだけの番組はこれまでもあったので、眞鍋監督自身が試合中に情報端末を使っていることや、データ入力に携わっている人がたくさんいることなどをクローズアップしていたら、さらにおもしろかったと思う。為末さんは人材としては適しているが、哲学者という位置づけがピンと来なかった。哲学者のような雰囲気歩いていく演出はいらなかったのではないか。
- スポーツにおけるセオリーをビジネスに置き換えるには、そもそもあるセオリーに当てはめ、枠組みを小さくして伝えないとわかりにくい。例えば、組織心理学やリーダーシップ、チームワークに特化したリーダーシップセオリー、チームワークセオリー、さらにモチベーションに焦点をあてたスポーツ心理学のセオリーなどもある。しかし、この番組ではどの部分に特化して、“勝利へのセオリー”として伝

えなかったのか、ポイントがぼやけている感じがして、もったいなかった。

眞鍋監督の戦略でいちばん重要なことは、トレーニングの5側面をとてもうまく使っていることだ。トレーニングの5側面は、スポーツ心理学の場合、身体、技術、戦略、心理、哲学の5側面を指導者がバランスよく鍛えることでトレーニングが可能になるというセオリーで、これはビジネスマインドの人たちに受け入れやすいもののひとつだ。この5つは、経営者や営業マン、新入社員や20代の人間にもわかりやすく当てはめることができる。

また、スポーツでは、監督自身が感覚で指導をしていることもたくさんある。たとえば、右脳と左脳の役割といったわかりやすい切り口にすれば、出演する指導者のためにもなり、番組もシンプルになる。科学的根拠のあるセオリーに当てはめて話を進めることで、為末さんの良さも出る。為末さんはプレーヤーとして極めた人だが、組織づくりについては一步下がった雰囲気が画面に出てしまっている。為末さんが極めた限界へ挑戦する力や、逆境対処能力が生きるような役割を考えていくことも必要だと思う。

- スポーツのセオリーについて、ビジネスからのニーズはあると思う。書籍でいえば、スポーツの世界の人のことばを多くの人たちが読みたがっている。それはスポーツノンフィクションやドキュメンタリーだけではなく、どちらかというビジネス書を読む人が読みたがる。ビジネス書を読む人は、自分がまったく知らなかったことを読みたいというより、自分がうすうす知っていたことを読みたいという特性がある。その意味で、まったく目からうろこが落ちることを示されるよりも、ある程度昔から言われていることを、いかに現代風に見せるかが、こういう番組を見たいと思う人のニーズに合うと思う。その点で、スポーツドキュメンタリーを期待する人からは物足りなく感じるかもしれない。しかし、ビジネス書を読み、経営学のこともおきたいという人にとっては、ほどよい理論があり、陳腐と評されるようなある意味“べた”な映像が含まれていて、“べた”であり陳腐であるということは、逆に最大公約数のところを取っていると思う。それはそれでよいと思った。

一方で、この番組が定時番組となるときの危惧が3つある。1つ目は柱の立て方で、番組内で立てられていた3本の柱が「戦略」「組織づくり」「決断」という広い範囲をカバーしているものになっていた。今後さまざまなスポーツ種目や人を扱っていくとしても、いつも同じような柱になってしまうのではないかという点。2つ目は選手からの検証が要らないのかという点だ。今回は28年ぶりのオリンピック銅メダルというパフォーマンスが物語っているので検証はなくても成り立っていたが、例えばこの理論で動かされた雇用者、ワーカーはどうだったのか、経営学としての関心で知りたくなる人もいると思う。3つ目は性別的な差異についてだ。女

性ならではの心理や、公平な人事であることを示すためにデータを取り入れたと読めるところがいちばんおもしろかったが、今回は一般の組織づくりに敷衍化していた。女性という個性を持った人に対し、どのようにパフォーマンスを上げさせていくかということは関心が高く、現在のビジネスの社会でもどう扱うかを知りたいところだと思うが、番組でそこまで踏み込んでいけるのか気になった。

- 優れた番組だと思った。ただ、強いチームになる最終的な要素は、選手の精神力が鍛えられるかどうか大きいと思う。その点で、データを駆使した戦略は選手の精神力の強さにどうつながるのか興味を持って見たが、最後までわからなかった。また、ロンドンオリンピックを見ていて、エースアタッカーの選手の調子があまりよくないと感じていたが、銅メダルをかけた韓国戦で、ほかのアタッカーにボールを集めたことは、別にデータを使わなくても試合の流れの中から自然に出てくる。データまで使ってその方針を示し、しかも、このような番組で詳しい解説があったときに、エースアタッカーの気持ちはどのようなものか。精神力を鍛えることとデータを駆使して、3位決定戦に至るまでは成功したが、これからチームがさらに強くなるための糧になるのかという点には疑問を感じた。

スポーツにもいろいろな種目がある。バレーボール、テニスのようにネットを隔てているスポーツと、レスリング、ラグビー、サッカー、ハンドボールのように体が接触する格闘的なものがある。また、単に勝敗だけでなく、いかに美しくプレーを仕上げるかという価値もある。スポーツの種目の違いによって人間の鍛え方は全く異なる。そのあたりも取り上げていくとおもしろい番組になると思う。

<放送番組一般について>

- 12月31日（月）の第63回NHK紅白歌合戦「歌で、会いたい。」を見た。楽団もステージからいなくなり、カラオケに近づいていると思った。新しいものを追いかけるのもよいと思うが、歌の番組と称する限りは、ときどき振り返って考える必要もあるのではないか。そうでないと、迷走するかもしれないと思った。
- 2月3日（日）のNHKスペシャル「沢木耕太郎 推理ドキュメント 運命の一枚～“戦場”写真 最大の謎に挑む～」を見た。沢木さんの書籍ではわかりにくく感じる場所もあったが、番組ではわかりにくいところを、CGを使った映像でわかりやすく見せていて、映像の力をつくづく感じた。番組は短い時間にもかかわらず、沢木さんが書いた文章とほとんど変わらずに伝えられていて、すごいと思った。

- 2月17日（日）のNHKスペシャル「なぜ日本人が・・・～アルジェリア人質事件の真相～」は、北アフリカという日本から離れた場所で起こった事件に対して、ここまで予算と人手をかけて取材することは、テレビではNHKでしかできないと思う。よくできていた。一方で、ゲリラの首謀者の自宅を訪れ、両親にインタビューをしていたが、日本人に対する謝罪を一言ずつ話ただけだった。せっかく現地まで行ったので、もう少し両親とのやりとりや生々しい証言、近所の人話などが聞きたかった。政府に取材が認められなかったなど、何か事情があったのかもしれないが、もし事情があったとすれば、そのニュアンスも入れるべきだ。せっかくよい番組で、あそこまでたどりついたのでに惜しいと思った。
- 2月10日（日）のNHKスペシャル「“核のゴミ”はどこへ～検証・使用済み核燃料～」はたいへんよい番組だった。放射性廃棄物という問題の深刻さのひとつは、人間の時間と放射能の時間の落差が途方もなく大きいことにある。人間の時間は、ライフサイクルではだいたい70年や80年くらいの時間のサイクルだが、“核のゴミ”は何万年という途方もない時間にわたって続く問題だ。このような深刻さをどうやって視聴者に伝えていくかがこの問題のポイントだ。1時間足らずのコンパクトな番組だったが、焦点がきちんと合っていて、わかりやすかった。国内の処分場選定の話だけでなく、イギリスやスイスの例も紹介し、単に日本だけの問題でなく、もっとスケールの大きい問題であることを提示していた。経済産業省の内部資料や、匿名による官僚の発言も取材できていて、説得力があった。これからも継続して放送してほしい。
- NHKスペシャル「“核のゴミ”はどこへ～検証・使用済み核燃料～」を見た。使用済み核燃料の処理ができない理由の1つは、核燃料サイクルによる再処理ができないことだ。番組では、その点について説得力を持って明らかにしていた。同じ日に、NHKスペシャル「終戦 なぜ早く決められなかったのか」を見た。官僚的であるがゆえに、それぞれの責任者が何回も会議を重ねながら結論をまとめられなかったということが大きな課題だと思った。原発の処理も含め、こうした検証作業を続けてほしい。
- NHKスペシャル「“核のゴミ”はどこへ～検証・使用済み核燃料～」を見た。使用済み燃料が原子炉建屋のプールに入ったまま膨大な量が積み上げられていて、ほとんど野放しのような状態であるということは、使用済み核燃料サイクル、再処理サイクルがうまくいっていないことを示している。番組ではその点を的確にとらえていた。大きな問題として指摘していたことを評価したい。原子力に関する最大の問題は、原子炉建屋のプールの中にばく大な量の使用済み燃料が保管されている

ことだ。原子力発電を再稼働するかしないかという以前に、早急に取り組まなければいけない問題である。もっと掘り下げ、繰り返しこの問題について特集を組んでほしい。外国で行われている燃料を鉄の容器に閉じ込める事例も示されていたが、そのような技術論も含め、こういうリスクを抱えていることを明瞭に事実として報道すべきだ。

- NHKスペシャル「“核のゴミ”はどこへ～検証・使用済み核燃料～」はすばらしい番組だった。東京電力福島第一原発の4号機の上に燃料が置いてあり、隣の3号機の水素が入って建屋が爆発した。もし、あの燃料がすべて爆発すると、東京にも被害が及ぶというシミュレーションが紹介されていた。しかし、起きていないことをわざわざ紹介しないでもよかったのではないか。

(NHK側)

NHKスペシャル「“核のゴミ”はどこへ～検証・使用済み核燃料～」について、指摘のあったシミュレーションは、NHKがシミュレーションをしたわけではなく、政府が事故直後に専門家に依頼してシミュレーションしたもので、そうしたものがあるといふ事実として伝えた。原発の中のプールに使用済み核燃料があるということだけでは危険性が伝わりにくい。危険性を理解してもらい、この問題に関心を持ってもらうために、政府がシミュレーションしたことを紹介した方がよいと判断した。

- 1月26日(土)から3週連続で放送されたテレビ60年記念ドラマ「メイドインジャパン」(総合 後9:00～10:13)をととても楽しく見た。全3回と最初に出たので3話完結とわかってよかった。大学生や社会人に学びの場を提供する取り組みを行っているが、そこで「メイドインジャパン」の話が出て、「同じように中国に渡った技術者を知っているが、とても生々しいドラマだった」という感想を言うひとがいて、すごいドラマだと思った。
- テレビ60年記念ドラマ「メイドインジャパン」はおもしろかった。しかし、1人の技術者が会社を辞めて中国に行っただけで、果たしてあれだけの騒動になるのか、そんなケースが過去にあったのかと疑問に思った。それだけ能力の高い人だったという想定で、日中間で起きていることを象徴的に表現したのかもしれないが、現実の物事はもっと複雑に絡み合っていて展開していると思う。ドラマはそぎ落とさないと作れないのはよくわかるが、力を入れて作られていた作品だけに、ストーリー

の展開は若干現実味が感じられないところがあって、そのあたりは残念だった。

- テレビ60年記念ドラマ「メイドインジャパン」は、物語としてはとてもおもしろかった。しかし、日本企業と一口に言っても、実際は株主の多くが外国人であったり、従業員が海外の工場の人であったりと、企業に国籍を付けて語ることがだんだん難しくなっている時代だ。ドラマとして描くときに、国家の威信をかけたせめぎ合いといった要素で描くのは違ってきているのではないかと感じた。
- テレビ60年記念ドラマ「メイドインジャパン」はドラマとしておもしろかった。かなりリアルな反面、家族にもスポットが当たっていて、登場人物の人間の厚みも描けていた。一方で、多国籍とか金融の世界についての部分がもの足りなかった。現在の日本企業では、ものづくりの技術者と四半期経営といわれている短期株主の間で、せめぎ合いをしている。ものづくり一辺倒では進めなくなっている国際競争は、リーマンショック以降さらに激しさを増している。例えば、2代目の社長に思い切った短期利益代表の役回りでも含まれていれば、リアリティーが増したと思う。
- ドラマ10「シングルマザーズ」について、現実と異なる部分もあるという声を聞いた。ドラマとして作る以上は、ある程度やむをえない部分はあると思うが、物語の終盤で、これまでドメスティックバイオレンスをしていた夫がある程度よい人になって明るさの見える終わりになっていた。現実はそれほど簡単なことではない。渦中にある人が、ドラマを見て期待を持ち、どうにかなると思ってしまうのが怖いという声も聞く。ドラマ10「いつか陽のあたる場所で」でもドメスティックバイオレンスのシーンが多い。いろいろな登場人物がドメスティックバイオレンスにかかわっていて、頻繁に夫からひどい暴力を受けている場面やエキセントリックな場面が出てくる。ドメスティックバイオレンスは身体的な暴力だけでなく、支配の構造で根が深いので、広く意見を聞いたうえで、作り方を考えてほしい。
- 2月10日（日）のETV特集「“ノンポリのオタク”が日本を変える時～怒れる批評家・宇野常寛～」を見た。ナレーションの“怒れる”ということばのアクセントに違和感があって、気になった。
- まる得マガジン「たった3分で若さ復活！これが正しいラジオ体操」を見て、一緒に体を動かしてみた。これまではラジオ体操は聞くだけだったが、映像で見ることにより、動作の方法がわかりやすく、とてもよかった。ラジオ体操をラジオで聞いている視聴者にも、より理解できる番組をラジオでも作ってほしい。

- 1月15日（火）のプレミアムアーカイブス ハイビジョン特集「ドキュメンタリードラマ 恋する一葉」を見た。大学生2人が樋口一葉にふんし、劇中で一葉のことばなどを反復していた。構成がうまく、感心した。
- 1月25日（金）のプレミアムアーカイブス ハイビジョン特集「さらば八月のうた 青春が終わる日」を見た。ある人気劇団が、26年間の活動を経て解散したことを取り上げていたが、青春が人生においていかに危険な時期かということを見事に表現していた。若いうちは、劇団に入って努力していればそこでは成功する。その中で、設立当初に主役を張っていた人が、自分の限界を知って30歳ぐらいで劇団を辞め、自営業となり現在は安定した生活を過ごしている一方で、26年間演劇を続けて50歳ぐらいになった劇団仲間が、いまからそれぞれ別の仕事に就かざるをえない状況を迎えていた。自営業に転身した人も呼んで、最後の公演を行っていたが、青春はいろいろなことができるものの、故に危険であるという、本当の青春が持っている意味を实によく描いているドキュメンタリーだった。
- BS時代劇「火怨・北の英雄 アテルイ伝」には、小説とミュージカルの印象が強いせいもあるが、期待を裏切られた。大和朝廷、大和政権、支配する側の論理、残虐性、価値観といったものが背景にないといけない。また、蝦夷（えみし）側の、北の大地の豊かな暮らし、自然と共生して生きる人間の価値観があって根本的な違いと対立がある。そのことが、蝦夷側の悲劇であり、つらく悲しい物語となっている。このドラマでは、戦国時代のように合戦の部分が中心で、そういったところの描き方が薄かった。全4回だったこともあるかもしれないが、もう少し時間を取って、深く掘り下げてアテルイを取り上げてほしかった。
- 1月27日（日）の宮崎局発地域ドラマ「命のあしあと」を見た。たいへんすばらしく、涙を流して見た。牛飼いの心情や心の軌跡、家族の心のストーリーをシンプルに描いていて、主人公のことばや、子どものことば、牛を守るための獣医が牛を殺している不条理を切々と訴えることばなど、それぞれの登場人物のセリフがすばらしくて感動した。きれいな映像だった。ただ、長靴と作業用の服が汚れておらず、新品のように見えてリアリティーに欠ける部分があった。
- 中国艦艇によるレーダー照射事件は、起きたときと発表の時期が少しずれていて、扱い方が難しい事件だったと思う。NHKでは全国ニュースのトップで取り上げていたが、新聞の場合は1面のトップにしたところもあれば、2番手ぐらいのところもあるなど、さまざまな判断があったと思う。このような問題は、大きなニュース性がある一方で、報道したことが跳ね返ってきてそれがプラスにならないかもしれ

ないという部分があり、政治的な配慮と両方の思惑の中で各紙も報道していると思う。NHKはどのような判断で報道したのか。今後も類似の事態が構造的に起こりうる可能性がある。そのときの報道スタンス、姿勢はどうなっているのか。中国の国営テレビ、CCTVとの意思の疎通、意見交換などを行ったことはあるのか。

(NHK側)

政治的判断は行っていない。最初に総理官邸で発表があり、防衛大臣のことば、アメリカの反応、日本の防衛省以外の反応、中国の反応、その他の反応など、取材したものを淡々と伝えた。大きなニュースなので、その判断からトップニュースとして出した。類似事態が起きた場合の判断は、総理官邸や政府の対応もさらにレベルの上上がったものになると思うので、われわれもそれに合わせた対応をする。是々非々、自然体で取り上げ、中国の言い分も正確に伝える。この件について、CCTVとの意見交換はしていない。

- 「ワールドWaveモーニング」で世界のニュース番組の主要なニュースを放送している。中国、韓国、フランス、スペイン、ドイツ、BBC、CNNなどのニュースが流されるが、NHKの代表的なニュース番組の「NHKニュース7」と比較すると、「NHKニュース7」のほうに違和感を持ってしまう。「NHKニュース7」の男性アナウンサーはすばらしい透過性のある声を持っていて、とても明快に耳に入ってくる。一方で、女性アナウンサーは声の透過性や質があまりよくないように感じる。同じニュース番組の中で、異なる基準で男性と女性のアナウンサーを選んでいるように感じる。また、各国のキャスターは十分にニュースをそしゃくしている。そういう気がするだけかもしれないが、そしゃくしている態度をうかがい知ることができる。そして、キャスター席に座ってニュースを支配しているように見える。そのあたりの安定感というか、知的な構成のしかたを「NHKニュース7」からは感じ取れない。構成をする側にどのような意図があって、アナウンサーを立ててニュースを伝えているのか。

(NHK側)

声の質は個人の資質で、男性アナウンサーの声は聞きやすく、鼻腔に反響する声だ。ゆっくり読むようにしているので、スピードは男性も女性もほぼ同じで到達度としてもそれほど変わらない。土曜日と日曜日のメインの女性アナウンサーは、政治や経済ニュースについての知識が深く、レベルの高いプ

レゼンテーションができるため起用している。また、キャスターの選定は、年に1度、放送総局のキャスター委員会で決めている。恣意的な選定ではなく、全体でオーソライズする形で選んでいる。声の聞きやすさ、聞きにくさは、聞いた人の年齢や使っている機材などによっても印象が異なるので、なるべく平均的に到達度が高くなるようにしている。

- 女性の視点が欠けている部分があるのではないか。

(NHK側)

キャスター選定の事前の段階で、アナウンス室の女性デスクがセレクションに参加している。そのうえで、制作部局から番組の特徴に合わせたキャスターの要望を受けてセレクトし、最終的な決定をキャスター委員会で決めている。

- スポーツの世界と同様に、女性のキャリアパスのアクティビティーがないと内向きになってしまう。男性と同じようにキャリアパスの範囲を大きくするべきではないか。

(NHK側)

全国にいるアナウンサーは、多くの視聴者に支持される番組に関与することがひとつの目標になっている。女性アナウンサーは早くそのような番組を担当したいという気持ちが強く、たいへん熾烈（しれつ）な競争の中で自分なりの訓練をしていると聞いている。そのことが、地域局で良い放送を出すことにもつながっている。競争という意味では、男性と変わらないのではないかと思う。

- その場合、スペシャリストとジェネラリストという点についてはどうなのか。

(NHK側)

番組によって異なる。たとえばEテレの「サイエンスZERO」を担当しているアナウンサーは男性も女性も科学の分野にたけた人材だ。それぞれ、向き不向きもあるので、スペシャリストについては、本人の専門性などを考えて意識して配置している。

(NHK側)

ニュースキャスターは、立っている番組もあるし、座っている番組も両方ある。「NHKニュース7」や「NHKニュース おはよう日本」は立っているが、「ニュースウオッチ9」は座っている。昔のNHKのニュースは座って読んでいた。それは、今ほどテレビが発達しておらず、映像も1枚の画像で、ほとんどラジオと同じニュース原稿を読んでいるだけのスタイルだったからだ。現在のように、さまざまな映像を使い、大きな画面で説明するには、キャスターが立っている方が動きやすい。「ニュースウオッチ9」のキャスターは通常座っているが、対談するときなどは大きな画面を挟んで、立って話すことがある。そこは演出を考えながら行っている。

外国のテレビはとてもシンプルな作りで、だからストレートに伝わるというよさはある。NHKのニュースについては、「テレビの特性を生かしてわかりやすく伝えてほしい」という視聴者の声に応じて、現在のスタイルで行っている。その点は賛否を含めて、いろいろな意見があると思う。現在の演出は、財政や外交の問題など、原稿を読んだだけでは理解しにくいものを、小道具や大画面を使って見せる工夫を行っている。原稿も、政治部、経済部、国際部などのさまざまな部から来たものをいったん整理し、画面に合うように書き直している。BBCやCNNは座りながら伝えているが、小道具や大道具を使わないため座ってられる。どちらがよいかは、視聴者の意見も取り入れながら、今後、議論して考えていきたい。

- 手話放送について、手話をしている人の横に出る2行の字幕で、2行目のルビが左側に出るのは少し違和感を覚えたが、これが、聴覚障害のある人にとっては一般的なものなのか少し気になった。

(NHK側)

手話放送のルビについては、手話放送を利用する人たちの意見をもとに、読みやすさ、見やすさに配慮して実施している。文字が2行あるときに、右側の漢字のルビは右側に出し、左側の漢字のルビは左側に出している。一見すると珍しく見えるが、平仮名、漢字、平仮名、漢字と配列すると、漢字だ

けを読む人に読みにくいか、漢字の両サイドにルビがあると、どちらのルビかわからなくなるという意見などに配慮したものだ。

- 番組のタイトル文字について、力が入っていないものを見ると“NHKっぽい”という印象を受ける。何となくフォントを使い、何となく色を付け、番組の文脈に合っていないものを安易に作っていないか。フォントの選定や色の付け方、デザインなど、民放局に比べてかなり見劣りする。
- 照明について、いくつかの番組で女性の目のあたりに強い影が出ているのが気になった。もう少し影を消し、見ている人に見やすくする方がよいのではないか。
- テレビに出演するときに、頭を下げたりお辞儀をする必要性について少し気になった。美しい立ち振る舞いについて、NHKがお手本となる動きを定めると、見ている人が美しい所作を感じられると思う。

NHK編成局
番組審議会事務局

平成25年1月NHK中央放送番組審議会（議事概要）

1月のNHK中央放送番組審議会は、21日（月）、NHK放送センターにおいて、11人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、12月の審議会に諮問し、可とする答申のあった「平成25年度国内放送番組編集の基本計画」が、1月15日の経営委員会で議決されたことを報告し、同計画に基づき各波の番組改定の要点や新設番組の概要などをまとめた「平成25年度国内放送番組編成計画」について説明した。

続いて、経営計画における「達成状況の評価・管理」（24年度第3四半期・10～12月）について説明した。

その後、NHK短歌「短歌 de 胸キュン 冬の増刊号（後編）」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、2月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

- | | |
|------|----------------------------------|
| 委員長 | 福井 俊彦（前日本銀行総裁） |
| 副委員長 | 岸本 葉子（エッセイスト） |
| 委員 | 青柳 正規（国立西洋美術館館長） |
| | 小田 尚（読売新聞東京本社専務取締役論説委員長） |
| | 倉重 篤郎（毎日新聞社論説委員長） |
| | 紫 舟（書家） |
| | 田中ウヰェ京（(株)MJコンテス代表取締役、メンタルトレーナー） |
| | 富士 重夫（全国農業協同組合中央会専務理事） |
| | 細谷 亮太（聖路加国際病院副院長、小児総合医療センター長） |
| | 若月 壽子（主婦連合会事務局） |
| | 和田 章（社団法人日本建築学会会長） |

(主な発言)

<「平成25年度国内放送番組編成計画」について>

(NHK側)

個別の話に入る前に、今回の編成計画に取り組むにあたって特に努力したことをお話ししておく。NHKは放送が生産物であり、商品である。放送でNHKの役割を果たし、視聴者の皆さんから評価を受ける。そのことを基本にみんなで議論することにした。これまでは、専門の分野が一生懸命に勉強して作っていたが、もう少しすそ野を広げて、全役員、放送が直接の担当でない役員も含め、いろいろな立場でどのような編成計画がよいのか議論した。前々回の改定まであって前回なくなった番組の中で、残すべき番組があったのではないかといった意見を踏まえ、考え方を整理していった。中央放送番組審議会では放送の質などを全体として評価してもらうことも反映し、放送の編成計画全体について、みんなで議論をして進めた。

- 改定の内容が多種多様で、これだけ新しくできる番組があるのかと感心した。毎年、番組改定をしているが、今回は新設番組が多く感じた。これまでの改定との量的な変化と、特に力を入れたものはどのようなところかを聞きたい。また、データ放送、字幕放送、2か国語放送、解説放送を私は1回も利用したことがないが、このニーズと活用のされ方はどのようなものなのか。

(NHK側)

量的な変化について、改定率は総合テレビの25年度は22%だが、24年度は21%であり、例年とそれほど大きく変わっていない。放送番組時刻表では「大河ドラマ」、「連続テレビ小説」なども改定を表す赤色で表示しているので、見たい目は多く見えるかもしれない。

今回の改定で力を入れたところは、各メディアそれぞれポイントはあるが、特に総合テレビの土日の夜間、「NHKスペシャル」や「土曜ドラマ」、午後6時からの家族や幅広い世代にご覧いただけるようなところに力をいれた。

データ放送については、接触者率が11.3%で、接触者

率が向上している。データ放送をはじめ、多様なサービスを利用してもらっている。

<経営計画における「達成状況の評価・管理」

(24年度第3四半期・10～12月)について>

- 総合テレビのジャンル別世帯視聴率で、「ドラマ」がかなり落ち込んでいる。数値として大きいと思う。理由の1つは枠組みの設定で、「連続テレビ小説」と「大河ドラマ」は枠と回数が固定化されそこに強引にドラマを突っ込んでいることがありはしないか。「大河ドラマ」は使命を終えたのではないか。最近では、だれもが知っているような主人公がだんだん少なくなり、枠があるから無理して作っている感じがする。しかも、お金をかけることが前提になっている。いつまでも決まり切った番組を続けることは時代にも合わなくなっており、ドラスチックに考え直さなくてはいけないのではないか。一方で、韓流ドラマが視聴率を得ている。そういうこともあるので、少し考えてほしい。

BS1は、波の接触者率の週間リーチが下がっているが、BSでも政見放送は放送されていたのか。数値を見ると、これだけ下がっているのはどこかに問題があるのかと思われる。

(NHK側)

BSでは政見放送を行っていない。視聴率が下がった理由として、前期にはロンドンオリンピックがあり、視聴率が高かったということがある。

「ドラマ」のジャンルの視聴率が下がっていることは事実だが、前期の視聴率が通常よりもかなり高かったこともあり、大きく下がって見えている。

「大河ドラマ」「連続テレビ小説」については、古くから放送されているので、ご指摘のような意見もある。その一方で、放送してほしいという声もかなりあり、よく考えるべき問題だと思う。大河ドラマ「八重の桜」の第1回は、視聴率が20%を超えていて、過去5年でも4作品が20%を超えている。そして、放送終了まで20%を超えたものが、5年で2作品ある。正直に言って、「平清盛」は視聴率的によくなく、途中でいろいろご批判もあった。会長からも、「大河ドラマ」はNHKの番組にとってきわめて大きな存在で、経営的にも

大きな問題なので、よく分析するよう指示があった。現場だけでなく、役員レベルでも、さまざまな検証をしている。昨年1年間、視聴率が振るわなかったことは事実であり、「大河ドラマ」は今年、来年と視聴率が悪いままであれば、根本的に見直さなければならない事態になると思う。しかし、昨年1年間の結果を見て、すぐにその枠を変えるところまで踏み切るのは尚早だと考えている。

(NHK側)

「大河ドラマ」の舞台となる地域では、経済効果はとても高い。また、NHKは、視聴率を気にしないで、よいものを作る、NHKにしかできないものを作る、という精神が基本だが、日曜日のゴールデンタイムに放送するので、皆さんが楽しんでご覧になれるようなものがよい。そのような番組の作り方をしていこうということだ。番組制作に一定のコストをかけて見ていただき、見ていただくことで受信料につながる。「大河ドラマ」の視聴率は、現在でも高い。コストパフォーマンスも含め、経営的に生かすということで努力をしていく。

- 地方の経済活性化に役立つということでは、日本に地方公共団体が50ぐらいあるとして、50年に1回だ。そのとき、カンフル剤のようにはなるが、一瞬で終わってしまう程度のものではないか。民放のドラマでは、主人公の行く地域の伝統工芸をドラマの中で取り上げていた。そのような視点があって行っているのか。単に場所を選んだから、その1年間だけ活性化するのかなども、経営的には考えるべきではないか。

(NHK側)

地域の活性化は1つのテーマだ。地域の活性化を目的として地域を取り上げる番組は、他にもきわめてたくさんあり、推進していく。「大河ドラマ」には、もう少し大きな、全国的な広がりがある。地域の期待はいまだに大きい。一度活性化したものは放送終了後も地元での努力が続き定着していく。そのような効果もあるので、「大河ドラマ」を努力して制作していければと思う。

- 総合テレビで「7. 人生を豊かにする情報やヒントが得られる」が、前回よりマイナスになったことに関連し、地域経済の活性化の観点で地域を取り上げた番組が、人生を豊かにするなどのヒントを得られる部分があると思う。たとえば、12月17日(月)、18日(火)、19日(水)と3日連続で夜10時台に放送していた「嵐の明日に架ける旅」では、沖縄県宮古島、京都市、高知県馬路村といった、過疎化が進み、1次産業が中心の地域を取り上げていた。宮古島では地下ダムやメガソーラーの取り組みを、京都市では女子高校生たちが伝統野菜を守りスイーツなどさまざまな形に展開する取り組みを、ユズで有名な馬路村は森林の再生を図る取り組みを紹介していてよい番組だった。一方、地域を紹介する番組は、朝早い時間や夜遅い時間であることが多い。このような特番は、もう少し多くの視聴者が見やすい時間帯や、放送の期間を考えるなどして、接触しやすい工夫がいていいのではないか。

- 7月の世論調査において「3か年の基本方針」の「7. 新規性・創造性」は期待度60%に対し実現度が20%ぐらい低く、40%という結果になっているが、NHK全体を見ているとわかるような気がした。NHKによい番組はたくさんあるが、視聴していて一消費者として番組を消費した感じがする。NHKは日本全体の社会の縮図のようなものでもある。今は日本全体が大げさにいうと、昭和懐古しているようなところがある。たとえばシンガポールや上海では、新しく建設されたビルは未来を感じさせるが、日本で建設された新しいビルは、どこかで見たことがある懐かしいようなビルが多い。人は、見たことがないものや知らないものを新しいと感じ、刺激を受ける。現在とか、過去ではなく、現在の延長の未来でもなく、これからやってくる新しい未来を取り上げる機会を増やしてほしい。“消費者を消費させる番組”ではなく、だれもまだ知らない未来を知ること、クリエイティブな人たち、“生産者を生産させるような刺激を与えてくれる番組”になるのではないか。

<NHK短歌 短歌 de 胸キュン 冬の増刊号(後編)

(Eテレ 12月30日(日)放送)について>

- とても楽しい番組だった。きちんと教育されている純真な子どもたちの姿を見て感動した。番組が訪れた廃校になる小学校は、立派な体育館で、昔は大勢の児童がいたことが想像でき、少子高齢化や過疎化のことも一緒に考えさせられた。特に、東北の被災地で、津波に流された学校を新たにどこに作ればよいか、文部科学省と取り組んでいるが、少人数の学校を統合して山側に作るということは、子どもたちにとってつらいことかもしれないと思った。出演している小学校の子どもたちには、いじめの気配もなく、みんながこのように育ってくれるとよいと思った。また、講

師役の佐伯裕子先生の短歌の直し方もなかなか上手だった。もし佐伯先生が短歌を詠んだら、どのような作品ができただろうかと思った。

- 短歌対決のように、競ったほうが、いろいろな意味でモチベーションが上がることは理解する。私は短歌のことにあまり詳しくないので、技術的なポイントなのか表現力なのかなど、何がよかったかをわかりやすく解説すると、よかったのではないかと思った。

日本語教育や、伝統的な言語文化を背景とする番組であれば、NHKはことばの品をなくすことなく、ユニークさ、おもしろさ、フレンドリーさを伝えることができるはずだ。出演者が「すげー何とかじゃん」といった言い回しをしていたが、「とても〇〇です」という言い方をしたとしても、温かい人間関係は見たのではないか。そのことは母親として気になった。

また、牛とふれあう場面で、だれ1人として感情表現を出さないことに興味を持った。感じることばが短歌を作る前に一度も出ることはなく、考える目線、どちらかといえば左脳表現をみんなが行っていた。これは、短歌にするまでは感情を出さないようにしていたのか。たとえば、ミルクを搾ったときに「温かい」とか、「休みがないのですか、たいへん」とか、「朝早いのに、すごい」など、それがたいへんそうに感じたとすれば感じる表現になるかもしれないが、「これは楽しそうですね」「おもしろそうですね」という場面が一度も出てこなかったのはなぜなのか、とても興味深かった。

初めて短歌にじっくり触れたとき、有限性のせつなさに感動した。番組を見て、その短歌の有限性が、学校の廃校という有限性と結びついて、人の心を動かすように感じた。心を動かされた番組だった。

- 「NHK短歌」の時間帯の中での試みであり、早い時間帯での放送になるのはやむを得ないが、小学生が日曜日の早い時間に見てくれるのか疑問に思った。

(NHK側)

番組には、午後3時から再放送枠がある。モニター報告では、20代の視聴者などから、夜の遅い時間に放送してほしいという意見も多く寄せられている。

- 出演者の人選について、短歌は伝統文化ということであれば、格調をある程度保つことが重要ではないか。

敏感になるべき領域だと思う。短歌が一般的になることはよいが、選者の先生が一首詠んでみせて、短歌はこういう場所にいるときはこのような感じで詠むという

ことを伝えるなどしたほうがよいのではないか。

- 短歌のすそ野を広げ、定型詩の伝統を継承しようとする番組の趣旨に共感した。この「冬の増刊号」はその中でも小学生を意識して、ものをよく見よう、自分の気持ちでよく向き合おう、そして感じたことを五・七・五・七・七にすれば短歌になる、少しの違いでより短歌らしくできるということを伝えようとしていた。あえて1対1の対決方式を取り入れたことは、飽きさせずに見せるという副次的な意図もあったと思うが、2つの歌の違いを見せることで、より短歌らしくなるということを伝える意図があったと思う。

しかし、対決方式の演出が十分に生かし切れていない印象もある。出演者の個性の強さもあり、勝った、負けたということに視聴者の意識が向いてしまい、こちらの短歌のほうが選者はよいと思ったという部分が伝わりにくかった。先生からのコメントに加え、画面でも作品に棒線を引くなど工夫していたが、少し弱かった。

廃校になる小学校のシーンでは、勝負をせずに賞を出す演出に変えていた。背景はわかるが、制作者が対決方式で短歌を伝えようとする企画を途中であきらめてしまったような感じが否めない。定型詩を取り上げた番組は、この1年ほど活性化に向けたさまざまな試みをしていると思う。その方向は応援しているが、活性化の具体的な方法に関しては、試行錯誤の途上だという印象だ。

(NHK側)

対決で優劣の理由をきちんと述べる必要があることはご指摘のとおりだ。なぜ、この句が正しいか、どうしたらよくなるかは、時間を取って伝えなければいけないと、常々感じている。コーナーを多少減らしてでも、納得して見てもらえるように、少しでもスキルアップにつながるような演出、番組構成にしていく。

(なお、欠席の委員から文書で以下の意見が寄せられた)

- ほのぼのとした雰囲気でもよかった。廃校になる小学校の子どもたち8人と短歌作りについて学ぶのは、おもしろいアイデアだ。しかし、小学生たちをはじめ、出演者たちが、その場で感じるままに作った作品だけではどうしても全体に平板な感じが否めなかった。いくつか感心するような作品の紹介があれば、もう少し興味が深まったと思う。番組後半は、廃校になる学校と子どもたちのドキュメントのようになり、それはそれで視聴者の注意を引きつける力になったと思うが、短歌作りという番組の焦点がややあいまいになった印象だ。

<放送番組一般について>

- 12月23日(日)のNHKスペシャル「日本国債」(総合 後9:00~9:58)は、いま最も注目される問題について、丁寧でわかりやすい解説番組だった。目配りのいい取材とともに、現在進行形の話であるという雰囲気もよく出ていた。不思議な居酒屋のマスターを登場させて、ともすると硬い話に終始しがちな内容が親しみやすいものになっていた。
- 1月6日(日)のNHKスペシャル「父と子 市川猿翁・香川照之」(総合 後9:30~10:28)を見た。正月公演に至る300日に及ぶ密着取材は、緊迫感あふれるドラマそのものだった。黒子に徹し切ったカメラワークによって、歌舞伎の舞台をも凌駕(りょうが)する格調高い“作品”になっていた。
- 1月13日(日)のNHKスペシャル「世界初撮影! 深海の超巨大イカ」(総合 後9:00~9:58)も、昔「海底二万里」で読んだ、大きなイカがスクリーンに絡んだ場面をほうふつとされる映像だった。あれだけ時間をかけて、大勢の学者が取り組み、いろいろな形で寄与して、あそこまで追い込んでいくドラマを上手に作り上げたのはなかなかのものだった。自然番組を作る手間暇と予算は大きなものだと思うが、それだけのものをかけて作っているということを示してもよいのではないか。
- 12月29日(土)の特集 双方向解説 そこが知りたい! 「新政権で日本はどう変わるのか」(総合 後11:25~前4:00)はとてもおもしろかった。長時間の放送で、一方的に意見を言うのではなく、ディベート的な場面もあってすばらしいと思った。一方で、双方向と題しているが、双方向は成り立っていないのではないか。また、司会の柳澤秀夫解説委員長も「1分で」と言っているが、解説委員は1分を超えて話している。新聞記者ならば、800字で書けと言われてたら800字でしか書けない。結局、長時間になって自分の意見の繰り返しになっている。プロとしてテレビに出る解説委員として、いかがなものかという感じがした。また委員の発言で、日本の地理的な条件のことを地政学的条件と言っていた。地政学とは、地理的な条件に政策、政治が絡む意味になるので、解説委員としてあってはならない言葉づかいの間違いではないか。
- 去年6月の国連持続可能な開発会議(リオ+20)のときに、国連大学などが「Inclusive Wealth Report 2012」のレポートを出している。ケンブリッジ大学のパーサ・ダスグプタ教授は、GDPは企業の四半期ごとのボリュームを示すだけでその豊かさを示しているものではない、本当の豊かさ

を数値化しようと述べている。ヒューマンキャピタル、ナチュラルキャピタル、フィジカルキャピタルに分けて評価すると、アメリカが1番で111兆ドルぐらい、日本が52兆ドルぐらいで2番、中国が26兆ドルぐらいで3位だ。それを人口当たりで割ると、2008年の段階で日本が世界一だ。日本は国民が何年間の教育を受け、職業的なスキルがどれだけあるかというヒューマンキャピタルが圧倒的に大きい。これはすばらしい統計で、2008年に世界でいちばん豊かということよりも、これからの日本が維持していかなければいけない富の部分、あるいは日本の教育というものがいかに重要かということを示していて大切なリポートだ。どこのジャーナリズムもあまり大きく取り上げていない。一方、初めての国際的な国の豊かさを測ったりリポートのため、欠点も多い。夜のミツバチの活動でミツバチを計算するときにはミツバチの生産量だけではなく、花粉で交配させるところまで、経済的に取り上げなければいけないが、それは取り上げていないとリポートに書いている。しかし、そういうところをたたきだけではなく、よいところも公平に示すことが日本の方向を示すことではないか。

- 委員から話のあったリポートは、とても優れたリポートで、日本の学者も研究している。日本のヒューマンキャピタルについて、教育は十分に受けたが、その教育のクオリティについても伸ばさなければならない。物事を考え、自分の力を信じて挑戦できるところまで社会にもまれて築き上げられた人間となると、日本のヒューマンキャピタルは意外と弱いのではないかという議論もある。日本はそうしたことをブラッシュアップし、その線に沿ってキャピタルを築かなければいけないのではないか。

(NHK側)

「特集 双方向解説 そこが知りたい！」で、1分という発言時間が延びてしまったことについては、プロとしていかなものかと感じている。新聞でいえば、字数が決められているところで発言するのは鉄則であり、各解説委員に伝えていく。

双方向性についての指摘だが、受信用のファクスをスタジオに仮設し、いただいた意見を番組に取り込もうとしている。しかし、正直なところ、番組の中にストレートに入るような質問、意見は限られている。また、現在はツイッターのようなSNSを使って、リアルタイムで視聴者と結んでいくような仕組みはできていない。今後、視聴者の意見をくみ上げる、インターネットを利用するような、双方向性の強化を図って

いきたい。

言葉づかいの間違いは指摘のとおりだ。次の番組で同じ間違いをしないよう、反映していく。

- 「サラメシ」は好きな番組だ。人のお昼ごはんをのぞきたいという素朴な欲求にこたえる形から、さまざまな仕事を取り上げ、仕事ぶり、責任感、勤勉さ、挑戦、チームワーク、協力、いろいろな仕事の側面を見せてくれる。労働を応援する番組であり、仕事カタログにもなっていると思う。
- 1月20日(日)のダーウィンが来た！生きもの新伝説「珍獣ズキンアザラシ 鼻から風船が！？」では鼻を膨らませるアザラシの話が、本邦初の映像ということだったが、よく撮れていた。
- 1月1日(火)の新世代が解く！ニッポンのジレンマ 新春スペシャル「格差を超えて僕らの新たな働き方」(Eテレ 後11:00～前1:30)では、論点の深まりを期待したが、残念な結果に終わった。企画の意図が不鮮明で、若手の論客たちが新たな働き方を体現する当事者であるとしても、議論の仕分けは必要だ。議論に関しては、論点らしきものが次々と上滑りするだけで、印象に残る発言はほとんど見られなかった。具体的論点に定着した議論を進めるか、その問題に関する先輩格が進行役として議論をリードする、といった工夫が必要だと思う。
- NHKが見てほしいと思っている若年や、疲れた大人たちに人気のある番組は「Eテレ2355」ではないか。「Eテレ2355」、「ピタゴラスイッチ」は、考えるよりは視覚から刺激を受けるような番組だ。このように、子どもから大人まで、年齢層を問わずに、おもしろいと思えるような番組を増やしてほしい。
- 「ラジオ体操」を「ラジオ体操」という名称のまま総合テレビで放送してほしい。子どものころ、夏休みには毎朝ラジオ体操をして、社会人になっても会社で始業前に体操をした。あるアーティストもコンサート前にスタッフ全員でラジオ体操をしている。それほど、ラジオ体操は価値があって、すごいと思う。地域や時代によって、ラジオ体操のしかたが違うように感じるが、本来どのように体を動かすのか、NHKとして視覚的にも教えてほしい。

(NHK側)

ラジオ体操を真剣にやると結構ハードだ。全国、県ごとにラジオ体操連盟があって、その全国大会を毎年開催している。

観光バスで人が多く集まって、大会場で開かれる。そのような組織が、今でも厳然と生きている。ラジオ体操をもっときちんとやるべきではないかと思うので、今後の参考とする。

- 1月17日（木）の「このままじゃあ終われない 出井伸之と“やめソニー”たちの逆襲」（BS1 後9:00～9:49）を見た。一貫して日本の製造業は逆襲できるのかという問題意識をさまざまな番組で取り上げているが、いずれも興味を持って見ている。日本経済は駄目だと言われるなかで、しっかりやっている人たちがいることを映像で明らかにしていることは救いにもなるし、さらに紹介してほしい。ディレクター、記者が長い取材経験の中で培った人脈や、ひとつの大きな見識をそれぞれ持っていると思うが、そういったものが嫌みではなく、よく生かされている印象を受けた。元社長に「あなたがソニーをつぶした責任者ではないか」と聞いた質問は、視聴者の気持ちを代弁していて、また元社長もなかなかの受け答えをしていた。信頼できる取材相手であるからこそ、答えてくれたのではないか。番組の展開は、なぜソニーがあそこまで発展したか、いまなぜ不調なのかをよく解析している。ソニーを辞め、さらにソニー的なものを求めている3人の元社員を紹介していたが、取材も行き届いておもしろかった。一方で、現在ソニーに残っている人たちが、どのように思っているのかを取り上げると、メリハリが利いてよかったのではないか。
「おれたちはこのままじゃあ終われない」という趣旨は政治の世界でも必要な視点だ。政権交代があり、前政権が否定されているが、国民から見るとなるほどといわれる部分が必ずあるはずなので、映像と証言で、日本の政治はまだ大丈夫だという観点から番組を作してほしい。

- 「このままじゃあ終われない 出井伸之と“やめソニー”たちの逆襲」は、ソニー凋落（ちょうらく）の責任者という批判もある元社長を登場させ、そのことについて直撃しているのがおもしろかった。元社長は、それほど歯切れがいい感じはしなかったが、答え方や表情なども含めて興味深かった。また、ソニーを去った元社員たちの“逆襲”もそれぞれに今の企業が抱える課題とつながる話として描かれていた。しかし、元社員たちの発言から伝わってきた「ソニーがかつてのソニーではなくなった、日本企業がかつての日本企業がもっていたような精神を失った。またそれを取り戻せば活路はある」というような見立ては必ずしもふに落ちなかった。やや問題が単純化されていた気がした。

- NHKによる“アベノミクス”報道は、多角的に報道されている。また、板垣信幸解説委員は経済担当の代表的な解説委員だが、ずいぶん厳しく見ているという感想を持った。財政支出について、国民の目は厳しいとのコメントもあったが、今後、

安倍首相の経済政策がどのように進んでいくのかわからない状況で、少し保険をかけているのかという気がする。

- 日本は、特に今年以降、将来を眺めたときに重要な岐路に立っていると思う。日本という国を将来若い人たちが自信を持って担っていけるようなベースをいかにつくるか、遅すぎる出発点に立っている。既得権を持っている人たちの利益のためということは一回全部やめて、若い人たちが将来自信を持って動くことができる軌道をどうやって作るのか、その軌道が壊れそうな、財政の基盤などが壊れそうになっていることや、軌道をどのように修復し、どういう構図を用意すべきであるかが最も大事だ。

今までの世の中であれば、だれかが何かを主張し、政策的なプログラムを出した場合、ポジティブに考えるか、批判的な立場に立つかは、対立の構図で番組づくりをするほうが、視聴者としては理解力が早まる効果があった。言ってみれば、相撲の土俵でどちらが勝つか、どちらの力士にどういう強みがあり、弱点があるのかという構図で見せるようなものでわかりやすかった。しかし、これから先の長い時間軸で、絶対に達成しなければいけないことと、手前で何をすべきかということとの整合性は、賛成意見と反対意見の対立構図だけではほとんど見えてこない。かなり先々をしっかりと読み込んでいる人たちの意見をうまく取り上げ、新政権、ひょっとしたらさらに次の政権が短期的に何かを実現しようということと矛盾がないかどうか、いささかでも矛盾があれば将来の本質的な路線にむしろ穴を掘ることになりはしないかなど、そのような構図で視聴者、国民の皆さんによく考えてもらえる番組づくりができれば、ザ・ベストではないか。

金融政策についても、景気がよくなれば税収が上がって、すべてハッピーになるのだから当面は国債増発、それを日銀が強くファイナンスをしてでも、うまく回転させろというロジックだけで、本当にすむかどうかの問題だ。そうこうしているうちに、財政と金融の境目をだれも見分けられなくなる。最終的に、財政の規律だけではなく、通貨の信認そのものも掘り崩す心配がないか。もしそうなれば、将来若い人たちの活動の舞台は完全に掘り崩された後、敗戦の中からもう一度立ち上がれという構図を強いることになる。そういうことに、いかに上手く視点が当てられるかという難しい課題だ。そうした議論をうまく組み立てられれば建設的ではないか。

- アルジェリアの武装勢力の事件では、アルジェリア政府が報道管制、情報管制を敷いている状況で、報道することの難しさがある。イギリスの情報正確であるようだとか、アルジェリアは軍と内務省の情報が異なっているとか、状況が少しずつ明らかになりつつある中で、手探りで報道していると思う。NHKとして課題がかなりあると思われるが、対策等をどのように考えているか。

(NHK側)

アルジェリアの襲撃事件について、過去のテロ事件のときにも情報が錯そうした。あまりにも情報が錯そうするので、NHKとして報道するものは、現地の政府が発表したこと、日本政府が確認したこと、日揮に入った情報と、クレジットをきちんと出すことにした。また、それ以外の情報は慎重に扱うことにした。海外の放送局の報道を取り上げる場合は、どこがどういう形で報じたが、日本政府なり、日揮には情報が入っていない、という伝え方を、当初からルール化した。

また、人の生死にかかわる話であるので、慎重な表現にした。映像もさまざまなものが出てくるが、あまりに残虐なものは使わないように申し合わせた。かなり早い段階で、日揮のアルジェリア人と日本人が殺されたというインタビューを撮ったが、それを特ダネとして早く出すのも違うと考え、正式に発表があった段階で合わせて伝えた。さまざまな方法で、現地に入ろうとしたが、残念ながらビザは取れなかった。空港までビザなしで入るという手段もあるが、空港で帰されてしまう。違法な手段で入国すれば、現地政府から拘束され、今後のことにも影響してくる。現地のフリーランスのカメラマンから情報を得ようと試みたが、難しい地域であり、うまくいっていない。今後の課題については、あらためて検討していく。

- 東京スカイツリーから電波が発信されることにより何か変わるのか。私は夜遅くまでテレビを見るのが好きだが、BSや地上デジタル放送でも、夜中は半分ぐらいのチャンネルでテレビショッピングが放送されている。あれだけの思いをして東京スカイツリーを作っても、テレビショッピングばかりでは、そんなことのために一生懸命に作ったのかと残念に思う。もう少し文化的になってほしいと思う。

(NHK側)

ソフトについてはそれぞれのテレビ局が考えることだ。東京スカイツリー送信に切り替わって、ソフトがすぐには変わることはない。今、テレビ局として問題なのは東京スカイツリーから電波を出すと、アンテナの方向によって映らなくなる家庭があることだ。それを調査し、切り替わるまでに対応する必要がある。土曜日の朝に2分ほど東京スカイツリーから電

波を発信し、映らない家庭は連絡をくださいという呼びかけを行っている。映らない世帯は、アンテナの方向を変えるなど、何らかの対策を行わなければならない。現在は午前4時58分から行っているため、問い合わせが少ないが、今後は夕方の時間帯で行い、NHKと民放が共同で調査を行うことにしている。

- 記者会見などで、テレビでは午前9時50分、ラジオは午前10時から中継とされているケースがある。ラジオで聞き始めたが、ふとテレビをみたら、すでに同じ会見の先の内容を伝えていた。ラジオは生中継でなかったのかと思ったことがある。こうしたことは、よくあることなのか。わざとタイムラグを設けているのか。

(NHK側)

たびたびではないが、ラジオでは若干時差をおいて、疑似生中継という形を取る場合がある。ラジオでニュースを先に伝えて、会見が始まり次第中継の形で続けられればよいが、ニュースを伝え終わる前に会見が始まった場合、機械で録音して、すぐに追いかけて再生をしていくことがあり、タイムラグが生じる。

- 12月22日(土)深夜の「ラジオ深夜便」で三宅一生さんとの対話を放送していた。シャイで謙虚な三宅一生さんから、よくぞあれだけのいろいろな話を引き出したと、感心した。

NHK編成局
番組審議会事務局

平成24年12月NHK中央放送番組審議会（議事概要）

12月のNHK中央放送番組審議会は、17日（月）、NHK放送センターにおいて、14人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「平成25年度国内放送番組編集の基本計画（案）」の諮問にあたって説明があり、審議の結果、中央放送番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。

続いて、NHKスペシャル 中国文明の謎「第3集 始皇帝“中華”帝国への野望」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、1月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	福井 俊彦（前日本銀行総裁）
副委員長	岸本 葉子（エッセイスト）
委員	大野 博人（朝日新聞社役員待遇論説主幹）
	小田 尚（読売新聞東京本社専務取締役論説委員長）
	倉重 篤郎（毎日新聞社論説委員長）
	駒崎 弘樹（NPO法人フローレンス代表理事）
	紫 舟（書家）
	平 朝彦（独立行政法人海洋研究開発機構理事長）
	龍井 葉二（連合総合生活開発研究所副所長）
	田中ウヰヱ京（(株)MJコンテス代表取締役、メンタルトレーナー）
	富士 重夫（全国農業協同組合中央会専務理事）
	細谷 亮太（聖路加国際病院副院長、小児総合医療センター長）
	若月 壽子（主婦連合会事務局）
	和田 章（社団法人日本建築学会会長）

(主な発言)

<平成25年度国内放送番組編集の基本計画(案)について ~諮問~>

(NHK側)

編集の基本計画は、2年目を迎えたNHKの3か年の経営計画「豊かで安心、たしかな未来へ」を、平成25年度の国内の番組としてどのように実現していくかを示したものだ。したがって編集の基本計画の作成にあたっては経営方針に基づいて、来年度のNHKの国内放送の各波における使命は何か、どのような役割を担うのかについて、今年5月から放送総局で議論をスタートした。その後半年をかけて、放送総局、さらに全役員が参加する改革と活力委員会など、さまざまなレベルで議論を重ねて、大きな方針を決定した後、「編集の基本方針」に基づいて個々の波、時間帯、番組群の検討を行った。四半期ごとにまとめている業務報告の放送の評価については、中央放送番組審議会での審議および意見も反映させている。経営方針である経営計画とNHKのいわば製品、生産物である番組編成、番組制作を一貫したのものとしてつなげようということ、強く意識して作ったということだ。

前回の中央放送番組審議会(11月19日(月))の予備審議で各委員から出された意見をふまえ、「編集の基本計画」を作成した。

- NHK全体の経営計画と番組編集の基本計画は、実質的にその中身を相互補完するところがあるということから、番組審議会としては当然NHKのあり方をふまえながら検討を進めている。その点について異議はない。先々もし経営委員会で番組審議会の意見と異なるところがあれば、フィードバックしてほしい。
- 「編集の重点事項」に「4. 世界に通用する質の高い番組」という項目がある。CGを使うことやデジタルでの復元など、技術的な質の高さが強調されている。一方で、世界に発信すべきメッセージ性も大事だ。たとえば、今回の原発事故は、都市そして海に近い場所で起こったという意味でわれわれが世界で最初に経験した。そこから何を学び、どのようなメッセージを世界に送るのか、世界に発信すべきメッセージ性の高い番組を作ることも大事だ。グローバルな世界の中で、NHKの役割も考え、編集の方針に精神として盛り込んでほしい。

- それでは前回の審議と併せ、各委員のご意見の趣旨が番組編成に生かされることを前提とし、原案を可とし、答申したい。

(NHK側)

番組審議会の答申をいただいたので、この後「平成25年度国内放送番組編集の基本計画」を経営委員会に提出する。経営委員会の議決を得た後に、来年度の具体的な番組編成を決定し、番組時刻表を含めた編成計画について、次回1月の番組審議会で説明する。

<NHKスペシャル 中国文明の謎「第3集 始皇帝“中華”帝国への野望」

(総合 12月2日(日)放送)について>

- とてもタイミングがよく、おもしろく見た。中国とは何だろうというのを知るうえで、おもしろかったが、中井貴一さんと中国人俳優が対話しているシーンについては必然性がいまひとつわからなかった。
- シリーズの全てを見たが、なるほどとあらためて感じる番組だった。「第2集 漢字誕生 王朝交代の秘密」は多様な民族をひとつの言語により国家としてまとめ、意思疎通や考え方の共有をしていたこと、正義や悪などの価値観の共有も漢字を通じて行われていたことが取り上げられ、とても良かった。それがベースになり、第3集は中華思想で統治の仕組みを進化させたという内容だった。中国の成り立ちを知る、我々と何が違うのかを理解する意味でもよかった。第1集、第2集を見たときは、中井貴一さんの対談シーンで解説をする必要はないと思ったが、第3集を見ると、中井貴一さんが日本人の発想や視点を述べていて、日本人としてどう受け止め、どう考えるかという役割を果たしており、必要だったのだと思った。
- 番組をおもしろく見た。一方、これまでも社会思想の起源を巡っては、論争や仮説、議論があったので、今回の発見から可能になった解釈をもう少し丁寧に説明してほしい。さらに膨大な背景があると思われるので、「史記」の文字や書簡の文字という一部分だけではなく、もう少しフォローがあれば、さらに理解が進んだと思う。中央が周辺の異民族を排除して統治し、なおかつ政略結婚的なことを行うことは、さまざまところで行われる手法だ。特に、中華思想において、その意味での独自性がどのようなものなのか、あらためて疑問を持った。

- 「第2集 漢字誕生 王朝交代の秘密」が、圧倒的におもしろかった。第1集と第3集は、やや思想的な部分、ソフトウェア的なことを取り上げていたが、第2集では漢字というツールそのものが、中国文明の基礎だったという説明に説得力があった。また、最近の中国の考古学の成果に対して感動した。「史記」という歴史書があり、考古学の遺跡や遺物があって、約4,000年の歴史を書物と考古学でたどることができるのは、人類史上中国だけかもしれない。同じ漢字を使う日本人が、共同作業に参加できることも、番組の重要なメッセージだと思う。約4,000年の人類の歴史を解いていくことに、日本と中国が一緒に取り組むことは、日中友好や尖閣諸島の問題などを越えて、人類史的な意義での壮大な作業だ。

中井貴一さんの対談シーンは、日本と中国の対話の一場面という意味を持っていると思う。日本人と中国人が話をし、同じ謎解きに迫るという作業のモデルとして、よかったのではないかな。番組のメッセージはすばらしかった。

- 中井貴一さんのシーンについては、他の委員の意見に同意する。日本語の吹き替えも方法としてはあると思ったが、中国人俳優がセリフを中国語で話すことで空気を変える意味でよかったのかもしれない。

また、他者は違うという事実を受け入れるのは、よい視点であった。一方で、秦が都合よく自分たちが夏であると決めたことにするというような表現があったが、秦にとってみればまっとうな理由があったはずなので気になった。

音楽はストーリーに合わせて、心躍るような曲が流れており、重厚感もあり、とてもひきつけられた。音のすごさ、大事さをあらためて感じた。

(NHK側)

中井貴一さんの対談シーンはさまざまな意見があると思う。わかりやすく見てほしいという思いとともに、文明に対する制作者側のメッセージを込めている。中井貴一さんに、日本人の視点に立った役割を担ってもらった。

中華思想についてふれると、自分のところがいちばん偉いという思想はどこにでもあるが、中国は周りを差別化し、野蛮と思われる人たちを自分の仲間と敵とにしゅん別した上で、自分の仲間になる人たちを中華に取り込み、周りとの一体化を進めている。これは世界史のどこを見てもない、中国ならではの特別な考え方だ。中華を取り上げるときには、まさにそれこそが中国の世界観の特徴だと感じ、制作した。

- 外を取り込んで融和することと、外を敵にするのが中華的な大きな特徴だという

ことだが、歴史上、ローマなど他の地域に本当になかったのか疑問に感じた。その特徴が、中華思想には強く出ていたということではないか。中華は、単に軍事的な力で物事を解決するのではなく、思想としてひとつのまとまりをつけているというメッセージが伝わってきた。そのことが、今の中国のあり方とクロスしているのかどうかということも、歴史の中で見ざるをえないところもあるが、もう少し解説があれば、なぜそこまでさかのぼって物事を見るのかについて、理解できるような気がした。また、当時の日本との文明的な落差はどうだったのか。「魏志倭人伝」の話にも少しふれられていたが、当時は相当の文明の落差があったと思うが、その点が伝わると、さらに中国のすごさや歴史も理解できたと思う。

中国の歴史をどの段階で切って見るかというのは、これからの大きな課題だ。歴史考証の番組は、現在の問題にもつながるので微妙な点もあるが、啓発されるものになると思った。

- 医学、科学の領域でも、多くの中国人が日本に来ている。その人たちと話をすると、歴史についてあまり詳しくない。出身を聞いて、それは「三国志」の中に出てくるある場所だと言っても、知らないという答えが返ってくることが多い。民族みんなでまとまろうということを経験した後に、毛沢東がひとつの中国と言ったあたりに、文化大革命の種のようなものが潜んでいると思う。歴史を現代の目から、もう一度見直すことを続編としてとりあげてほしい。周囲を差別化し、自分たちがいちばんだということ意識づけ、取り込んだ人を味方に入れることをして大きくなったということはよくわかった。それが、現在の中国とどう結びついているのか、支配階級といわれる知識階級の中には、中華思想がきちんと残っていて、一般の人たちの中にはそういうものがもともとなかったのか、そのあたりを知りたいと思った。その意味でも、とてもよい番組だった。

以前の番組審議会でも、第1集、第2集、第3集で終わるのなら、上、中、下にしてほしいと言う意見があった。上、中、下あるいは、1/3、2/3、3/3とかのほうがわかりやすいと思う。

- 取り扱う内容の難しさがあって、とても志の高い番組だ。現在、共有されている価値観として、民族自決や多様性を認めている中で、統一や集中の方向にあるテーマを扱い、今日的価値観から反発されずにどのように見せていくかということに挑戦していた。また、思想や世界観を、映像やビジュアルで見せていくのは難しいが、さまざまな工夫で表現していた。その工夫には、成功したもの、あまり成功していないものがあり、その点が各委員の意見に表れているのではないかと。

タイトルも、もうひと工夫するとさらに多くの視聴者に届くのではないかと。漢字が多く、“中華”や“王朝”ということばが何回か重複して、区別が付きにくい。

「始皇帝“中華”帝国への野望」を番組表の字面で見ても、領土拡大や拡張主義を連想してしまい、番組を見なかった人がいるのではないかと。制作を開始した当時には、現在の厳しい日中関係を予想していなかったかもしれないが、環境の変化に対応してタイトルを工夫し、受け入れられやすい打ち出し方もあったと思う。

- 自分自身のつきあいを通して思うのは、多くの中国の識者が歴史を語る時に、中国は経済的に大きくなるとか、あるいは地理的に大きいという理由で、これを即脅威だと感じる人たちがいることについて、ピンと来る人は少ないということだ。中国は、夏の時代やもっとさかのぼってみると、中国の領土、エリアの外縁は大きくなったり小さくなったりを繰り返して、安定した姿がない。中国にはコアとなる価値観を共有する部分があり、周囲がある意味では敵で、それを文化的に同化させようとするが、どうにもならないときに武力的に押し返す、この流れが歴史である。この番組は、そのような中国のコアとなる価値観を追究しようという番組ではないか。そういう意味で、野望ということばを使ってしまうと、彼らの本当の心理である“攻められて怖くてしょうがない”という部分と不一致なところがあると思う。

(NHK側)

中国には中華思想ということばがない。中国人は中国に中華思想があると思っていない。中華という世界観は、当然ある種の理由があるものという感じ方しかしていない。そのような部分は、委員の意見の中にあつた要素と絡んでくるかもしれないと思う。

<放送番組一般について>

- 12月16日(日)の「衆院選2012 開票速報」は、ミスがなく信頼感があつた。精度、スピードが増しており、かなりバージョンアップしていると感じた。出口調査で46万人を調べ、31万人から回答を得るなど、他社にはできない人海戦術だと思う。一部の選挙区の当確判定が少し遅かったが、それが目立ってしまうほど、他の選挙区が早かった。民放と比べると、数字の出し方と解説のバランスがよいと思った。解説の部分の意味づけ、政局の部分は、NHKでないといけない部分があり、そのへんもよかった。
- 開票速報を午後7時55分から翌朝まで、ザッピングしながら見た。NHKが優れているのは、結果について丁寧で、地元のレポートもわかりやすく、基本的な報

道であるところだ。民放では、選挙結果から世の中がどうなっていくのかという議論を進めている。早々と当選者やコメンテーターを呼んで議論していて、それも必要だと思った。午後8時の段階で大勢を見通しているなかで、あとは個別にだれが当選するかということも重要だが、3分の2も取った政権がどのようにしていくのか、見通しや議論があれば、さらによかった。解説委員が議論するような番組で、状況をどのように見ているのかという取り上げ方があってもよかった。

注目選挙区のレポートは、落選した候補者が何を訴え、どうして負けたのかについて、しっかりとしたNHKにしかできない報道でわかりやすかった。

政党が多いので当然だが、候補者の政見放送が長かった。法律で決まっていることだと思われるが、柔軟な運用ができないか。NHKの役割として大事なことだが、ほかの番組がそうとう圧迫されていた。

(NHK側)

開票速報では、出口調査もふまえ、480の議席の当確を全国きちんと伝えている。民放の開票速報には、それぞれスタイルや個性がある。NHKの場合は、客観的な数字をきちんと伝え、記者を中心に解説をしている。レポートについては、選挙前は同じ選挙区の候補者はそれぞれ同じ時間で扱うようにしているが、選挙が終われば特定の候補者を追いかけるレポートができる。その点から、選挙後は状況がよくわかると思う。

政見放送については、法律で候補者の数によって放送回数が見定められている。北朝鮮のミサイル発射や、東北の太平洋側への津波警報などで中断したときは、後日あらためて放送した。政見放送の中身も含め、それぞれの政党の責任で実施しており、それは法律に従って実施している。

(NHK側)

選挙結果についての解説は、夜11時からBS1で放送した衆院選2012「討論 日本を選択 世界はこう見る」(BS1 後11:00～前0:55)の中で、解説委員、有識者、中国とイギリスをつないで議論を行った。もともとBS1では、データ中心の開票速報を伝えていたが、現在ではインターネットがその役割を果たしているため、BS1では新たな試みを行った。番組内では、よい議論や解説ができていたと思う。

- 今回の衆議院議員選挙で、投票率が戦後最低だったことは由々しき事態だ。これは民主主義の危機だ。投票率が向上する何らかの施策をNHKで行うことはできないか。当然、国民の権利なので無理強いはできないという意見もあるが、さまざまな国難が訪れつつある中で、多くの人々がきちんと投票活動を行い、政治に参画していくことで、われわれの民主主義が絶え間なく支えられていく。ぜひ、投票率が上がるよう、特に若年層の投票率が上がるような、啓発的なプログラムを提供してほしい。

自民党が与党になり、掲げているのは改憲案だ。その中で、よく取りざたされるのは、自衛隊から「国防軍」への名称、内容の転換だ。基本的人権の尊重が削除され、「公共の福祉」ということばを「公の秩序」と変えることが改憲の中に入っている。これは大きな、歴史的な変化をもたらすものになると思う。改憲という大きな、歴史的な出来事の前に、国民的議論が重要だ。このようなテーマに関し、国民の熟議が進むような番組、番組群に取り組んでもらいたい。そうした状況のなかで、改憲がもしあるとしたら、納得して受け入れられるのではないか。

(NHK側)

改憲については、今後政治的テーマとして具体的になれば、国民を二分すると思われる。もしそうなれば、どのような形での改憲になるのかによって、番組や討論会など、さまざまな形で取り上げていくことになる。しかし、選挙期間中にさまざまな発言はあったが、具体的なところまで煮詰まっている状況にはなっていないため、今の段階でどのように取り上げるかは、さらに検討が必要だ。

- 開票速報、事前報道には本当に意味があるのか。むしろ国民にじっくりと政治を考える機会を奪っていないか。アメリカの大統領選挙と違って、日本の選挙は突然解散が行われ、2週間で決着がつくことと、小選挙区制というシステムであるという基本的な違いがあるが、選挙速報が本当にいるのかということについて、もしお答えがあればうかがいたい。
- 開票速報について、午後8時までほかの番組を見て、開票速報が始まってから5分後に自民党が圧勝する見込みとのニュースを知り、テレビを消したという話を聞いた。速さもとても重要なことだが、国民に選挙がとても重要な事であることを伝えることも大事だ。選挙に関心を持たせ、自分とものすごく身近な問題だということを感じさせるようなシステムでないと、政治離れがひどくなってってしまうのではないか。

(NHK側)

選挙については、今起きていることに対する政治的な課題をきちんと伝えることが、国民の関心を引き起こすと考えており、さまざまな形で選挙前に争点を伝える報道を行っている。直接投票に行ってもらおう呼びかけについては、政府がさまざまな形で広報している。報道機関としては、いまある課題について多角的に伝え、国民の関心を引き起こし、投票をしてもらうというのが、基本的な考えだ。

選挙の開票速報については、約59%、約6,000万人が投票に行っている。その日投票に行った人に、結果をできるだけ正確、迅速に伝えることは放送として必要だ。結果がわかっているものをいたずらに延ばしても、あまり意味のあることではないと考えている。投票してからではなく、投票する前にさまざまな形で課題や党首の訴えを伝え、国民に判断してもらおうのが報道機関としての基本的立場だ。

(NHK側)

さまざまな形の放送番組があるが、常に公共放送の原点をきちんとふまえていく。たとえば、投票については、争点などをきちんと伝えていく。その上で、どうするのかは視聴者ご自身の判断となる。逆に、投票へ行かないという判断をする人もいる。その人たちに“啓もう”するというのは、また違う話になるのではないか。いろいろな事柄について、公平、公正、正確、不偏不党という中で、きちんとした材料、素材を提供し、番組を作っていくということが役割だと考えている。

- ニュースは放送するが、選挙に行つてどのように国民が政治を動かすか、意思表示をするかということに関しては、重点的に訴えかけないという意味と理解してよいか。

(NHK側)

そのように端的に言う話ではないと考えている。今回はこういう争点があるとか、こういうことが議論の中身であるといったことはきちんと伝える。その上で判断するのは視聴者ご自身ということを考えている。

- 「行きなさい」とはNHKの言える話でないが、Eテレは青少年の健全な育成に資する番組を放送する波なので、青少年に対し、投票によって社会とかかわり、世の中を少しでもよくする方向に持って行くという話もできるのではないか。これまで、さまざまな取り組みをしてきているが、戦後最低の投票率をもたらした状況を見て、放送の方針を少し修正するべきではないかと思う。
- 衆議院選挙について、投票率が6割というのは、残り4割が政治的無関心ということではないと思う。全部ではないが、今の状況に対するメッセージだと理解している。政党という基本体が根底から問われていて、アメリカでも似たような現象として起きている。ドキュメンタリーなどで、そうした視点から取り上げることも重要な時期に来ているのではないかと思う。
- 選挙システムが変わらないと解決できない問題も多いが、NHKは選挙に行かない若い人たちの声をすくい上げることができると思う。国民投票をNHKで実施してほしい。たとえば、テレビのリモコンについている黄色、青色などの双方向のシステムを使って、年齢別にどのような考えを持っているのかという声をすくい上げ、実際の選挙の結果との比較や、こんなことを考えているということもすくい上げられると思う。また、選挙権のない世代、外国籍の人たちがどのように考えているのか、もし選挙権を持っていたら、誰に投票するのかなどについても、すくい上げてほしい。
- 12月7日(金)の津波警報に関する「特設ニュース」(総合 後5:20~7:30)は、アナウンサーが強い調子で避難を呼びかけていて、よい試みだった。私も被災地で支援活動をしており、現地にスタッフがいたが、これは本当に逃げなくては行けないと強く感じて、避難したと聞いた。東日本大震災の際は、口調やアナウンスの方法に切迫感がなかったので避難しなかった人もいたかもしれないとの反省から、今回は強い調子で訴えたことによって人々を動かしたことは、本当に素晴らしいと思った。さまざまな批判があったかもしれないが、ふたたび津波の危険性が発生したときには、今回のようにアナウンスをしてほしい。
- 津波の避難を呼びかけるアナウンスは、とてもよかったと思う。しかし、テレビだけが情報源のお年寄りが、地震の揺れで停電になってしまうと、津波に関するニュースを見ることができなくなってしまう。阪神・淡路大震災でも、神戸は大阪より被害が少ないと思っていた人がいた。いちばん被害を受けているところに情報が伝わらないことは、いつも問題になる。テレビしか情報がない人たちに、災害のニュースが伝わるようにしてほしい。

(NHK側)

ラジオは携帯できる。テレビは1日分のバッテリーがあつたとしてもその場で見なければならず、携帯性からも、災害時はラジオが有効だと思う。今のラジオは、手動で充電しながら聞くこともできるものもある。そういう意味で、ラジオの視聴習慣をつけてもらうことが重要だ。

(NHK側)

東日本大震災で、NHKは冷静に伝えたが、結果として2万人の方がお亡くなりになったことをふまえて、もう少し強い調子で避難を呼びかけるべきではないかということを経験し、新しいマニュアルを作成した。津波警報が出されたのは、昨年4月以来のことであり、新しいマニュアル、伝え方にしてから初めての津波警報だった。この取り組みについて、よかったという意見がたくさん寄せられている。一方で、「東日本大震災を思い出してください」ということばは、被災地の人から「当時のことを思い出してつらい」という声も寄せられた。強く避難を呼びかけるという基本的な考え方に変わらないが、具体的なことばについて、どのように呼びかけるのがよいのか、さらに検討する必要があると考えている。また、来年3月、気象庁の津波警報の発表の方法が変わる予定だ。それに合わせて、放送の対応も検討する。

今のテレビは、停電になると使えなくなるので、東日本大震災のときに通信を使って、タブレット端末などでニュースを見た人もいた。東日本大震災の後、ラジオの重要性を再認識して、仙台放送局ではラジオの地域放送時間を増やした。普段から多くの人にラジオを聞いてもらわないと、いざというときにも聞いてもらえない。昔と違って、携帯ラジオを持っている人が少なくなっている。行政では防災無線などで避難を呼びかけるが、ラジオは放送局が災害時にできることとして重要であると考えている。

- 12月8日(土)のNHKスペシャル シリーズ東日本大震災「救えなかった命～双葉病院 50人の死」は同じ職業の立場から見て、よく取材していたと感じるとともに、インパクトがある内容だった。

- NHKスペシャル シリーズ東日本大震災「救えなかった命～双葉病院 50人の死～」を見て、考えさせられた。共同体を維持していくために、どこまで人を犠牲にできるのかという究極の問いかけだ。被災の問題というより、もっと深刻な問題が含まれていると思った。
- BS時代劇「薄桜記」は、原作と設定が変わるのはやむをえないと思うが、中心人物2人の愛に焦点が置かれているせいか、若干話が甘くなったと感じる。しかし、主役の山本耕史さんの演技が良く、とても静かなドラマでいい感じだ。これからも楽しい時代劇を続けてほしい。
- 12月3日(月)、10日(月)に2週にわたって放送されたディープピープル「緊急特集 いじめ」は、いじめの当事者でも、評論家でもなく、当事者に接している3人による議論で、結論を急がず、問題を投げかけていて、見ている側はその議論を聞いて考えが深まるどころが良かった。当然のことだが簡単に結論が出る話ではないので、あえてこのような取り上げ方によって番組を作っていることは、秀逸だと思った。
- 中村勘三郎さんが12月5日(水)の早朝にお亡くなりになり、当日の「ニュースウオッチ9」では、これまでの業績などをコンパクトにまとめていて、アーカイブスがあってすごいと思った。しかし、その中で女性アナウンサーが番組を通じて親しくメールのやりとりもしているという話とともに、実際にメールの内容を紹介していた。内容に問題のあるようなものではなかったが、メールは個人的なものであり、お亡くなりになってすぐだったので、慎みがない印象がした。
- 「サイエンスZERO」は最先端科学のさまざまなことをコンパクトにわかりやすく説明しており、とてもおもしろい。山中伸弥さんがノーベル賞を受賞したときにも、すぐに番組で取り上げていた。山中さん自身が、それまでの日本人の業績が積み重なった上にあると、いつも語っていることを、番組でもきっちり伝えていて、30分の番組時間だったがとてもよくわかった。12月16日(日)の「シリーズiPS細胞(2)分化をコントロールせよ！」では、山中さんが「新しいスタートだ」と述べていたが、番組はこれからの問題点なども伝えていて良かった。
- 活断層と原子力発電所の安全性について、活断層の調査が原子力規制委員会で進んでいるが、活断層の調査について、本当にきちんと伝わっているのか疑問だ。どのように活断層が動いたのか、把握できるのかという問題や、副断層がどのような形で動くかという問題がある。動いたときに、原子炉の建屋はどうなるのか。一

連の技術的な検証がどこまで行われていて、そのなかでどのような問題があるのか、という事実がなおざりにされているのではないか。活断層を調べるだけでなく、科学的な検証がどのような段階にあるのか、しっかりとした認識のないままの報道が多いと感じる。科学的な検証とはどうあるべきなのか、原子炉の建屋はどのように造られていて、活断層が動いたときに原子炉はどのようになるのかといった点について、しっかりしたシミュレーションをして取り上げてほしい。実際にはあまりよくわかっていない問題だと思うので、日本国内で問題が共有できる番組を作ってほしい。

(NHK側)

活断層と原発の関係については、本来われわれがもっと知っておかなければならないことを丹念に検証し、どこまでわかっているのか、積み重ねて愚直に取材していくことが基本姿勢だ。そのような手作業を通じて、若い人にさまざまな事柄に関心を持ってもらうことが基本だ。投票率についても同様で、愚直に目の前の事実を拾い上げ、番組にしていくところにわれわれの基本がある。

- NHKの番組の中には、これはだれのための番組なのだろうと感じるものがある。伝えることだけではなく、どういった層の視聴者にどのように動いてもらうと日本はこのようによくなる、といった番組としての方法論もあるのではないか。20代の人が選挙に行かないと国が変わらないというようなことを、番組を通じて伝えることも必要なのではないか。
- NHKには地上波、BS、ラジオがあり、番組を知ってもらうための努力をしなければいけない。しかし、番組PRの精度が高くなく、イメージ的なものがとても多い。番組によって、視聴者層や視聴者の志向もある程度見えていると思う。もっと具体的で、視聴者層の志向に合わせた番組PRを行えば、興味を持ってもらい接触者率を上げられるのではないか。
インターネットでは、過去に購入したものなどから、年齢層、男女別に合った広告が出る。できるかどうかは別として、視聴者層の志向に合わせた番組PRを行ってみてはどうか。
- この半月ほど、政治とマスメディアの役割について考えさせられた。NHKは不偏不党の原則に立ちながら、一方でマスメディアの機関として政治のチェックやバランスを取る機能を同時に果たしてほしい。

NHK編成局
番組審議会事務局

平成24年11月NHK中央放送番組審議会（議事概要）

11月のNHK中央放送番組審議会は、19日（月）、NHK放送センターにおいて、10人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、放送番組の種別と放送実績について説明があった。

続いて、平成25年度国内放送番組編集の基本計画（案）について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、12月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	福井 俊彦（前日本銀行総裁）
副委員長	岸本 葉子（エッセイスト）
委員	大軒 由敬（朝日新聞社常勤顧問（論説担当））
	倉重 篤郎（毎日新聞社論説委員長）
	駒崎 弘樹（NPO法人フローレンス代表理事）
	紫 舟（書家）
	龍井 葉二（連合総合生活開発研究所副所長）
	田中ウヅエ京（（株）MJコンテス代表取締役、メンタルトレーナー）
	富士 重夫（全国農業協同組合中央会専務理事）
	若月 壽子（主婦連合会事務局）

（主な発言）

<平成25年度国内放送番組編集の基本計画（案）について>

- 基本計画（案）について、前年のものとポイントがいくつか変わっている。事前の議論でどういうことが論点になったのか、もう少し補足してほしい。

平成25年度の「編集の基本方針」の第3パラグラフで状況の変化についての的確な指摘をしていると思う。国際関係の問題は「編集の重点事項」の1にも出てくるが、現状をふまえ平和的解決に向けてバックアップするような企画を強調してほしい。

「編集の基本方針」の第5パラグラフで「地域に密着した情報」とあるが、平成24年度の「編集の基本方針」の第3パラグラフでは「地域を活性化し、元気にする放送を増やします」となっていて、だいぶニュアンスが違っているように感じる。

「編集の重点事項」の6で「地域放送」となっているので、地域放送と昨年度にあった活性化や、地域目線などは、ますます重要になると思うので、何か斟酌（しんしゃく）してほしい。

1年近く見てきて、あらためてニュース番組に限らず、報道の力、例えば震災復興予算の問題も含めた報道、「NHKスペシャル」やドキュメンタリーなどは、世界に誇るものだと思う。NHKならではの部分なので、ここはもっと膨らませてはどうか。文章上の強調だけではなく、どの番組を見ても人手と手間と金がたいへんかかっているの、現場の苦勞をふまえ、制約がある番組の編成の時間帯や、人とお金と手間に関しては重点的に投入し、具体的な企画段階になったときに、さらに充実する方向を考え、必要であればそれをバックアップするような文章表現になるのが望ましい。

「各波の編集方針」のEテレの「編集のポイント」の「3. 社会の中核を担う視聴者」という表現の真意がわかりにくいのではないか。

- 「編集の基本方針」の5行目、「未来へ向けて家族や地域の絆を結びなおし」とあるが、「結びなおし」という状況認識はどういうことか。「各波の編集方針」の総合テレビジョンの「編集のポイント」は「3. 家族の絆、地域の絆を見つめ直し」と異なる表現になっているが、何か意味があるのか。

「編集の重点事項」の「6. 地域放送の充実と機能強化」の最初の2行は全国地域の放送局も含め、多様なサービスを展開するということだが、具体的なサービスはどういうことを考えているのか。具体例があれば教えてほしい。3行目から「地域の豊かな自然、温かい人々のつながりや暮らしを舞台にした地域発ドラマを制作し、全国に発信していきます」とあるが。その後の「あわせて、本部のバックアップ」というのは番組と直接関係ないNHKの災害対応であり、「地域放送の充実と機能強化」の項目なので、3行目と4行目はドラマを制作するというのではなく、「地域発の番組を制作します」と修正したほうがよいのではないか。平成24年度の「編集の重点事項」の「6. “放送局のちから”を深化させた地域放送の充実」で「地域の再生や活性化へ貢献するため、広がる格差、雇用、観光、教育、医療、福祉、農業など、地域社会が抱える問題と向き合います」とあるが、昨年と同じような地域社会が抱える課題、地域を再生させる、活性化させるためという意味で「格差、雇用、教育、医療、福祉、農業」などのことばを入れ、「そういう課題と向き合います」と入れたほうが、昨年度との連動性や地域放送の充実という意味で適切ではないか。

視聴率や接触者率となると人の数なので大都市中心になりがちだが、都市部以外の地域社会が、国土の大宗を占めていて、国の文化、アイデンティティは地域にあるという考え方もある。そういった意味で、日本の北から南、東から西の地域の問題、とりわけ第1次産業、地域で暮らしを立てている人々の課題や実態をより多く

放送で取り上げてほしい。

(NHK側)

「平成25年度国内放送番組編集の基本計画」(案)についてどのような議論を行ったか説明する。前年度の「編集の基本方針」と「編集の重点事項」については、大きく変えたところはない。平成24年度の「編集の基本方針」は最初に状況認識から始まっているが、平成25年度は最初にNHKの役割を掲げる入り方になっている。世界情勢や国内情勢の厳しさの認識は、第3段落にコンパクトにまとめた。その上で、平成25年度の編集にあたって重点とすることを記載している。2ページ目からは「編集の重点事項」となっている。今年度は新しい経営計画のもとで1年目だったが、来年は2年目に入る。「編集の重点事項」については、課題は大きく変わっていないので、全体としては今年度の基本計画をさらに充実、強化していくことが中心になっている。引き続き充実、強化していくことについて議論した。東日本大震災は順番が3番目になっているが、重要性を下げたわけではなく、同じように放送していく。

ニュース、報道の部分は多少書き方を変えている。厳しい世界情勢の中でていねいに取材・制作するドキュメンタリーなどに引き続き取り組んでいくことを含めている。

地域についての「結びなおし」と「見つめ直し」は人間関係が希薄になる中、東日本大震災で地域の力の見直しが強く出されたので、そのあたりを意識した形で「見つめ直し」ということば遣い、未来に向けては「結びなおし」ということば遣いになった

ドラマについては、若干強めに表現しているが、地域発ドラマは制作を開始した時から、放送、放送後まで長い期間にわたって地域への波及効果があり、地域からの期待感が高く、感謝もいただいている。来年度も何本か予定しており、全国への発信力、地域への貢献が高いということで強調して掲げた。ドラマ以外のニュース、地域ごとの課題を掘り下げたドキュメンタリーは、引き続き取り組んでいく。

○ 「編集の重点事項」の「6. 地域放送の充実と機能強化」の最後の段にある、

首都直下地震、東海・東南海・南海地震が実際に起きたときの報道姿勢についての言明は、重要だと思う。これは「1. 国民の生命と財産を守る正確で迅速な報道」に追加したほうがわかりやすいのではないか。今後、まったく起こりえないものではなく、可能性の高いものとして、みんなが認識しているので、公共放送はほかに代替する機関がないことから考えても、あえて前に入れたほうがよいのではないか。

「6. 地域放送の充実と機能強化」の中に入れるのは、具体的な対応としてはその部分になるが、位置づけとしては、もっと前に出したほうがよいという印象を持った。

「1. 国民の生命と財産を守る正確で迅速な報道」の「解決への処方箋を探ります」が重要だと思う。報道で多角的な背景や、因果関係などを解明し、指摘しているが、新聞報道と同様に、なかなか現実としては具体的にイメージできる問題提起ができないことが多い。この部分は、強調したほうがよいという印象がある。

世の中は厳しく、暗いことが多いので、確かな未来が見える明るい側面をあえて紹介するスタンスが重要だと思う。そのような部分も、どこか1行ぐらいに触れていると、バランスが取れる気がする。

- 「各波の編集方針」のBSプレミアムについて、24年度は「とりわけ女性を中心とした視聴者の期待と関心に応えます」となっていたものが、25年度は「幅広い層の視聴者の獲得を目指します」に変わっている。女性を対象とすることをやめたのか。「幅広い」という表現は、女性を含めてという意味なのか。

(NHK側)

首都直下地震等については、意見の趣旨がよく理解できるので検討する。

「解決への処方箋を探ります」についても、経営計画に選択肢とか、議論の場を作るということで、単に流しっぱなしの報道だけということは考えていない。そういった趣旨で掲げている。

明るいニュアンスという点は、今回意識している。前年度は、東日本大震災から間もなかったこともあり、「編集の基本方針」そのものが悲観的な書き方になっていたことについて、昨年の番組審議会でも指摘を受け、多少変更した。平成25年度についても「未来へ向けて家族や地域の絆を結びなおし、希望と安らぎを感じられる放送」との表現は、未来へ向けて希望を持ったものにしようという意味を込めたつもりだ。

BSプレミアムについては、女性路線を縮小する気持ちはまったくない。むしろ、できるだけ幅広い層に見てもらいた

いということだ。この点は、個別の編成でも同じだが、たとえば夜11時台は、かなり女性を意識したラインアップにしている。朝や夕方の子どもゾーン、土日の本格的な番組など、今年度の編成はかなり手応えがあった。来年度についても、働く女性を含め、さまざまな人たちにBSプレミアムを見てほしいという気持ちを込めて、掲げた。

- Eテレとラジオ第2放送だけが1日24時間放送でない理由は何か。BSプレミアムだけは「放送番組の部門別編成比率」を特に定めないのである。

(NHK側)

EテレのEはE d u c a t i o nとE c o l o g yの意味を含んでいる。放送終了時間を繰り上げ、エネルギーのことを考えているチャンネルということで、24時間放送を平成20年度から行っていない。

(NHK側)

BSプレミアムは免許上の条件がついていない。「国内放送番組編集の基本計画」でも特に定めないとしている。BS1は、免許上の条件で教養番組が20%以上、教育番組が10%以上とされているので、そのまま使用している。

(NHK側)

トータルとして考え方を説明すると、平成25年度の「国内放送番組編集の基本計画」の策定は、波ごとの本来の使命はどういうことかについてみんなで議論するというところから始めた。

まず、「編集の基本方針」については、平成24年度は、まず世界がおかれているさまざまな深刻な状況を列挙し、それを受けて記していたが、平成25年度は最初に明るい形で作っていかうということにした。NHKの使命をきちんと果たし、未来へ向けた希望と安らぎを感じられる放送を目指すという形で「編集の基本方針」の文言を作成した。

「各波の編集方針」は、波の基本的な役割を個条書きにする形で整理してある。Eテレは、目的を持ったチャンネルであるので、その目的をきちんと果たしていこうと考えている。

Eテレをはじめ各波で「編集の基本方針」の第5段落、「文化の創造に貢献する番組、世界に通用する質の高い番組、世代を越えて楽しめる番組など、NHKならではの役割を大切にしながら多彩なジャンルで編成します」ということだ。NHKならではの役割を大切にしながら多彩な番組の編成を行っていく。基本的には、このような考え方で各波の役割を明確化し、NHKならではの放送を大切にしながら取り組んでいく。未来に向かってつながる、明るい感じを大切に進めていこうと考えている。

- 「編集の重点事項」の「1. 国民の生命と財産を守る正確で迅速な報道」の3行目、「中国や韓国」と具体的な国名が出ているが、「近隣諸国との関係」でよいのではないか。

「4. 世界に通用する質の高い番組」だけ具体例が多い気がする。1～8ある中でバランスがとれていない感じがする。3行目の「深海の巨大生物を追う」や「体内のマイクロ世界」、「関東大震災と東京大空襲」など、具体的に書かなくても、表現できると思う。バランスをほかの項目と合わせて整理したほうがよいと思う。

昨年度と違うこととして、4ページに「放送サービスについて多角的な評価指標を用いた評価・管理を行います」と、新たに加えられたものがある。今年から四半期ごとに報告を受けている円グラフ等のことをここに盛り込んでいると理解した。

「各波の編集方針」では、24年度と形式が若干変わっている。昨年度は、各波の重点的な方針と放送時間という構成だったが、今回は最初に基本理念を押さえ、さらに編集のポイントという具体的なものを入れ、そして放送時間と、3段重ねのようになっている。今回の形式のほうがよいと思う。

- 「編集の重点事項」の「1. 国民の生命と財産を守る正確で迅速な報道」の最初の段落、「危機の背景に多角的に迫り、解決への処方箋を探ります」とあるが、どのようなイメージを具体的に考えているのか。日本のメディアは、グローバルに報道することがあまり得意ではないので、どうしても外国のことは外国のこと、日本のことは日本のことと扱いがちだ。そういうものを乗り越えるような報道に、特にNHKには取り組んでほしい。とりわけ3.11後の大きなテーマとしてメディアがあると思う。メディアの自己検証を新聞も七転八倒しながら取り組んでいるが、信頼を失いつつある大きな問題があると思う。その中での報道の意味を考える部分があったほうがよいと思う。

- この審議会で議論しやすいようにするためには、前年度の資料と比べ、新たに取

り組む項目やさらにフォーカスを当てた部分、まったく同じように取り組みたい項目や使命を果たしたので終了したい項目など、整理したものと議論しやすいと思う。前年の資料とそのまま見比べ、文章の違いでそこを推察するのは、なかなか難しい作業だ。

(NHK側)

この基本計画に基づいて番組を組み上げていく。たとえば、Eテレについては、伝統芸能やクラシック音楽などの分野で文化を守り育てる番組などは、視聴者が少なくても、NHKの役割として取り組んでいこうという議論をしており、番組ごとの役割を整理し、きちんと行っていく。基本計画はこうした取り組みを表したものであり、NHKらしい役割を果たし、NHKしかできない番組を作るということを、ことばとして表現するとこのようになる。

(NHK側)

委員から「4. 世界に通用する質の高い番組」に具体例が多いとも指摘があった点については、あらためて整理したい。多角的な評価という点は、これから最も力を入れていくところだ。

委員から意見のあった、多角的に危機の背景に迫るとするのは、グローバルな報道をしたいということで、日中、日韓についても単なる2国間関係だけではなく、世界の中でどういう見方があるのか、各波を通して放送していきたいという趣旨だ。3. 11後のメディアの状況については「編集の基本方針」の「信頼できるニュースや番組を制作し、先を見通せない時代に対して公共放送として議論の場や選択肢を提供していきます」にわれわれの方針を込めている。信頼できるということのをこれからも意識して取り組んでいく。

本日いただいたご意見を精査し、検討、修正したうえで、来月の諮問でお示しする。

<放送番組一般について>

- 11月18日(日)のNHKスペシャル「がんワクチン～“夢の治療薬”への格闘～」を見た。以前、イレッサが登場したときに“夢の治療薬”と言われたものの、その後に副作用で何人も人が亡くなったということがあった。“夢の治療薬”と言いたいのはわかるが、このような取り上げ方はどうかという見方もあるのではないか。

(NHK側)

11月18日(日)のNHKスペシャル「がんワクチン～“夢の治療薬”への格闘～」は、以前「あさイチ」で取り上げた。視聴者、特にがん患者の方々から、もっと詳しく教えてほしいという声が、多く届いたので、再企画したものだ。現在は治験段階で安全性についてどのように伝えるか、深く議論をした。安全なわけではないことも含め、正直に伝えることを配慮した。番組としては、効果を確認している段階なので確立していないということや、承認前の段階だからこそ、がん医療の課題が浮かび上がってくる面もあるので、あえて放送したという番組意図を伝えながら放送した。番組の後半でも、格闘している女性もいれば、効果がなく脱落した人もいるという情報も含めて取り上げている。そうした情報を数多く入れることで、バランスを取ることに苦慮した。その上で、ご指摘のあったような印象を与えているとすれば反省すべき点があると思うので、今後も議論したいと思う。

- 番組名だけをみると、そのような印象を持ちやすい印象を受ける。

(NHK側)

「“夢の治療薬”への格闘」ということで配慮をしたが、確かに“夢の治療薬”のように扱っている印象を与えたかもしれないので、今後の検討課題としたい。

- 「国会中継」を私の周りで見ている人は70歳を超えたぐらいの人が多く。これから行われる選挙、投票の方法なども含め、現在福祉に使われている税金の比率を見ても、若年層より55歳以上の人にとって有利だ。ある意味ではフェアだがフェアではないと感じるところがある。「国会中継」を私たちよりもっと若い人たちが

興味を持てる番組にしてほしい。「国会中継」は、総理大臣が立ち上がると「総理が立ち上がりました」といった実況が入る。たとえば、囲碁や将棋の番組のように、だれかが議論した後に別の画面に切り替えて、将棋の解説のように次の一手を想定して話を進めたり、その手はまずかったとか、別の手があったというような解説をしたらおもしろいのではないか。「国会中継」でもそういうことができれば、おもしろいと思う。あらかじめ答弁は決まっているので、発言したことに対し、こういう意味ですという解説を入れつつ、それ以外に別の党の考えなどもフォローなどができればおもしろいのではないか。ツイッターで投稿された情報を流している番組がいくつかある。あれは「国会中継」にこそ入れるとおもしろいのではないかと思う。ニコニコ動画と同じようにする必要はないが、若い人が参加しやすい、積極的なかわりや思いを「国会中継」に入れられたらおもしろいのではないか。

- 「国会中継」については、ツイッターもよいし、何らかの国民の声と連動させて出すことはよいのではないか。「国会中継」は、とっかかりがなく、見づらいといえれば見づらい部分もあるので、視聴者フレンドリーな感じで放送することはよいと思う。

(NHK側)

「国会中継」にツイッターを入れるというのはおもしろいアイデアだと思うが、一方で議論そのものを聞かせてほしいという声もある。「NEWS WEB 24」でもバランスを取って、考えながら取り組んでいるのが現実だ。ある区切りのときに、スタジオから記者解説等を行っているが、将棋と同じようにできるかという点で課題がある。研究の余地はあると思うが、一方で余分なものを入れずに見せてほしいという意見もあり、その点についても勘案する。

- 11月16日(金)の午後6時の「ニュース」で野田首相の記者会見の中継が6時から始まって6時26分すぎで終了した。会見はまだ続いている、その後で野田首相は獲得目標議席について比較第1党というニュースが伝えられた。それを生中継で野田首相の口から聞いたかった。せっかくなので、6時半ぐらいまで時間をあらかじめ設定してほしかった。小泉首相の郵政解散のときに「国民に直に聞いてみたい」といった発言があったときはそうとう長い時間、中継していた記憶がある。

第3極報道は難しく、日本維新の会の石原代表や橋下同代表代行がさまざまな動きをするごとに報じるので、知名度が支持率に跳ね返って、その人たちにとってはよい循環で、回っているような感じを受ける。新聞社も悩みながら伝えているが、

ニュースであることは間違いないので、それなりの報道をする。民放は頻繁に取り上げているが、NHKはスタンスとしてどのようなバランスで報道するのか。

小沢一郎氏の判決について、11月19日（月）の昼の「ニュース」はトップ項目で無罪確定を伝えていた。ほかの項目との比較で最初になったと思われるが、私はよかったと思う。小沢氏という政治家の存在が、今は薄れてきているが薄れた理由は裁判が原因になっていた。その大きなかせは外れたが、すでに遅いという見方もある。そういった点でも、よい判断だったと思う。

（NHK側）

首相の会見は全体の編成との関係があり、午後6時台は各放送局で地域のニュースを放送している時間帯でもあり、そうした点も考慮して中継時間を決めている。それを補う形で「NHKニュース7」では、放送時間を30分から1時間に延長して細かく伝えた。会見で、主要な話が出たところで絞ってコメントをつけ、地域のニュースをそれぞれ伝えるなど、判断をしながら伝えている。

第3極については、解散して事実上選挙戦に突入しているので、第3極だけではなく、民主党、自民党をはじめ、各党のバランスを持って取り上げないといけないという認識だ。

11月18日（日）の日曜討論「衆議院解散 どう臨む政治決戦」では、14党に出演してもらった。また、政党の合併に関することは、ニュースそのものなので、きっちりと取り上げなければいけないと考えている。同じようなことは、小泉首相が郵政選挙のときに、女性候補を刺客に立てる作戦をとったが、あれだけの数、そして有名な人たちが立ったこともあって、ニュースとして取り上げた。取り上げた選挙区では、ほかの候補者のことも必ず併せて伝えるなど、配慮して伝えていく。

- 記者会見の中継の後に、必ずアナウンサーと記者のやりとりがある。必要なことなのか。

（NHK側）

中継は全国に放送しているが、その次の番組は各局の地域放送番組のため、各局の準備や技術的な切り替えのための時間が物理的にも必要になる。

- 切り替えるために、何分くらい必要なのか。

(NHK側)

だいたい2、3分は必要だ。突然、中継を打ち切って地域放送となると、地域局は何分に切り替わるか準備できないので、全国の放送局が混乱し、放送事故を起こす可能性がある。どうしても最後に2、3分の解説をつけ、次の切り替え時間を決めて、準備を整えた上で地域放送に切り替える必要がある。全国の放送局に準備をさせるためにも、一定の時間が必要だ。

- 日本国内の政治状況が不安定なので、なかなか報道されづらいが、パレスチナ自治区のガザへのイスラエル軍による空爆によって、子どもを含む77人が亡くなっている。ガザで、いまだに続く虐殺に関して、ずっとそのような行為が続いているので感覚が鈍ってしまうが、実際には人々が無差別に亡くなっている状況がある。日本として何ができるか、という報道がNHKであるとよいと思う。

(NHK側)

ガザへの空爆は、11月15日(木)にエルサレム特派員の記者が現地に入り、砲撃と空爆が行われている中でレポートを伝えた。現地で女性や子どもが犠牲になっていることを伝えた。イスラエルの理屈は理屈で自分たちの国家が脅かされるといって強攻しているが、一般の市民がこれほど大きく傷ついている。今どういう動きが起こっているかについて、アラブの諸国とアメリカが話し合っ、イスラエルの攻撃を止めようとする平和に向けての動きを今日報道した。残念ながら今の日本はリーダーシップを取れていないが、それでは何ができるのだろうかという問いは重たいものだが、エルサレム特派員が現地入りするときは、ヨーロッパからも応援して懸命に伝えている。そういう作業を続けていく。

- 今後は選挙があり、政権交代も考えられる中、経済政策が議論されている。自民党の安倍総裁が、昨今建設国債を日銀に引き受けさせるとか、インフレーターゲットによってデフレを脱却というような話をしている。これは一般国民にわかりづらい内容で、インフレーターゲットはどのようなもので、建設国債を日銀に引き受けさせるとどうなるのか、日銀の独立性はどのようなものなのか、なかなかわかりづらい。そ

ういった事柄が、わかりやすく国民で共有できて、議論に参加できるような補助線を引いてほしい。特にインフレターゲットに関しては、方法を誤ればハイパーインフレ等の可能性も否定できない状況だ。そうなることによって日本経済は壊滅する恐れがある。地味でわかりづらいことだが、国民生活に与えるダメージは大きい可能性もあるので、わかりやすい報道があるとよいと思う。

(NHK側)

経済政策は難しい問題だが、とても大事な問題だ。大型番組を近いうちに構える予定で、取材はほぼ終わっている。また、プロジェクトも構えている。このままでいくと脱デフレどころか、日本経済がどうなるのか、この2、3年か、もっと早い時期かもしれないが勝負どころとなる。日銀法改正やインフレターゲットが本当に持ち込まれたらどうなるかなども含め、ニュースや番組などで取り上げていく。

- 10月26日(金)の首都圏スペシャル プロジェクト2030「つながれない若者たち～希望ある未来へ」(総合 後 7:30～8:43 関東地方・長野県域・山梨県域)は、番組の作りに好感を持った。つながれないという側面を家族、大学、NPOなど、丁寧に取り上げて、キーパーソンの深みのある発言を引き出していた。スタジオのトークも大所高所の議論ではなく、ゲストの井筒和幸さんをはじめ、家庭のお父さん、お母さん、娘さん、お兄さんのような、世代を越えたディスカッションが聞けるのは、無難なようでも、おもしろかった。スタジオの発言ではいかにもという感じの人生訓が並んでいて、少し辟易(へきえき)とするところもあったが、そのあたりは小杉礼子さん、平山あやさんがもっと突っ込んでくれていたら、よくなっていたと思う。NPOの活動を取り上げていたが、つながれない若者を登場させるだけでなく、日常的に相談やパーソナルサポートとして接している人にも登場してほしい。そうした立場の人たちは、現在の国の制度との狭間に立って、個人へのアドバイスだけではなく、社会的に支援しなければいけないことの要望も語ることができる。支援やサポートをしている人を交えた座談会などもひとつの考え方だと思う。

(NHK側)

首都圏スペシャル プロジェクト2030「つながれない若者たち～希望ある未来へ」については、2030年プロジェクトということで、今後こうしたテーマをさらに追究していく。

- 11月15日(木)の地球イチバン「地球でイチバンお母さんにやさしい国～ノルウェー～」は、ノルウェーでのお母さん事情についてテーマ自体もとてもおもしろく、取材自体もたいへん興味深かった。しかし、残念だと思ったのは、スタジオのゲストが女性タレントの3人で、立ち位置が一緒だったことだ。3人とも母親だが、働きながら子育てをしている現実味があまり感じられないコメントが多かった。ノルウェーでは可能なことが日本でなぜ難しいかということの説明してくれる人や、日本人男性や外国人と結婚している日本人は立場が違うのではないかなど、タレント以外でもこの立場でコメントをできる人がいれば、母親が働くときにどのようなサポートができるか、という話ができただのではないか。

(NHK側)

「地球イチバン」のゲストについては、今後の参考にしたい。

- 11月18日(日)の「サンデースポーツ」では、ラグビーの関東大学対抗戦、帝京大学対明治大学の試合について、それなりの時間で伝えていたが、さわりだけという感じもした。最近ラグビーがサッカーに比べ、報道価値が低くなっているということかもしれないが、実況中継も含めて冷遇されている気がする。日本は2019年にラグビーワールドカップの誘致を決めており、あと7年で主催国としての責任と権利を行使すべきところにあるが、今の状態では、国民もついてきてくれないのではないかと感じる。サッカーと比べて、さまざまな理由はあると思うが、すそ野が広がらないと頂点も高くない。ワールドカップは、国を世界に発信する重要な場になるので、それなりの質とインパクトを提供する必要がある。公共放送でなければできないような戦略を立てて取り組んでほしい。

(NHK側)

ラグビーの主な大会は、以前より放送している。ラグビーに限らず、さまざまなアマチュアスポーツを取り上げてほしいという声がある。サッカーと並んでラグビーも重要なスポーツだ。NHKは東京六大学野球も放送している。今の段階でさらに増やすことができるかどうかの確約はできない。

- 11月19日(月)の「スタジオパークからこんにちは」で、司会の女性アナウンサーの服装が、黒のレースのドレスで、真ん中に金の装飾がされているものだった。昼間の時間であり、フランスでパティシエとして活躍されている人との対談だったが、わざわざこの衣装である必要があるのか違和感を覚えた。

その後放送している「お元気ですか 日本列島」をゆっくり見た。番組種別の

ことも頭にあったので、娯楽とはいったい何だろうと考えた。「スタジオパークからこんにちは」のときに、何となく違和感を覚えたが、その後「お元気ですか 日本列島」を見てこれこそ娯楽だと思った。司会の男性アナウンサーが、地味ととられるかもしれないが、同時に技術があると感じたのは、自然な笑顔とともにいやしと楽しさを感じたからだ。過剰でなかったことも理由だと思う。事実はとてもつまらないことになる可能性があるが、事実を淡々と述べることで、過剰でないことは違和感にならない。ことばが乱暴でないことは、とても大事なことだと思った。NHKならではのという意味の、NHKの娯楽番組はどんな基準が大事なのだろうと考え、ことばが乱暴でない、乱暴にならなくても娯楽になることではないか。ガチャガチャしていない、音がうるさくないこともNHKならではの娯楽だと考えられる。過剰にしない、ことばを乱暴にしない、ガチャガチャしない、この3点が守られると今回のNHKのアナウンサーの技になり、NHKならではのすてきな娯楽番組になるのではないかと考えた。

(NHK側)

娯楽の本質については、どのようなプログラムの中でも、NHKらしい娯楽とか、役に立つとか、ためになるとか、さわやかだったとか、そういった印象が残るとよいと思っている。いろいろな議論を行っているが、できる限りNHKの中のアナウンサーを育てて使うなどの努力もしていこうと考えている。

(NHK側)

衣装については、基本的に番組のプロデューサーがコーディネートしている。アナウンサーが自分でこれを着たいというのではなく、番組の中の小道具の1つとして扱っている。そういうことも含め、番組の中で効果的なものを選んで選んでいる。

- 11月4日(日)のETV特集「原田正純 水俣 未来への遺産」は印象に残った。
- NHKは山を取り上げた番組が充実している。8月26日(日)に放送されたグレートサミッツ「8000m峰全山登頂～登山家 竹内洋岳の挑戦～」をはじめ、いつも感心している。取材班は、登山者と一緒に登っているが、カメラワークをしながら登っているのだから、登山者以上の技術を持っているのではないかと考えていたが、番組情報誌「ウィークリーステラ」に記事が掲載さ

れていて、そのような訓練をしていることを知った。そのノウハウと技術は世界に誇るものだと思うので、ぜひ継承してほしい。

NHK編成局
番組審議会事務局

平成24年10月NHK中央放送番組審議会（議事概要）

10月のNHK中央放送番組審議会は、15日(月)、NHK放送センターにおいて、13人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、経営計画における「達成状況の評価・管理」（24年度第2四半期・7～9月）について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、11月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	福井 俊彦（前日本銀行総裁）
副委員長	岸本 葉子（エッセイスト）
委員	青柳 正規（国立西洋美術館館長）
	大軒 由敬（朝日新聞社常勤顧問（論説担当））
	小田 尚（読売新聞東京本社専務取締役論説委員長）
	倉重 篤郎（毎日新聞社論説委員長）
	紫 舟（書家）
	平 朝彦（独立行政法人海洋研究開発機構理事長）
	龍井 葉二（連合総合生活開発研究所副所長）
	田中ウヰェ京（(株)MJコンテス代表取締役、メンタルトレーナー）
	富士 重夫（全国農業協同組合中央会専務理事）
	細谷 亮太（聖路加国際病院副院長、小児総合医療センター長）
	和田 章（社団法人日本建築学会会長）

（主な発言）

＜経営計画における「達成状況の評価・管理」

（24年度第2四半期・7～9月）について＞

（NHK側）

第2四半期の各波の状況について、総合テレビは編集方針にある基本的な使命、国民生活に必要なニュース、情報番組、震災後の日本の課題を考える番組などに対しては特に質的な側面で評価を得ていると考えている。放送10指標の「1. 丁寧に取材・制作されている」、「2. 正確な情報を迅速に伝えている」、「4. 社会的な課題について考えさせられ

る」については10点満点で7点台という評価が維持されている。報道、解説、教養、福祉、科学、自然、大型企画などの番組が貢献しているものとする。総合テレビの接触者率を男女年層別に分析すると、40代男性のリーチについては第1四半期同様に伸び悩んでいる。世代を越えて見ていただく番組の充実についてはまだ課題が残っていると考えている。来年度に向けても分析、検討しているところだ。

Eテレは「1. 丁寧に取材・制作されている」、「2. 正確な情報を迅速に伝えている」については評価を維持しているので、基本的にはよい傾向だと思う。長期的に見ると第1四半期で指摘した4～19歳の男性、40代、60代の接触者率が回復していないので、引き続き対策、検討が必要だと考えている。

BS1については「2. 正確な情報を迅速に伝えている」が評価を維持していて、接触者率も上がっている。報道、解説、スポーツがそれぞれ貢献していて、よい傾向だと認識している。

BSプレミアムは第1四半期同様に全体に質的評価が高く、バランスよい評価になっている。このことは“本物志向の教養・娯楽チャンネル”として視聴者の支持を得ていると考えている。接触者率も順調に伸びているので、BSプレミアムについては引き続きこの方向を維持して放送を続けてよいと分析結果を受け止めている。

7～9月の放送番組を思い起こしていただき、ご意見をいただきたい。

○ NHKの自己評価のしかたを確認したい。

(NHK側)

評価のしかたはいろいろある。世帯視聴率をはじめ、数値としては出ない視聴者からの電話、メール、マスコミでの取り上げられ方、そして今年から番組ごとのアンケートをかなり細かく取るようにし、量だけではなく質を大きく考えて評価をしようとしている。

評価の体制は、分析を行っている現場からの分析結果を聞き、評価を各関係先に報告し、さらに分析を行い、対応策を

考える形で行っている。

(NHK側)

放送の質は、10項目・10点満点で視聴者の皆さんに評価していただく。絶対的な点数と時系列的な面で上がっているのか、下がっているのかを見ることになる。分析を行うチームがいて、例えば総合テレビで点数が上がったものは何が影響しているのかの相関関係などを見ている。その中で、この番組はある項目の点数を上げるのに効果があった、というようなことが見えてくる。それらをまとめたのが、さきほど石田総局長から報告した各波の状況についての分析結果だった。最終的には、自己分析と視聴者の皆さんからの評価を合わせて自己評価としている。

- モニター報告とか、視聴者の声とかいろいろあるが、新しく始められたかなり計数的、可視的なデータ、モニターや視聴者の声など、データがたくさんあるので、NHKの中で組織的にどう議論しているのか。

(NHK側)

波でくくっているが、実際には個別番組ごとにそれぞれ評価を行っている。3か年の基本方針の達成状況を測る経営の14指標における「①公平・公正」、放送10指標の「9. わくわく・ドキドキする」、接触者率など、番組ごとにデータが全部ある。それぞれ上がったものが波全体ではどう影響しているかを分析している。先ほど説明した、番組の影響については、そういうバックデータがあって、個々の番組が伸びているので全体を押し上げていると推計されるという仕組みだ。個々の番組の担当者は自分の番組、個別の番組がどう評価されているかを見て、今後の番組作りに活かしていくことにつながる。

- 組織的な体制で評価委員会とか、NHKの中の評価グループがあるわけではないが、いろいろなデータをもとに経営陣が総合的な判断をしているという理解でよいか。

(NHK側)

放送についてはデータを編成局で分析し、それをそれぞれ

れの放送の担当者が分析する。経営の14指標は放送だけでなく、経営のあり方、営業、技術のことも全部入っている。14指標の結果が出たところで、指標が動いて期待度、実現度が上がっているかどうかも含め、技術も営業も管理部門も役員レベルで議論している。四半期で、経営計画に掲げた目標が順調に実行されているのかや、例えば期待度が下がった場合や、期待度と実現度の差が広がっていれば、どういふところに問題があるのかなどについて、加えて指標には営業の支払率や、受信料としていくら払ってよいいと考えられているかという数値など、これまで使っている指標も含め、総合的に経営のあり方を検討していく。

(NHK側)

14指標については視聴者の皆さんからの評価、数値をもとに分析し、それを担当役員、役員会を経て、最終的には整理したものを経営委員会に報告し、トータルとしての評価を行っている。その14指標の中には、放送に関連する指標もある。その意味で、番組・放送についての評価は2段階で見ることができると言える。すなわち、放送の質的10項目の点数による評価と14指標の中の期待度と実現度という形で評価してもらおう。また、それをふまえたPDCAの中で、NHKらしさは視聴率だけでなく、視聴率が低くても質の高いものについては評価をするという仕組みにしていきたい。

(NHK側)

分析は編成局で行っている。バックデータは全部同じものだ。10指標と各番組の調査と合わせた調査結果を見て、放送を出した側の受け止めとして、われわれが責任をもって番組編成を行っている。これはあくまでも自己評価なので、中央審議の場でもう一度、委員の皆様新しい別の視点での意見をお聞きしたい。

- 委員の質問の中にはNHK側に何らかの組織的な検討体制があれば、いろいろな調査と番組審議会が出た意見そのものについても番組にうまく反映させるチャンネルができるのではないかと、そういうサゼスションが含まれていると思う。一考してもらいたい。

- グラフでは経営計画の4つの重点目標で分類した「公共」の4項目、「信頼」の6項目がなかなか高くてよいと思う。「改革・活力」の期待度と実現度の隔離が大きいこととパーセンテージ自体も低いところが課題だ。放送に関しては公共性を認められ、信頼性も認められている、それが「⑭受信料の公平負担」の認識や、「⑬受信料制度の理解促進」にまで至っていないということになる。これがいちばん大きい問題だ。よく日本の企業はよいものさえ作れば売れなくてもよいという姿勢だと言われるが、同じ結果がこのグラフに出ている。そういう意味では、自己評価を番組改善につなげ、どう迫力をもたせて、「改革・活力」にもっていくのかということが大事ではないか。

(NHK側)

「⑬受信料制度の理解促進」と「⑭受信料の公平負担」は明らかに期待度も実現度も低い。そこに問題があるというのは委員の指摘のとおりだ。この間、都道府県別の受信料の支払い率を公表した。公平負担を実現しなければいけないのに十分にできていない。放送の面で視聴者の期待にこたえる番組を出していくことによって支払率を高めることも重要なことだと認識している。放送がNHKにとっての中核だが、いかに営業の面で経費をかけないで効率的に集めるのかや、公平負担についていろいろな形で視聴者に理解を求めるなど、いまも営業と放送の間でさまざまな連携を行っている。プロジェクト810のように、どういう番組を提供することによって地域の人に貢献できるかなどについて、連携して検討している。放送のできるものと、放送だけではできない営業自身の努力も含め、視聴者総局がイベントなどを行うことと相まって、問題の改善を行っていくことは、経営として必要なことだと考えている。放送は放送として行うこと、各セクションと連携して行うことを会長、各理事が役員会をはじめとする討議の場で連絡を取り合って進めている。委員の指摘にもあるとおり、十分でないことはこういう調査からも明らかだと認識している。

(NHK側)

委員のご指摘のとおり、期待度と実現度をいかに縮めていく

かが課題であり、差が開いているということは経営上努力しないといけない。経営計画全体としても受け止めている。

- 同じメディアに携わる者としての感想として、常にわれわれは送り手発想にならずに受け手がどのように見ているかをチェックし、送り方をそのときどきに合わせて見直していく。それが、メディアの柔軟な対応といえる。基本方針に沿ってサービスをより強化するためにこういうチェックをされていると受け止めた。これだけの放送事業を行っていれば、それなりの評価は得られるであろうという以上の感想はもてない。この2か月はオリンピック、政局、領土問題など、NHKが得意としている分野であり、NHKが取り上げざるをえない分野の放送が多かったので、堅調な評価になるのはある意味当然だと思う。こういう形で放送局が自分たちの放送の中身についてチェックしていくスタンスをNHKは今年から始めたが、BBCなど世界の放送局で似たようなことを行っているところはあるのか。そういうことを参考にしているのか、教えていただきたい。これは始まったばかりだが、放送に反映しなければいけない。今回は比較的评价が高かったので不足分をどうこうすることはないと思うが、もし顕著な指摘があったときにどういう組織的な形で現場に下ろし、放送内容を変えていかれるのかについて聞きたい。

(NHK側)

NHKが導入しているこの評価方法は、世界の公共放送機関で行われている一般的な評価のしかただ。イギリス、フランス、カナダ、オーストラリアも公共放送は同じような形の評価方法を取っている。経営計画では、「信頼される公共放送として、放送機能の強化と放送・サービスのさらなる充実を図り、豊かで安心できる社会の実現と新しい時代の文化の創造に貢献します」という基本方針を最初に掲げているが、国によって文化とか、状況が違うため、重点もかなり違ってくる。NHKは日本の放送局なので災害報道を経営計画でも1番目に掲げている。イギリスでは地震とか、災害のことはほとんど想定されていない。しかし、テロのことは日本と違いずいぶん出てくる。地域性も違う。国によって文化の色合いがあるが、公共放送としてさまざまな指標を使って評価を行い、差で測るなどの方法はかなり共通するところがある。前の経営計画では、接触者率と支払率が中心だったので十分でなかった部分があったため、各国の公共放送がどういう評価を行っているか調査を行い、今回のこのような形を作った。ま

だ不十分なところはあると思うが、世界の公共放送に沿った形の管理評価システムとして今回導入している。

放送に反映していく流れとしては、例えばEテレの場合、40代の視聴がなかなか伸びないなど、Eテレの接触者が全体として落ちているということは経年変化を見ると、接触者率などで出ている。いまそれを踏まえ、25年度の番組改定を進めている。24年度の編成についての評価を説明したが、その評価を引き続き25年度の番組改定にどう生かしていくかにつながっていく。波全体としては、25年度にどのような番組を改定したらよいか、例えば総合テレビでいうと「1. 丁寧に取材・制作されている」と「2. 正確な情報を迅速に伝えている」などはよいが、「10. 感動できる・心に残る」と「9. わくわく・ドキドキする」の評価が低い。ロンドンオリンピックはその項目が高くなっているが、エンターテインメントをはじめ、感動を与える番組が少ないという数的評価から、その辺りにももう少し力を入れていく必要があるのではないかと考えている。

(NHK側)

放送の場合は、番組の編成計画に反映していくということだ。次年度の編成方針については、これまでは現場を中心に行っていたが、それを役員レベルも含め、みんなで議論していくことにした。EテレはNHKしかできないことをどういう形でやっていくのかということを中心に、こういう評価指標も見て整理していく。

- 今日は事柄の性格上かなり経営的な議論が入ってきたが、われわれはあくまで番組をよくするためにという視点で皆さんにご発言をいただいていると受け止めている。経営委員会で異なる意見が出た場合にはわれわれにもフィードバックしてもらいたい。

<放送番組一般について>

- 9月9日(日)のNHKスペシャル「東日本大震災「追跡 復興予算 19兆円」は、たいへんな調査報道だった。その後、この番組をきっかけに政治的にもずいぶん動きがでてきており、たいへんな特ダネだった。ただ、放送後に、この番組が世の中を動かしていると感じさせるようなニュースの扱いが無い気がする。視聴者からすれば、こうした話題はだれが火をつけたのか興味を持つと思う。1回で終わる話でなく、継続的に検証していく必要があることを世論に喚起しなければいけない。さらにニュースで積みかけて追究することをしてよいか。

(NHK側)

解説委員については、NHKスペシャル「対立を克服できるか～領土で揺れる日中・日韓～」でも、第1部に出演していたが、ニュースを伝えるだけでなく、さまざまな番組の中でいかに解説していくか、背景を説明していくか、が求められているので、今後も検討していく。

NHKスペシャル「東日本大震災「追跡 復興予算 19兆円」は、放送後にさまざまな動きをフォローしてニュースで伝えている。10月7日(日)の「日曜討論」に平野復興大臣が出演して、政府側、有識者の意見も聞いた。平野大臣は、「疑問に思うような使い方があるので来年度予算に向けてはしっかり精査していきたい」と発言している。そういうことも含め、ニュース、番組でフォローしている。

- 9月23日(日)のNHKスペシャル「対立を克服できるか～領土で揺れる日中・日韓～」(総合 後 9:00～10:49)では、緊急で作られた番組なのか、第1部の日中関係のパートは、付け足されたような印象で、時間も短く、もったいなかった。その後の「NHKスペシャル」では、よい視点で日中関係が取り上げられているので、長期的な視点が必要だ。また、マスコミは中国から撤退した企業ばかりを追いかけて取材しているという声を聞く。現地の企業は、実際にみんな頑張っており、襲撃された店舗や企業も頑張っている。一部の撤退した企業だけを探すのではなく、平常に動いている企業もきちんと取り上げることが重要ではないか。第2部の日韓問題については、テーマは領土をめぐる問題のはずなのに、この時期、このタイミングで従軍慰安婦の問題を取り上げる必要があったのか。日本国内の有識者だけの討論番組であれば、その点を大いに議論したほうがよいと思うが、韓国から有識者を呼び、これからの日韓関係をどのように発展させていくかを議論する企画であったとすると、事実があったかどうかという論点に終始し、議論が入口で終わってしまった。この企画は、成功したと思っているのか、率直にお聞きしたい。

(NHK側)

8月に、島根県・竹島へ韓国大統領が突然上陸し、その後、天皇訪韓を巡る発言もあったことから、日本と韓国が険悪な関係になった。双方が理解を深めるための番組を緊急に企画し、韓国から有識者を呼ぶことなどを検討した段階で、今度は尖閣諸島国有化を機に、中国との関係が深刻な政治問題になってきた。こういった状況下では、韓国だけではなく、中国も取り上げるべきだということで構成に加えた。NHKスペシャル「対立を克服できるか～領土で揺れる日中・日韓～」第1部の日中関係のパートが時間切れでもったいなかったというご指摘は、こうした制作の過程によるものであり、これで十分だという認識ではない。

韓国大統領は、竹島に上陸した背景について、従軍慰安婦のことも関係があると、さまざまな場で発言している。番組で日韓関係の討論を行った場合、この論点も絡んでくることをあらかじめ想定した。実際にそれに関する発言もあったが、その論点ばかりが中心にならないよう、三宅民夫アナウンサーが収める形で討論をすすめた。日本、中国、韓国の国民感情が高まっている中、この番組の視聴率が10%を超えたということは、国民の間で日本と韓国、日本と中国の関係はいかにあるべきか、いまの状態がこのままでよいとは思っていない人が多いことを表している。この番組を放送したから問題が解決するといった簡単なものではなく、さまざまな意見はあると思うが、それぞれの言い分を伝える番組を放送したことの意味はあると思う。

- NHKスペシャル「対立を克服できるか～領土で揺れる日中・日韓～」は、刺激的だった。ジャーナリストの櫻井よしこさんを出演させたのはなかなかのもので、興味深く見た。司会の三宅民夫アナウンサーも、こうしたテーマでは進行がなかなか難しかったらと思う。解説委員をもう少し出演させていたらよかったのではないか。「ニュースウオッチ9」などのニュース番組でも、現場の記者やキャップ、ときには部長が解説しているが、もっと解説委員が出演する機会があれば、さらによいのではないか。ほかの番組での解説委員同士の討論を見ていると、解説委員は、詳しく取材や調査をしていて、ひとつの問題を総合的に考えていることがよくわかるので、積極的に活用したらよいのではないか。

- 10月14日(日)から放送しているNHKスペシャル 中国文明の謎 第1集「中華の源流 幻の王朝を追う」は、日中両国が冷静に対処する必要のある時期に、きわめてタイムリーに放送されていると感じた。特に殷(いん)の前の夏(か)の王朝の誕生の謎を解く中で、あらためて中国の歴史、文化の根底、源流を知ることができ、日本人も見ることがあると思った。中井貴一さんのナビゲーションもよく、今後どういうことが解明されるのか、たいへん興味深く、次回も楽しみだ。
- 土曜ドラマスペシャル「負けて、勝つ～戦後を創った男・吉田茂～」(総合 後9:00～10:13)は、主演の渡辺謙さんのすばらしい演技もあって、毎回楽しく見た。日本国憲法とGHQ、マッカーサーとの関係や、生い立ち、その後の共産主義との東西冷戦の始まりにつながる流れ、警察予備隊等の再軍備を強要される中で吉田茂が判断していくところが、よく描かれていた。「戦争に負けて外交で勝つ」という吉田茂のことばをドラマのタイトルとしているが、ストーリー自体はGHQ、アメリカ政府に翻弄され、苦渋の決断をしていく吉田総理の姿を描いているので、はたして外交で本当に勝ったのか、というところは考えさせられた。しかし、そういったことも踏まえた上で、この番組タイトルにしたことを、おもしろく感じた。
- 9月15日(月)のひるブラ「秋サケでにぎわう街～北海道石狩市 石狩本町～」を見た。コメンテーターが画面の小さな出窓から話し、現地のゲストのタレントとNHKのアナウンサーがやりとりをしていたが、女性コメンテーターのことばづかいが気になった。民放ではなく、NHKだから気になるということか、それとも昼間の柔らかな雰囲気の中だったせいなのか、つつこみが強く、空気が切れるような違和感を覚えた。また、現地ではタレントとNHKのアナウンサーはイヤホンをしているので、出窓のコメンテーターとやりとりができているが、その周りには地元の皆さんには、音声伝わっていないのか、無表情であったり、突然違うときに表情が変わったりと、テレビに映っているものと、私たちが聞くものが違って、タレント同士の掛け合いと地元の皆さんの表情との間に一体感がなかった。地元の皆さんとのやりとりを増やして、出窓のコメンテーターとの掛け合いは、もっと少なくてもよいのではないか。
- 9月17日(月)の、TEAM 最高の自分になれる場所「美容家電の女たち」(総合 後10:00～10:47)は、職場に密着してよく取材されていて評価できる。しかし、いろいろな問題を抱えて番組を見ている人たちも多いので、サクセスストーリーにしてしまうと、かえってリアリティを失う面もある。そのあたりを企画段階でもう少しうまく工夫していれば、もっとよい印象を与えたと思う。

- 10月14日(日)のE TV特集「永山則夫 100時間の告白～封印された精神鑑定の真実～」を見た。虐待など、子どもたちを取り巻く状況が悪くなっている中で、丁寧に作られた番組だった。

- Eテレの「グラン・ジュテ～私が翔んだ日」という、さまざまな世界で活躍している女性を紹介する番組を見た。番組全編にわたって、本人が自分自身のことを語っており、他の出演者や司会者などによるインタビューが全くない構成だったが、かえってそれが、ことばを耳に入りやすくして、頭に入ってきた。周りの出演者がいろいろなことを言って、だれが主役なのかわからなくなる構成の対極だと思う。タレントは特にそうだが、アナウンサーの場合でも、聞き手の主張が強く出て、相対的に主役のほうで沈んでしまう番組がある。「グラン・ジュテ」で、ことばがスッと入ってくるのは、余計なものがないからだと思った。番組にもよるが、あまりきょう雑物のない作りの番組も、もっと検討してほしい。

- ふだん数多くの番組を見ている中で、毎週必ず見ているものや、おもしろいと感じたものの半分以上はEテレの番組で、特に若年層向けのものがおもしろい。「Rの法則」、「サイエンスZERO」、「すイエんサー」などは、それぞれの年代に合わせて切り口を変えており、興味を喚起している。たとえば、小さな子どもが誕生日ケーキのろうそくの火を一気に吹き消すにはどうしたらよいかというテーマで、運動後にいったん息を止めると、肺の中では引き続き二酸化炭素が血液中から排出され続けるため、息に含まれる酸素の濃度が下がり、ろうそくの火を吹き消しやすいといった内容があった。「テストの花道」、「オトナへのトビラTV」、「100分de名著」、「さかのぼり日本史」をはじめ、ミニ番組も「Eテレ2355」、「ピタゴラスイッチ」など、本当にすばらしい番組が総合テレビに負けないくらいある。
しかし、Eテレは、総合テレビに比べて、接触者率が半分の数字であるのに対して、世帯視聴率となると10分の1前後になってしまっている。BS1やBSプレミアムと比較すると、接触者率はEテレの方が2倍以上であるにもかかわらず、世帯視聴率はほぼ同じだ。BS1、BSプレミアムは、ブランド戦略がしっかりしていて、意識的に目的の番組を見ようとチャンネルを選ぶ人が多いが、Eテレは目的を持って見てもらい難いということが現状ではないか。これだけアプローチしている人が多くて、よい番組が多いにもかかわらず、定着していないことを考えると、Eテレは与えられた役割がまだ果たせていないように感じる。また、これまでの長い年月、教育テレビという名称で蓄積されてきた一般視聴者のイメージが先行していることも大きい。あらためてEテレのブランドイメージを考え直すべきだと思う。Eテレは教育というイメージを替えたほうがよいのではないか。

(NHK側)

Eテレには、教育テレビの時代から長い歴史の中で培われてきた固有のイメージがある。見ている人は少ないかもしれないが、特定層、例えば子どもや知識を得ようという人に向けて、さまざまな形で工夫しながら、NHKにしかできない番組を放送している。Eテレは総合テレビと同じになる必要はなく、EテレはEテレらしい内容の番組をきちんと放送すべきだと思う。“Eテレ”なのか“教育テレビ”なのかも含め、それぞれのチャンネルの使命をきちんと整理し、その中で量より質、NHKにしかできない必要なものを放送していくのが、この波の役割だと考えている。

- Eテレの番組はすばらしいと思うが、たとえばBSプレミアムでは、ラグジュアリーなイメージの番組スポットが流れているのに対して、Eテレは末尾に数秒「・・・Eテレ」と文字が出る番組スポットだ。「ピタゴラスイッチ」や「Eテレ2355」のような、Eテレらしい映像を利用して、イメージを変える方法もあるのではないか。
- 教育という名称はアナログ的なので、デジタル放送に切り替わったいま、イメージチェンジができればよいと思う。

(NHK側)

Eテレの番組は視聴者の対象を絞ったものが多い。また、子ども番組といっても、子どもとは0歳から20歳までが対象となるので、番組によって2～3歳向け、小学生向け、中学生向け、高校生向けと、細かくわかれる。そのため、放送番組時刻表では、Eテレだけが「朝の幼児・子どもゾーン」など、対象とするゾーンを設定している。30%の接触者率があるのは、ゾーンごとにさまざまな人たちが番組を見ているからであるが、そのなかで1つの番組だけに絞って見ると、対象が限られているので高い視聴率には結果としてならない。ブランド戦略や質のよい番組制作とともに、さまざまな視聴者の要望にどうこたえることができるかを議論しながら、Eテレでなくてはできない番組づくりを考えていく。Eテレも25年度に向けて議論を行っているところである。

そこを踏まえたうえで、さらに見てもらえる打ち出し方を考えたい。

- 沖縄県の尖閣諸島の国有化に対する中国の激しいデモや、工場の操業休止などの報道があるが、私が9月17日から20日まで中国を訪問したときには、その周辺で反日デモのような動きは見られなかった。テレビ放送の抱える特徴かもしれないが、たとえば野球でも実際に球を持ったり投げたりしている人のほかに、映っていないところで、カバーのために後ろを走っている人たちがいる。テレビを見ている人々の印象と、実際はかなり違うことが多いと感じる。出来事の大変さを伝えることはもちろん大事だが、その一方で、平和的な活動で地道に交流している人たちがいることも報道してほしい。
- オスプレイの報道について、安全保障の視点がないという点から、依然として多角的な取り上げ方になっていない。10月1日(月)正午のニュースでは、この日オスプレイが沖縄に配備され、住民の怖いという声を中心に伝えていた。配備について、沖縄県知事のコメントだけで、米軍、防衛省、専門家のコメントがなく、また社会部の取材だけで、政治部の取材が出ておらず、総合的にニュースを判断していないように感じた。記者解説でも、アナウンサーが安全性について聞き、記者は「防衛省は安全性に問題は無いという見解を示しています。今後については運用のルールが守られるかどうかが焦点です」というコメントで終わっており、夜のニュースでも同じようなトーンだった。オスプレイの事故率は、海兵隊の全航空機の平均よりも低く、導入当初の10万飛行時間の事故率は海兵隊の中で最も低い。データから見ても、危険だという取り上げ方は違うのではないか。オスプレイ配備反対の運動をいたずらにあおっている感じがする。また、なぜオスプレイを配備するかという意義が伝えられていない。CH46に比べ、巡航速度、航続距離が大幅に上回っており、空中給油をすればフィリピン、上海まで飛行できる。つまり、在日米軍の全体の能力を向上させており、ある意味で、これを配備することは日米同盟を強化するうえでのシンボリックな存在だとも言える。その意味では、単に対中戦略だけではないということだ。

尖閣諸島を国有化したことを理由として、中国は日本に経済制裁をすることも含め、攻勢をしかけ始めており、連日、監視船による示威行動も続いている。しかし、軍事的な挑発にまでエスカレートしていないのはなぜか。アメリカ軍の、通常は中東に派遣されているジョン・C・ステニスという空母部隊が、横須賀を事実上の母港とするジョージ・ワシントンの部隊と西太平洋で合流していることを9月20日にアメリカ海軍が明らかにした。この発表は、パネッタ国防長官が訪中し、会談の席上で習近平国家副主席が「尖閣国有化は茶番」だと日本を非難した翌日だった。

8月下旬からは、アメリカからの呼びかけで、グアムで1か月以上にわたって海兵隊と陸上自衛隊の間で日米合同軍事演習が実施され、9月22日にアメリカから報道陣に公開されたという経緯がある。このような動きが、日米同盟の抑止力として中国のけん制になっているという文脈で、オスプレイの沖縄配備をとらえないといけないのではないかと感じる。私が見逃しただけで、解説委員はどこかで解説しているのかもしれないが、少なくともそういう視点が欠けていると感じる。解説委員長の考えを聞きたい。また、県別の受信料の支払い率が、沖縄は42%で全国最低の数字だと聞いている。沖縄寄りの報道をすることで沖縄の視聴率を上げ、受信料の徴収も上げるため、報道をゆがめていることがあるとすれば、そうとう問題だ。

(NHK側)

まず、沖縄の受信料収入と報道姿勢について、委員の疑問のような点で絡んでいることはまったくくない。そこは明確に強く否定する。安全保障問題が重要なことは十分認識しているが、一方で沖縄県民が不安に思っていることも事実だ。その点をしっかり解消していかないと、安全保障体制自体が保てない。橋本内閣のときに普天間基地の返還問題を提起して以来、ずっと日本政府、沖縄住民、アメリカが、それぞれの立場で苦しんで考えてきた問題だ。確かに、オスプレイについて、安全性への懸念ばかりに傾いているのではないかという見方の人もいることは承知している。この問題は、日米安全保障条約や、日米関係、日中関係の重要性も踏まえて報道しており、今後も続けていく。

(NHK側)

沖縄の本土復帰10年を挟んでの5年間、沖縄の基地の現状、CH46を中心とした海兵隊の動きなど、専門家の意見も聞きながら取材をした経験がある。いまの沖縄の問題は、安全保障の側面と沖縄という土地が抱えている独自の状況がある。そのときどきに、どこに問題があるのか、十分にしん酌して伝える必要がある。解説委員には、安全保障、軍事を専門としている者がいる一方、政治的な側面から安全保障、外交を見ている者もいる。それぞれの解説委員が、いちばん適切な形で、その場で解説すべきものを伝えていくことを心がけている。一時的には、住民の感情に軸足を置いていると見えることもあるかもしれないが、われわれはそのときだけ

で、その問題を伝えきったとは考えていない。沖縄の問題については、絶えず安全保障面と住民感情を配慮して伝えていく姿勢に変わらない。

NHK編成局
番組審議会事務局

平成24年9月NHK中央放送番組審議会（議事概要）

9月のNHK中央放送番組審議会は、10日(月)、NHK放送センターにおいて、12人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、平成24年度後半期の国内放送番組の編成について説明があり、意見の交換を行った。

続いて、ロンドンオリンピックとメディア利用について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、10月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	福井 俊彦（前日本銀行総裁）
副委員長	岸本 葉子（エッセイスト）
委員	青柳 正規（国立西洋美術館館長）
	大軒 由敬（朝日新聞社常勤顧問（論説担当））
	小田 尚（読売新聞東京本社専務取締役論説委員長）
	駒崎 弘樹（NPO法人フローレンス代表理事）
	紫 舟（書家）
	田中ウヰェ京（(株)MJコンテス代表取締役、メンタルトレーナー）
	富士 重夫（全国農業協同組合中央会専務理事）
	細谷 亮太（聖路加国際病院副院長、小児総合医療センター長）
	若月 壽子（主婦連合会事務局）
	和田 章（社団法人日本建築学会会長）

（主な発言）

<平成24年度後半期の国内放送番組の編成について>

- 来年度の番組編成についての要望ですが、この夏に8月25日(土)から3週連続で放送していた「ムジカ・ピッコリーノ」（Eテレ 前8:25～8:35）を来年度シリーズ化してほしい。主人公による音楽の実験によって、モンスターが癒やされていくストーリーの中で、名曲が紹介されていた。CGをうまく活用し、美しい映像によって、子どもたちにもわかりやすく、心が躍るような方法で描かれていた。音楽番組の新しい地平を切り開くようなすばらしい番組なので、ぜひ検討してほしい。

- 同じような番組で有名な絵画の中に人が入っていく番組があった。朝の時間に放送されていたが、終了してしまったのか。

(NHK側)

「額縁をくぐって物語の中へ」は、現在、再放送を中心に放送している。

- 「NEWS WEB 24」を、若い人の気持ちが変わるので毎晩見ている。ツイッターが画面に出ているが、コントロールしているのか。何でも出しているのか。

(NHK側)

たいへん多くのツイートが送られてきているので、内容が事実関係と食い違ってないか、ことばとして正しいか、などを確認しながら、画面に表示している。

- 4月に、若い人を取り込みたいということで大幅に編成を変えた結果を知りたい。今のような時期に編成の変更がないようにしないといけないと思う。ふだん、たくさんのNHK番組を見ているが、何曜日の何時ごろにこの番組をやっているということを思いだそうとしても、なかなかよくわからない。民放だと何曜日の何時はドラマとか記憶されるのに、NHKの番組は、なかなか記憶できないのはなぜだろうという点を、真剣に考えるべきではないか。定着しないのはチャンネルが増えたからではなく、ある意味文脈にのっとった編成でないのではないのか。NHKがこれまで培ってきた歴史などに、のっとっていないのか、なぜ定着しないのかと気になる。

(NHK側)

「連続テレビ小説」は半年クールで作っているのも同じ時間だが、番組は変わる。夜10時台は、制作するプロダクションも1年間通じて作りきることが難しい点もあり、去年の秋に放送開始して、ことし春に終了した番組を、あらためてこの秋にスタートするなど、変えているものがある。また、BSはスポーツが多く、夏シーズンと秋シーズンで行われているスポーツも異なり、冬になると行われているスポーツが少なくなるので、その編成は毎年変更せざるを得ない。このような理由で、後半期の改定では、一部の番組が入れ替わっているが根本的に変えたという感じはもっていない。

また、何曜日の何時ごろにこの番組を放送しているという

ことを思い出せない番組は、まだしっかり定着していないのだと思う。「連続テレビ小説」、「大河ドラマ」などは、この時間に放送しているという印象があるのではないか。夜8時台も木曜日を除けば、この曜日は「ためしてガッテン」、「NHK歌謡コンサート」を放送しているなど、定着していると考えている。夜10時台などの番組がいまひとつ印象に残らないということであれば、それは制作、編成でもっと努力しなくてはいけない。

- ラジオ第2の早朝の時間帯、「まいにちイタリア語」は曜日によって都市を巡る「イタリア24の物語」があり、日本語の解説だけでもおもしろい。英語番組はその点で、実用的な印象を受ける。英語番組は役割が細分化されていると思うが、1つぐらい聴いておもしろい番組がこの時間帯にもほしい。

(NHK側)

英語番組は“NHKメソッド”と呼んでいるぐらい、テレビとラジオを合わせて細かいカリキュラムを作っている。その関係もあって一つの番組だけでは、部分的に見えることもある。同じ時間帯に放送するならば、違う味付けをすることもできるかもしれないので、検討する。

- 平成24年度後半期は、あまり前半期と変えずに定着を図る方向でよいと思う。平成25年度になると東日本大震災の風化が懸念される。総合テレビをつければ復興の現状がわかるような時間帯を5分間でも設けるのはどうか。被災地の日常を伝える番組を継続的に流してほしい。いま、スポットでは接することができるが、何曜日の何時にテレビをつけ流れているとわかるほどには定着していない。「NHKスペシャル」や、節目のニュース等では引き続き報じられていくとは思いますが、節目だけでは、そのとき以外に忘れられてしまう懸念があるので、風化を食い止める方法で編成上の工夫がほしい。

火曜日の夜が女性のドラマというのは定着してきたと思う。しかし、二段重ね、三段重ねになってきて、番組間で次はどういうドラマを作るという連携をとらないと、女性3人の同じような物語が続いてしまい、どれがどのドラマか混乱することもある。

(NHK側)

NHKの番組はころころ変わりすぎるのではないかという

ことについて、その問題意識は編成の現場でも持っている。平成25年度の改定も、1回決めたら3年は変えないつもりで臨もうと思っている。3年続けて見るには忍びない番組が出てくる可能性もあり、絶対とは断言できないが、思いとして、ご指摘の課題について十分に認識している。

(NHK側)

東日本大震災プロジェクトを作って、いろいろな番組を放送しており、現在は日曜朝10時を定時枠としている。来年3月11日に3年目に入る。東日本大震災は日本にとって戦後最大の災害で、原発という特殊な問題もある。NHKとしては復興に向け、息長く取り組んでいくというのが、基本的な姿勢だ。

8月にいつも終戦、戦争の番組を編成するのも、その時期にそういう番組を放送することで、忘れないようにしなければいけないという意味を込めている。平成7年の阪神・淡路大震災では節目ごとにニュースのトップ項目で、阪神・淡路大震災を取り上げてきたほか、いろいろなドキュメンタリーやドラマを作って、阪神・淡路大震災からの復興を放送し続けてきた。東日本大震災も息長く取り組んでいく。9月9日(日)にNHKスペシャル「東日本大震災「追跡 復興予算19兆円」で復興マネーがどう使われているか放送したが、次々と課題が出てくる。9月1日(土)のNHKスペシャル「釜石の“奇跡”いのちを守る特別授業」でアニメーションを使うなど、伝え方も工夫していかないといけない。そこは地域局や、放送現場にいる人たちと、何が課題なのかをきちんと伝えていけるように、放送枠も含めて引き続き努力していきたい。

来年3月の東日本大震災から2年のときにもいろいろな放送をする。ご指摘の点についても検討していく。

<ロンドンオリンピックとメディア利用>

(NHK側)

今回のロンドンオリンピックの放送は、前回の北京オリンピックと同じくらいよく見られた。深夜・早朝の生中継や夜間

のハイライト放送などの編成について好評を得た。オリンピックがテレビ向けのコンテンツであることを、あらためて認識した。放送とネットサービスの利用状況については、年代や性別での違いはあまり見られなかった。ネットの活用方法としては、放送予定の確認や競技速報の確認に使われることが多く、テレビ視聴を高める役割を担ったと考える。

- NHKのオリンピック中継はとてもおもしろかったが、解説がほとんど元選手による技術論であり、過去の文明との比較などの視点で評論できる人がほとんど出てきていない。日本はスポーツ評論家もかなり優秀な人がいるので、スポーツとは何か、格闘技、球技、陸上とは何か、そういう解説がもう少しあってよいのではないか。

(NHK側)

スポーツの実況中継に加えて、「NHKスペシャル」など、さまざまな形でスポーツを取り上げた番組を制作しており、番組の性格を考えながら、それぞれの場面に合う解説をしている。実況中継は試合展開が中心となるので、どうしても技術論になる。文明論などまでは踏み込めない。それは別の切り口からスポーツの番組を考え、そこでうまく展開できればと思う。

- 実況の中でそれを解説してほしいと言っているわけではない。全体として実況があつて、再放送があつて、金メダルをいくつ、銀メダルをいくつ、銅メダルをいくつとったとかの結果があつて、当然そこに文明論なども来てよいはずだ。

メダルの数にしても金が少ないとか、銅が多いというのがある。見方によって銅が多いことはすばらしく、スポーツが日本社会の中に緩やかにだが、浸透している象徴で、とてもよいと考えている。それに対してのコメントはほとんどない。NHK全体の編成の問題だ。

(NHK側)

今回のオリンピックは、これまでに比べかなり幅広い種目でメダルを獲得している。その面では、スポーツのすそ野がいろいろな種目に広がったのではないか。あるトレーニングセンターでは、いろいろな種目の選手と一緒に練習をすることで、それぞれのノウハウ、医学的な知識などを共有した成果について、オリンピック終了後に、記者のリポートで紹介している。

(NHK側)

スポーツ中継では確かに経験者が多い。大相撲では、経験者以外の視点でゲストを招くなど、少しずついろいろな試みをしている。オリンピックではNHKスペシャル「ミラクルボディー」で人間の体力や能力の視点から解剖しており、経済系の番組ではオリンピックと経済の問題を取り上げている。今後、東京でのオリンピック開催について話が出てくる可能性もあるので、いろいろな視点で取り組みたい。

- オリンピックはテレビ向けのコンテンツとのNHKの分析だが、ネットがテレビ視聴への誘因となるのがNHKにとって望ましいと考えているのか、オリンピック以外のコンテンツにも広げていきたいのか、あてはまるコンテンツとそうでないコンテンツと見極めて戦略を立てていこうとするのか。放送とネットの関係性の今後の課題になると感じた。

「競技の放送予定の変更がわかりにくかった」という点は、私も視聴者として感じた。「インターネットで番組の放送予定を調べて、テレビを見た」という結果はよく受け止めればネットがテレビ視聴への誘因になっている。逆にテレビそのもので放送予定の情報を十分に出ていないので、ネットで調べざるを得なかったという見方もできる。情報の出し方が的確だったか、反省につなげるべきだ。

- 日韓関係が現在のような状況でも、スポーツや音楽をはじめ、例えば技術交流など、いろいろな形での交流が大事なことだと思うので、政治と無関係に努力している人たちを取り上げてほしい。内戦状態にあるシリアなどでも、ひとりひとりの技術者はみんなよい人で、その人たちが直接戦争を起こしているわけではない。政治的な問題とまったく関係なくみんなで取り組んでおり、さまざまな要素で世界が成り立っている。

来年、市民の関心が低ければ東京へのオリンピック招致が不利になる可能性がある。東京にオリンピックが来れば、1964年のときのように日本が元気になるのではないか。国民がみんなしらけてしまう前に、当時の東京オリンピックの映像などで盛り上がるようにしてほしい。

- どの選手も金メダルを目標にした結果、銅メダルがとれている。たとえば、競泳の場合、日本は強化費が少ないことと体型の差が大きいことがいわれている。競泳であれば身体の差を技と戦略で丁寧に仕上げでぎりぎりメダルをとれるという状況だ。技術と戦略のためによりお金のかけ方をしないといけないと現場は感じている。

実況の中で、競技の歴史、人物や技の背景など、解説者がいろいろな話をすることも大事だが、同時に、スポーツの一瞬の感動を伝えることを優先するべきだ。

国際放送の「SPORTS JAPAN」は、日本のスポーツの良さを伝える番組で、シンクロナイズドスイミングを取り上げた回では、日本の古式泳法を紹介していた。シンクロナイズドスイミングという西洋から伝えられた競技が、日本の歴史も背負っているということも30分近く伝えており、世界に対するアピールになっていた。また、相撲の回では、身体、技術、戦略、心理、哲学というトレーニングの5側面から相撲を見ることができるとい部分も取り上げており、日本の良さをアピールできる番組だと思った。

ロンドンオリンピックで気になったことは、NHKだけではないが、アナウンサーの「リオデジャネイロでリベンジをしてください」「リオでまたがんばってください」ということばがとても多く、気になった。銀とか、銅だったときに、もちろんそれは応援の意味だと思うが、残念がっている司会者がいた。また、「初出場なのに健闘した」ということばもとても多かった。「リオでがんばってください」は選手にとって金をとれなかったらリベンジしなくてはいけないというのは、たいへんだ。選手たちの厳しいところはどうやって自分の筋肉の寿命に見切りをつけるかがいちばんのストレスだ。だからこそ一瞬にかけている選手のあの輝きが感動になる。リベンジをできないのがオリンピックだ。以前、オリンピックは初出場がほとんどだったが、最近は再出場が当たり前のようになってしまっている。本当のスポーツのすばらしさはリベンジができないことだ。「リオまでがんばってください」と軽々しく言ってほしくない。「初出場なのに」というのも初出場のほうが緊張しないこともある。銅メダルだと残念がる気持ちはわかるが、「ひたむきな努力に感動しました」、「想像できない努力ですけれどもすばらしいと思いました」など、もっと本当のことを言ってよいのではないか。そんな中、8月6日(月)の「ニュースウオッチ9」で室伏広治選手を取り上げていた。アナウンサーが「身を削って精神を極める年月を考えたら、またみたいなことは言えません」とコメントしていた。「身を削って精神を極める」という言葉は説得力があった。

(NHK側)

オリンピックの実況は、NHKと民放のアナウンサーがジャパンコンソーシアムという形をとって放送しており、NHKの放送でも全てがNHKのアナウンサーではない。「身を削って精神を極める」という表現をしたのはNHKの広瀬智美アナウンサーだった。

<放送番組一般について>

- NHKスペシャル 東日本大震災「追跡 復興予算19兆円」はすばらしかった。19兆円のうちの3次補正が9兆2千億円で復興予算の核になるが、その予算項目を全部洗い出し、被災地に直結したもの、全国に波及したもの、関係ないものという形でわかりやすく追跡して、被災地に直接関係あるものはきわめて少ない実態を浮き彫りにしていた。番組の中でも、宮城県気仙沼市の医師が「このような田舎は捨てられていくのではないか」と発言していた。現場の方々からそういう心の気持ちが出る。第1次産業中心の地域なので、住居もさることながら、早く働く場を確保しないと人は残らないし、逃げていくだけだ。

県や市町村が復興計画を作ったものの、その計画はあまり前に進んでおらず、予算とのずれが発生している。がれきは撤去したが、この場所をどうするのか、復興計画はあるけれども実際の中身は合意されていない、予算と連動していないということがある。東日本大震災、原発問題について「NHKスペシャル」でいろいろ特集を組んでいて、すばらしい番組が多いが、復興計画の実態、中身の現状について、今後とも取り上げてほしい。
- 8月25日(土)および26日(日)に2夜連続で放送されたNHKスペシャル「フローゼンプラネット」は、カメラがすごくよくなっていることにととても感心した。アメリカバイソンをオオカミが狩りをするシーンでは、何も解説がなく見ても、もう1回見たくなるような動物の不思議な動きがととてもきれいに撮れていた。
- オリンピックがあったのでいつもより本数は少ないが、8月恒例の戦争を振り返る番組がたいへん充実していた。8月14日(火)のNHKスペシャル「戦場の軍法会議～処刑された日本兵～」(総合 後 10:00～10:49)は、あそこまできちんと報告されるとショッキングというか、弁護する立場からするとたいへんなのではないかと思った。よく調べてできた番組だった。以前から、戦争証言の記録をずっと集めてきた成果を、いろいろなところでまとめて使っていると思う。この夏に限らず、そういう試みが花を開いて、実を結んでいると感じ、たいへんよいと思った。
- 9月1日(土)のNHKスペシャル シリーズ日本新生「“死者32万人”の衝撃 巨大地震から命をどう守るのか」(総合 後 9:00～10:13)では、高知県黒潮町の情報防災課長、静岡県下田市の防災監など、災害発生時に被害が想定される地域の防災担当者と、国土交通省総合政策局総務課長、大学教授で課題を議論していたが、キャスターから、政府には何が足りないのか言ってくださいという感じで担当者に陳情をさせているような印象がした。防災をうまく進められない難しさは山ほど

あって、具体的に検証していけば、それなりに前進すると思うが、現地のレポートが結びつかない形で、スタジオでは話をさせていた。担当者は話すことがうまいわけではないので、国土交通省の総務課長は「そのことについては法律でこういうものをつけさせていただきまして」、というような官僚答弁になってしまっていた。国が理由をつけてお金をあまりつけないのかという印象になってしまい、話が発展していなかった。お金をつければすむという単純な話ではないという点で、少しずれていたのではないか。

以前にも社会保障がテーマで、アナウンサーが「どうして予算をつけてくれないのか」と、当局者に「検討する」と言わせたがっている印象を感じたことがあった。それはアナウンサーの役割ではないのではないか。社会保障については難しい問題が多くあって単に金をつけろという話ではないので、陳情団の代わりみたいなことをするべきでないのではないか。

(NHK側)

NHKスペシャル シリーズ日本新生「“死者32万人”の衝撃 巨大地震から命をどう守るのか」は自治体の防災課長に陳情してもらうためではなく、住民自らができること、自治体ができること、国ができること、それぞれに分けて議論をしたいと考え、そのために国の担当者にも、自治体の担当者にも出演してもらった。ご指摘のような印象を与えたのであればたいへん残念だ。どうしても避難が第一と議論が進んだので、放っておくと自分たちで逃げなさいという話になり、国の果たすべき役割がなかなかうまく表に出てこないこともあって、国にできることはないかと水を向けた。国土交通省の答弁が官僚的との印象については、結果として、こういう政策があるのでうまく利用をしてくださいという説明に終始していたためだと思う。もう少し踏み込めればよかったのだが、生放送で時間の制限もあり、もう一步踏み込めなかったという反省をもっている。

- NHKスペシャル 東日本大震災「追跡 復興予算19兆円」を見て、官庁主導と住民のニーズのギャップ、そしてその実態をどこも精査していない深刻さを感じた。膨大な資料収集による具体的な精査をはじめ、被災地以外の補助金の実態、被災地における配分と選択の実態、それに対する行政担当者の見解を、番組はそれぞれ丹念に取材を試みており、秀逸だ。このテーマへの継続的な企画の検討をしてほしい。

○ オスプレイを巡る報道について、7月23日(月)の「ニュースウオッチ9」は、バランスがとれていない印象だ。その日はオスプレイが米軍岩国基地に到着した日だが、在日米軍がオスプレイを配備する安全保障の観点があまり番組の中で出ていなかった。むしろ、墜落の頻度などの懸念が前面に出た報道だった。岩国の反基地活動家の言い分をずっと聞いていて、最後にキャスターの「国は安全確認をしていますが、国に裏切られたという思いを持つ住民の心に届いていません」というコメントは、情緒的で、問題の本質をあまり伝えていない感じがした。オスプレイがなぜ沖縄に配備されるのか。CH46という輸送ヘリコプターの老朽化があり、米軍は機種の変更で、在日米軍も10月に導入することになっている。CH46と比べ、早さは2倍以上、行動半径も4倍になり、尖閣諸島まで給油せずに1時間弱で人員や物資を運べる性能があり、実際のところ上海、フィリピンまで飛んでいける。日米共同の作戦能力がこれで大きくなるし、日本にとっての抑止力もこれで高まることがある。これは1機が6,000万米ドル、日本円で50億円する高額なものなので、防衛省も予算の関係があってなかなか言いにくい状況がある。こういうことを伝えたいので墜落の危険があるとか、安全の問題について取り上げていくべきだ。翌日に、中国の人民日報系の新聞「環球時報」がオスプレイは尖閣の防衛のために日本が配備していると1面で報じている。オスプレイは80年代ぐらいからの長い開発の歴史があって、当初は“未亡人製造器”と言われたが、その後改良され、米軍が使っている飛行機でも事故率が低いほうになっている。米軍は自分たちが乗るわけだから安全対策を図っているのは当然であり、飛行機は墜落する可能性もあるが、ゼロリスクを求める人たちの意見だけを紹介するのはあまり科学的でない印象だ。

8月7日(火)の正午の「ニュース」はオスプレイに関して各県の知事にアンケートをとっていた。当時はオスプレイの沖縄配備前に、全国でも訓練するという話があり、こういうアンケートをとったのだと思うが、知事には配備に関する権限がない。その意見を紹介する意味が本当にあったのか少し疑問に思う。知事は選挙を控えているし、住民の安全を預かっているのに、ポピュリズムから拒否反応を起こすのはしかたない。それをわざわざニュースに仕立てるのはどうかと感じた。安全保障をポピュリズムでもてあそばないほうがよいと思った。国論を二分する問題は税の問題も増税か減税かというのがあるし、原発も維持か脱原発かというのもある。そのへんもある種通じるものがあると思う。報道ではそういうことも考えていくべきだ。

(NHK側)

オスプレイの件は難しい問題だ。その地域の住民の方々は
“Not In My Backyard”、私の地域には欲

しくないという気持ちが強く出る問題だ。ある意味では初めから結論が決まっているような中で考えていかなければならず、国の安全保障を考える場合は指摘のとおりだと思う。しかし、それを地域の住民の視点から見ると、とても議論が難しい。一方的に国の安全保障にとって必要だからそうですとまでは言いにくく、数多くの取り上げ方をしている。キャスターが番組の最後に「十分な説明が必要なのではないか」と言っているところが、苦しい中での説明のしかたであったと思う。オスプレイの安全性については、正確な情報を流し、住民の方々に配慮したニュースを出していきたい。

- 人気女性グループのメンバー卒業のニュースがNHKで伝えられた。引退ではないし、アイドルグループの目立った人が抜けるだけのことで、なぜNHKがニュースを使って取り上げなければいけないのか、はなはだ疑問だ。ぜひ理由を教えてください。

(NHK側)

人気女性グループの件は、当日の朝の打ち合わせで、イベント会場に入ることができる人の数がきわめて少なく、そうとう混乱する恐れがあり、秋葉原の街も場合によっては事故につながる可能性もあり、ニュースとして取り上げる提案があった。報道しないという選択についても議論をした。ニュースには、ストレートのニュースと企画があり、ストレートのニュースはそういう観点で取材したが、情報系のニュース番組の中には、報道の提案趣旨から逸脱して、グループそのものに踏み込んだ取り上げ方になってしまったかもしれない。放送後に、取り上げないという選択肢についてや、ここまでやるのはどうか、などいろいろな意見が出て、議論になった。

(NHK側)

ニュースは地震、災害、選挙、緊急報道、政治経済、社会を含め重要な事件を扱うが、一方で社会現象も扱う。過去には美空ひばりさんが亡くなったときも、山口百恵さんが引退したときにも伝えた。パンダが生まれたというニュースはどのくらい重要かと問われたことがあるが、それは世の中の人がかかなり関心を持っているのであり、なぜこれだけ熱狂して

いるのか、社会現象になっていることをどのぐらいのボリュームでどういう伝え方をするか考えながら、ニュースの一項目として扱っている。今回の女性グループの件については、日本の社会ということを考える面を取り上げる価値があると思う。扱い方とか、とらえ方はいろいろあって、それはやりすぎなど、意見はいろいろあるとは思っている。ニュースの報道で取り上げることもあるのではないかと。

- それはあると思うが、ニュースで伝える必要があるのか。例えば「クローズアップ現代」などで立体的に分析し、エンターテインメントビジネスの成功にはどういう背景があるのかといった切り口で取り上げる方がよいと思う。今回は、引退や訃報ではないので、その点について、よく考えてほしい。
- 竹島問題に対し、韓国の市民が本当にどのように思っているのかを取り上げてもらいたい。報道だけ見ると憎悪がかき立てられ、隣国であるにもかかわらず難しい状況にこれからも陥ってしまう。ネット上では嫌韓の波が押し寄せていて、ある種のファシズムの到来の土壌を作ってしまう危険性がある。冷静な対話がなされるような韓国側の市民たちの声を出してほしい。韓国大統領が引用した従軍慰安婦問題はずっと引っ張られている話で、どのように言説が外交問題まで発展してしまったのかという点を、引いた目線で見えていくことは日本の外交に寄与するのではないかと思った。

(NHK側)

韓国については、なかなか難しい問題があり、おそらくテレビ局が韓国の国民にカメラを向けたら、その瞬間は反日のことばしか撮れない。日韓友好のために竹島はあまり過激なことをせずに、などの本音はなかなか聞けない。結果的に双方のメディアが報じれば報じるほど双方の愛国心に火をつけるような形で、両方の友好関係にひびが入る恐れがとても強いので、これからも取り扱いには十分に注意をしていく。メディアがあおって、助長するようなことにはならないよう、気をつけなければいけない。文化レベル、草の根レベルの交流は幸い続いているので、さまざまな動きも考慮して取材に当たるようにしている。

(NHK側)

今年は日中国交回復40年にあたるので、9月に「NHKスペシャル」で日中問題を歴史も含め取り上げる。韓国についても冷静に物事をとらえないといけないので、「NHKスペシャル」の枠でそういう観点での番組ができないか、検討している。日韓や、日中の問題については、国民感情も絡むので、扱い方、とらえ方を考え、放送局、マスコミの役割として取り組んでいくべきであり、検討している。

- フォークランド紛争がよいケーススタディになる。同じ領土問題で、小さな島で、お互いに何もなさだろろうと思っていたが、占領してみたら過剰反応して紛争にまで至ってしまった。うり二つの事例なので参考にするとより深まると思う。
- 9月8日(土)からの土曜ドラマスペシャル「負けて、勝つ～戦後を創った男・吉田茂」(総合 後9:00～10:13)は、とてもよい感じで重厚な撮られ方だった。マッカーサーが日本に来たときの実際の映像とCGでうまくつなげてあって、今後期待できると思った。
- 土曜ドラマスペシャル「負けて、勝つ～戦後を創った男・吉田茂」は、放送前に吉田茂を演じている渡辺謙さんが、現代日本の抱える問題点について5分から10分ぐらい語る番組を放送していたが、やりすぎではないか。番宣は番宣に押しとどめてほしい。吉田茂は終戦から戦後日本の土台ができた時代の人物なので、今日を考えるうえでも重要だが、それとドラマを結びつけるのはどうか。広報するのならばもっと違ったことをするべきではないかと思った。脚本を書いた人は、ネットで調べると歴史ドラマを書くような人でなさそうだが、終戦直後の日本をどう解釈するかは今の課題に直結してくるので、なかなか大胆な起用だと思った。脚本家は、どういう方なのかお聞きしたい

(NHK側)

土曜ドラマスペシャル「負けて、勝つ～戦後を創った男・吉田茂」は、放送日以前に、少し長めとなる10分間の「NHKプレマップ」として内容を紹介した。番組について、背景なども含めてPRする枠として活用しているが、ご指摘については受け止めたい。脚本については、40代と若い、実力のある脚本家だ。NHKでは土曜ドラマ「チェイス～国税査察官～」をオリジナル脚本で書いている。今回、脚本家に

は初めて歴史資料と格闘してもらった。時代考証の先生や、いろいろな人がサポートしているので、偏った見方にならないように、ここははっきりとフィクションとしても大丈夫とか確認しながら、十分に気を配って制作している。

- 9月2日(日)のE T V特集「吉田隆子を知っていますか～戦争・音楽・女性～」は、文字どおり忘れられていた音楽家の地道な発掘で、貴重な実演の紹介がされていた。タレントの出演もスタジオトークもない、極めてオーソドックスなドキュメンタリーだったが、こうした番組作りがむしろ新鮮な印象を与えており、解説をいれることが、わかりやすさや視聴者サービスであるというわけではないと感じた。

- 「落語でブッダ～釈徹宗×笑福亭たまの爆笑仏教講座～」(Eテレ 29日(水)30日(木) 後11:00～11:25)を見た。落語で仏教を解釈することはとてもおもしろかったが、出演者同士の間をもう少し練ればとてもよい番組になったと思う。中途半端に上滑りしている感じがして、アイデアがもったいないと感じた。どういふ小話をしてもらうかということを考えながら深めてもらうととてもよい切り口が見つかるのではないか。

NHK編成局
番組審議会事務局

平成24年7月NHK中央放送番組審議会（議事概要）

7月のNHK中央放送番組審議会は、11日(水)、NHK放送センターにおいて、12人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、経営計画における「達成状況の評価・管理」（24年度第1四半期・4～6月）について石田放送総局長、および、木田放送副総局長から説明があり、意見の交換を行った。

続いて、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、8月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	福井 俊彦（前日本銀行総裁）
副委員長	岸本 葉子（エッセイスト）
委員	青柳 正規（国立西洋美術館館長）
	大軒 由敬（朝日新聞社常勤顧問（論説担当））
	小田 尚（読売新聞東京本社専務取締役論説委員長）
	倉重 篤郎（毎日新聞社論説委員長）
	紫 舟（書家）
	平 朝彦（独立行政法人海洋研究開発機構理事長）
	龍井 葉二（連合総合生活開発研究所副所長）
	富士 重夫（全国農業協同組合中央会専務理事）
	細谷 亮太（聖路加国際病院副院長、小児総合医療センター長）
	若月 壽子（主婦連合会事務局）

（主な発言）

<放送番組一般について>

- 東日本大震災から1年4か月がたち、東日本大震災に関連する「NHKスペシャル」での取り上げ方を高く評価する。6月2日(土)の「イナサがまた吹く日～風 寄せる集落に生きる～」(総合 後9:00～10:13)は、漁業や農業で暮らしを営んでいる仙台市荒浜地区の人々のドキュメンタリーとして取り上げ、7月7日(土)の東日本大震災「がれき “2000万トン” の衝撃」(総合 後9:00～9:49)は、被災地のがれき処理が進んでいない現状や課題を取り上げるなど、さまざまな切り口で

伝えており、焦点の当て方もすばらしかった。漁業や農業で震災前の暮らしを取り戻したり、がれきを処理しようと被災地の人々が努力している姿は描かれていたが、国や地方自治体の姿が見えてこなかったように感じられた。国や地方自治体は何をやっているのかなど、これからも引き続きいろいろな角度から被災地の実態を取材してほしい。

- NHKスペシャル「宇宙の渚」は第3集まで放送したが、第3集で終わりなのか、まだ続くのかがよくわからなかった。3回シリーズなら“1、2、3”ではなく、“上、中、下”としたり、そのシリーズが終わる回には“完”などの表示をしてほしい。

(NHK側)

NHKスペシャル「宇宙の渚」は第3集で終わりである。
表示のしかたは、今後考えていきたい。

- 番組を“1、2、3…”のように表記しているため、何回シリーズかわからないという意見があった。今までは定曜定時にテレビを視聴していたが、“2夜連続”や“3週連続”といった集中編成が増えており、シリーズの放送のしかたも多様になっている。次回の放送がいつなのかわからず、視聴者に定着しづらくなっている。例えば、番組の末尾に次回の放送日が一目でわかるカレンダーのような表を表示するとよいのではないか。いずれの番組にも表示して、一目でわかるフォーマットに統一すれば、視聴者にも定着すると思う。
- 6月24日(日)、7月1日(日)、8日(日)のNHKスペシャル「知られざる大英博物館」を非常に興味深く見た。7月1日(日)の第2集「古代ギリシャ “白い”文明の真実」(総合 後 9:00~9:58)では、真っ白だと思われていた古代ギリシャ文明の彫刻は、表面をこすりにとって白くしていたという出来事を紹介していたが、大英博物館でそのようなことが行われていたのは非常に興味深いことであり、驚いた。7月8日(日)の第3集「日本 巨大古墳の謎」(総合 後 9:00~9:50)では、日本の古墳からの発掘品が大英博物館に多く収蔵されていることを知って驚いた。大英博物館にはロゼッタ・ストーンなどの有名な展示品があるが、今回の番組で紹介していたように、それ以外にもさまざまな収蔵品があることを知ることができた。ナビゲーターの出番が少なかったことが残念だった。
- NHKスペシャル「知られざる大英博物館」は、NHKの取材力を生かした番組であり、見応えがあった。第3集「日本 巨大古墳の謎」では、巨大古墳を作って

いた古墳時代がなぜ終わったのかという謎について、番組内で一定の答えを出していた。日本の古墳で発掘されたものが、なぜ遠く離れた大英博物館に大量にあるのかと思ったが、イギリスが国家として文化的統治を行ったことで、丁寧にしっかりと保存されていたというプラスの面もあった。日本やギリシャ、エジプトで発掘された、各国の貴重な品々がいまだに大英博物館に収蔵されているという現状や、天皇の墓とされた古墳が現在でも立ち入りが規制されており、発掘や調査ができないことについて、考古学的見地からの問題提起を盛り込めば、番組にさらに奥行きが出たのではないかと感じた。

放送時間が長い番組は、すべてを見るのが難しい場合もあり、番組の冒頭でどのような内容なのかを項目立てて、大筋を紹介してほしい。

(NHK側)

「NHKスペシャル」は、短時間のPR番組を放送しており、番組のポイントなどがわかる内容になっている。「NHKスペシャル」の冒頭でその内容を放送することはないが、この番組をさまざまな時間帯で放送することで「NHKスペシャル」をPRしている。

○ ぜひ「NHKスペシャル」の冒頭でも放送してほしい。

(NHK側)

冒頭で放送してしまうと、番組の本編を見てもらえず、番組としてきちんと伝えたかった部分が視聴者に伝わらない可能性があるので、冒頭では放送していない。

(NHK側)

E P G (電子番組表)には番組内容の情報を載せている。載せる内容をもっと充実させたり、これを読んだら絶対に番組を見たいとなるといったポイントを掲載するなどの工夫をしているところである。

○ 7月4日(水)の「NHKニュース7」では、“ヒッグス粒子とみられる粒子発見”というニュースを伝えていたのはすばらしかった。CERN(ヨーロッパ合同原子核研究機関)による巨大な円型のトンネルを使った壮大な実験や、ヒッグス粒子の存在を唱えた理論の基になった、南部陽一郎さんが提唱した理論などを詳しく紹介しており、NHKの取材力を感じた。新聞はこのニュースを大きく取り上げていた

とは言えず、サイエンスジャーナリズムの弱体化が感じられ、日本の報道の危機的な状況の1つなのではないかと思った。また、サイエンスの分野は費用などの面から1つの国ではなかなか支えきれなくなっており、CERNのようにヨーロッパ各国が資金を出し合って研究に取り組んでいる。今回のニュースやこのようなサイエンスが置かれている状況を取り上げることで、国策として取り組んでいかなければならないという動きや弱体化しているサイエンスジャーナリズムの活性化につなげてほしい。

- 7月7日(土)の地球ドラマチック「めざせ最高峰！アフガニスタン人初の挑戦」は、標高7,492メートルのアフガニスタンの最高峰に、2009(平成21)年にアフガニスタン人として初めて登頂した若者たち取材したドキュメンタリーであり、非常に感動した。アフガニスタンの山岳地帯の圧倒的な自然とその美しさ、アフガニスタン人が登頂に挑んでいく、誇り高く、非常に生き生きとした表情や姿がありのままに捉えられており、メッセージ性が強い番組になっていた。アフガニスタンはタリバンなどの政治的な問題や課題に注目が集まるが、番組を見て“アフガニスタン観”が変わった。そこに生きる人々のありのままの姿、本当の表情を撮ることが、どんな雄弁なことよりも強いメッセージになって、われわれの世界観や自然観を変えることがある。この番組はフランスのテレビ局の制作だが、NHKにもこのようなすばらしい番組を制作してほしい。
- 「平清盛」は毎回楽しく見ている。與那覇潤さんが書いた「中国化する日本」を読んだうえで、「平清盛」を見ると、番組をさらに興味深く見ることができる。近世とは中国の宋の時代から始まったと言われているが、貴族制度を廃し、皇帝独裁の政治が始まった時代でもあり、科挙が行われ、中央集権が始まった。経済や社会が自由になっていく宋の姿を見て、清盛や信西、後白河法皇たちがその方法を学んで改革を進めようとした。日本の中世は武士の時代と言われているが、経済面では宋銭が使われていた。源氏は従来型の農業中心の荘園制社会を維持したいという、いわゆる守旧派として捉えられており、平氏と源氏の違いが源平の戦いに表れている。院政が成立したことも中世の特徴であり、こういったさまざまな視点から番組を見ると、非常に興味深く見ることができる。
- ドラマ10「はつ恋」は、40代の女性を中心に視聴してもらいたいという意図が伝わってくる内容である。同じように「あさいち」も40代の女性を主な視聴ターゲット層としている内容になっていると感じる。一方で、「土曜ドラマスペシャル」は平成19年放送の「ハゲタカ」のように、働き盛りの男性に共感してもらえるドラマを放送して男性視聴者の定着を図るなど、男性やそれ以外の年代に視聴しても

らうためのねらいも必要だと思う。

- 「総合診療医 ドクターG」、6月16日(土)と23日(土)の「マイケル・サンデル 5000人の白熱教室」(Eテレ 後 2:00~2:59)、「スーパープレゼンテーション」は、いずれも番組を導いていく役割を教育者が担っており、見応えがある。アナウンサーやタレントが番組を進行している番組は、似通ったことばが多く、退屈な印象を受ける。教育者など、自分の心と頭で考える立場の人を番組に起用することは、日本がモデルにできるような国がないと言われる時代をキャッチアップしていると感じる。
- 「100分de名著」は、今年度から司会が代わった。新しい司会は“名著”にしっかりと向き合っており、司会の立場を十分に踏まえて、番組に主体的に関わっているようで、より見たい番組になっている。
- 「ハーバード白熱教室」や「マイケル・サンデル 究極の選択」は、サンデル教授による授業そのものを伝えているという印象だったが、「マイケル・サンデル 5000人の白熱教室」は5,000人という聴衆を集めた講義で、ショーアップされてしまっているように感じられた。
- 7月7日(土)の追跡者 ザ・プロファイラー「ヒトラー 独裁者という名の怪物」(BSプレミアム 後 9:00~9:59)は、ヒトラーが世に出てきたときの状況を考えるとタイムリーな企画であり、興味深く見た。今回の番組は取り上げる内容が多すぎたため、あっという間に終わってしまい、番組尺が短く感じられた。ヒトラーの演説、若い頃やたまたま撮られた笑顔の写真など、一つずつを掘り下げると、出演していた社会学者や精神科医からはもっと多くの意見を聞くことができたのではないかと感じた。もう一度、一つ一つを細かく検証し、当時の時代背景や群衆の心理などを掘り下げることによって、別の角度から描いた番組を作ることができるのではないかと感じた。
- 「コズミック フロント～発見！驚異の大宇宙～」は、宇宙についての知識や関心がない視聴者も興味深く見るように、非常に丁寧に制作している。全編を海外取材して制作している回もあるが、NHKの単独での制作、海外のテレビ局との共同制作など、どのような制作体制なのか。海外と番組を制作する体制を日頃から築いていることが、NHKスペシャル「宇宙の渚」のような大きな取り組みや“ヒッグス粒子とみられる粒子発見”というニュースを伝える際にも役立っていると感じた。

(NHK側)

「コズミック フロント～発見！驚異の大宇宙～」は去年4月から始まった番組である。制作局の科学環境番組部が制作しているが、海外のテレビ局が制作した素材を購入して、独自取材したインタビューを加えて制作する場合もある。

- 6月26日(火)の「衆議院本会議」関連のニュースは、午後1時から4時50分まで、消費税率引き上げ法案の衆議院本会議での投票の様子を中継しており、状況が非常によくわかった。さらに、小沢一郎民主党元代表と野田首相の会見も伝えていた。今回のように漏らさずに中継するために、投票や会見が行われる日時は事前にわかっているのか。

原子力発電所の稼働に反対する集会やデモが行われているが、これに対するNHKの報道の姿勢を知りたい。

(NHK側)

消費税率引き上げ法案の衆議院本会議での採決は、日程が延びて7月26日になった。事前の取材から、民主党の中に反対票を投じる議員や棄権する議員が多数出る可能性があり、今後の政治の動向は民主党分裂などの方向に行く可能性が非常に高いと判断した。その段階で、衆議院本会議が開かれ、消費税率引き上げ法案の投票が行われる際には中継をして、各政党の代表者に直接インタビューすることを計画した。そして、野田首相や小沢元代表の会見が行われる段階できちんと伝えるという対応を取った。今回のほかに平成17年の時のように郵政解散など、政治の大きな節目の際には、長時間にわたって衆議院本会議の様態を中継することが必要だと考えている。

さまざまな場所で行われているデモをすべて取材することは難しいが、今回は原発の事故後、初めて原発を再稼働するということが大きな節目だと考えた。原発の再稼働に反対する人も多くいるので、その点についても伝える必要があると考え、首相官邸前でのデモを「ニュース」で取り上げた。今後も、デモについては毎回伝えるということではなく、節目のときに伝えていく。

原子力発電については、安全性や事故が起こったメカニズムの問題について報道した。エネルギー問題について全般的

に考える番組として、7月14日(土)にNHKスペシャル「激論！ニッポンのエネルギー」を放送する。将来の原発の割合をどのぐらいにするのかについて、政府からはいくつかの案が出ており、8月中には方針を決めるということなので、このタイミングでさまざまな立場の方に出演していただいて、エネルギー問題について考える討論番組に取り組んでいきたい。

- 「衆議院本会議」関連のニュースで、消費税率引き上げ法案など、社会保障と税の一体改革に関連する法案の採決の様子を中継したことは評価できる。消費税率引き上げ法案の投票の際に、民主党の議員で反対票を投じた議員の数が画面に出ていたことに感嘆した。画面に表示していた議員数はどのように確認していたのか。

(NHK側)

本会議場の壇上で投票していくので、民主党議員が投票する際に、記者が議員の顔、賛成と反対のどちらに投票したかを確認して投票数も数えていった。また、途中で数え間違いや漏れがあるといけないので、アナウンサーのコメントは「少なくとも何人が反対した」というように、確認できた投票数を伝えるように配慮した。

(NHK側)

放送の現場では、日頃から民主党を取材している記者が議員の顔写真と照らし合わせながら、誰が投票しているかを確認していた。本番では確認できない議員はいなかった。

- 首相官邸前のデモについての報道のしかたは、テレビ局や新聞社など、各社ともに悩んでいるのではないか。今回のデモは自主的に始まり、多くの人々が自主的に続き、量だけではなく、質的にも新しいものが起きている。NHKはなぜこのニュースを報じないのかということが話題になっており、それによって人々の関心を呼んでいるような状況も起きている。報道とはその瞬間をつかまえる感性だと思うので、NHKは数や節目などだけで計画的に動くことがないようにしてほしい。

- 「ニュース」では“リポーター”が出てくるが、番組において、どのような位置づけなのか。

(NHK側)

「ニュースウオッチ9」のリポーターはアナウンサーが務めている。「NHKニュース おはよう日本」のリポーターは契約している外部のキャスターが務めている。記者がリポートする際には、名前と所属している部を紹介している。

(NHK側)

アナウンサーが複数出演する「ニュースウオッチ9」では、井上あさひアナウンサーは“キャスター”という役割で司会をしており、松村正代アナウンサーは“リポーター”という役割で取材を行い、現場にもロケに行っている。同じアナウンサーだが、主にキャスターワークをするアナウンサーとリポーターワークをするアナウンサーが異なるため、役割を意識した表示のしかたをしている。この場合は、1つの仕事の役割という意味で“リポーター”という表示をしている。

- ロンドンオリンピック関連の番組は、どのような番組を予定しているのか。

(NHK側)

ロンドンオリンピックが閉幕する、8月13日(月)の夜に「ロンドンオリンピック総集編」の放送を予定している。そのほか、日本人選手が活躍したり、金メダルを獲得した際には特集番組を放送したいと考えている。

(NHK側)

ロンドンオリンピックは、総合テレビで230時間、BS1で350時間の放送のほか、ネット生中継(ライブストリーミング)、NHKオンデマンド、データ放送など、さまざまな形で楽しんでほしい。

(NHK側)

NHKオンデマンドでは、通常の配信期間を延長して配信する予定である

- 夏の電力需給が厳しくなったときに、電力の状況を伝える以外に、ロンドンオリンピックや高校野球の中継などについてはどのように対応するのか。

(NHK側)

電力の事情や計画停電について伝えることは考えているが、ロンドンオリンピックや高校野球を含めた放送時間の短縮などは考えていない。

(NHK側)

高校野球は、主催者側が試合の実施を電力消費が集中する時間帯から外すなどの対応をしている。

NHK編成局
番組審議会事務局

平成24年6月NHK中央放送番組審議会（議事概要）

6月のNHK中央放送番組審議会は、18日(月)、NHK放送センターにおいて、13人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、経営計画における「達成状況の評価・管理」の試行について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、7月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	福井 俊彦（前日本銀行総裁）
副委員長	岸本 葉子（エッセイスト）
委員	青柳 正規（国立西洋美術館館長）
	大軒 由敬（朝日新聞社常勤顧問（論説担当））
	倉重 篤郎（毎日新聞社論説委員長）
	駒崎 弘樹（NPO法人フローレンス代表理事）
	紫 舟（書家）
	龍井 葉二（連合総合生活開発研究所副所長）
	田中ウヰェ京（(株)MJコンテス代表取締役、メンタルトレーナー）
	富士 重夫（全国農業協同組合中央会専務理事）
	細谷 亮太（聖路加国際病院副院長、小児総合医療センター長）
	若月 壽子（主婦連合会事務局）
	和田 章（社団法人日本建築学会会長）

（主な発言）

<放送番組一般について>

- 5月26日(土)と27日(日)のNHKスペシャル「未解決事件 File.02 オウム真理教」(総合 26日(土)後7:30~8:43、9:00~10:13、27日(日)後9:00~9:58)は、番組を見たことによって、麻原彰晃こと松本智津夫死刑囚や教団の意図は何だったのか、なぜ若い人や研究者などがオウム真理教に走ったのかなど、さらに謎が深まった。27日(日)の「オウムVS警察 知られざる攻防」では、警察のオウム真理教への捜査について、今までにない視点で深く取材していた。一方で、課題も残っていると感じた。

- NHKスペシャル「未解決事件 File. 02 オウム真理教」は非常に力が入っており、実際のニュース映像と再現ドラマを組み合わせた演出は違和感なく見ることができた。しかし、再現ドラマでオウムの教団施設内の信者を描いた映像が、非常に生々しかった。こういった場面を再現ドラマとして描くかは、考慮する必要があると感じた。また、今後もさまざまな未解決事件を取材してほしい。

- 6月2日(土)のNHKスペシャル シリーズ日本新生「“雇用の劣化”を食い止める！」(総合 後 7:30~8:43)は、雇用という非常に難しいテーマを扱った番組であった。新しい働き方などの提言を紹介したうえで、スタジオで討論に参加した人やネットでつながっている人が“賛成”、“異議あり”を判断して、議論していた。しかし、日本社会がこういう世の中になったらよいという提案なのか、自分がそのようになりたいという提案なのか、といった基準を定めていない中で、賛否を聞いて、議論していたために、議論がかみ合っていない部分もあったように感じられた。この番組のねらいが達成できていたのか、疑問に思うところや、議論に参加した人たちもフラストレーションがたまった部分があったと思う。意見を言ってもらってから賛否を問うような進め方や、“4時間正社員”などの具体例をテーマに議論していくと、さらに充実した内容になったのではないか。どのような意見が出るかわからない部分はあるが、視聴者参加番組は言いつばなしで終わってしまう傾向にあるので、一定の結論が出るような仕掛けが必要だと思う。

(NHK側)

視聴者参加の討論番組は、時間的な制約もあり、議論のための議論になってしまうこともあるが、議論を踏まえた具体的な結論や、結論まで至らなくてもいくつかの選択肢の可能性を提起することを試行錯誤しながら目指している。特に雇用や働き方の問題は、日本の雇用の在り方が変わっていくために、放送のつど、問題の提起のしかたも変えている。例えば、番組で取り上げた広島電鉄については、前回の放送で正社員と契約社員の区別をなくすことが組合で大きな議論になっていると紹介したが、今回の放送では、契約社員をすべて正社員にした結果を紹介した。1回の放送で結論が出る問題ではなく、問題をどのように乗り越えているかのプロセスを段階を踏んで伝えていっており、これからも継続して放送することが大事だと考えている。

- 6月2日(土)のNHKスペシャル「イナサがまた吹く日～風寄せる集落に生きる

～」（総合 後 9:00～10:13）は、東日本大震災で津波によって失われてしまった仙台市の荒浜地区の風景を7年前に取材したときの映像と比較して紹介した、心に響く番組だった。ぜひ5年、10年後にも、このような番組を制作してほしい。

- 5月23日(水)の「ニュースウオッチ9」では、大量の新薬が生まれる中で、副作用を招く薬の飲み合わせや薬そのものを取り違える医療ミスを防ぐため、薬剤師が救命救急医療の現場で重要な役割を果たしていることを紹介していた。薬剤師は、医師の処方箋に従って、薬を調剤して窓口で渡してくれる身近な存在というイメージがあるが、救急現場でも重要な存在になっていることを知った。番組で紹介していた救急現場で活躍している薬剤師は印象深く、番組で取り上げることで、薬剤師を志す人の励みになると思う。
- 6月8日(金)の関西電力大飯原子力発電所の再起動に関する「首相記者会見」は、記者会見の中継を途中で打ち切り、スタジオから記者解説を伝えていた。首相の記者会見は最初から最後まで放送すべきではないかと考えるが、どのような判断をしているのか。

(NHK側)

首相の記者会見は、首相が海外に行っている際に行う会見などもあり、すべての会見を中継しているわけではない。また、中継する会見も最後まですべてを伝えるものもあれば、今回のように途中まで伝えるものもある。基本的にはニュースとしての価値で判断している。考え方としては、首相の考えや記者との質疑応答など、その会見の核心部分を伝えたと判断したら、会見の中継を終えている。今回、会見を中継した午後6時台は地域のニュースを伝えている時間帯であるため、会見の主旨を伝えきったと思われた時点で速やかに中継を終えて、地域のニュースに移ったほうがよいと判断した。

- 6月10日(日)の日曜討論スペシャル「どうする“社会保障と消費増税”」は、放送前に与野党協議に入ることを決めていたこともあり、極めて落ち着いた討論だった。このような冷静な討論は政治を前進させるものであり、大変興味深く見ることができた。しかし、視聴者から寄せられた意見を紹介する画面で、青筋を立ててどなったり、汗を垂らしている漫画があったが、番組全体の議論と合っておらず、残念だった。

- 6月15日(金)の情報LIVE ただいま!「心臓がよみがえる!? 最新!再生医療の衝撃」(総合 後 10:08~10:56)は、6歳未満では初めてとなる脳死判定を受けた男の子の心臓を、10歳未満の女の子に移植する手術を執刀した大阪大学の澤芳樹教授が、手術を執刀した当日に出演しており、非常にタイムリーだった。“空中タイムキーパー”の演出は、番組に親しみを持たせようとしているのかもしれないが、不要ではないか。
- 6月3日(日)のETV特集「亡命詩人の憂鬱~23年目の天安門事件~」は、ドイツに亡命した後も闘い続け、活動している中国人の詩人がいることを知った。天安門事件で投獄され、今も中国に残っている中国人たちの精かんな顔つきが印象的であり、感銘を受けた。
- ETV特集「亡命詩人の憂鬱~23年目の天安門事件~」は、印象に残る番組だった。
- 「ららら♪クラシック」は、NHK交響楽団以外のオーケストラの演奏も取り上げる番組として始まったが、「N響アワー」と比較してもクラシック音楽番組として満足できる内容になってきていると感じた。6月17日(日)の「小澤征爾 渾(こん)身のコンサート~2012年水戸」は、小澤さんの指揮による、水戸室内管弦楽団のコンサートを取り上げ、「交響曲第35番『ハフナー』」や「チェロ協奏曲第1番ハ長調」を放送していた。非常に質の高い演奏で、ゲストとのスタジオトークも演奏を引き立てる内容になっていた。
- NHK俳句「俳句さく咲く!」は、ゲストの芸人やアイドルが、若者たちから投稿されたエピソードを俳句として完成させる番組であり、先生として宇多喜代子さんがゲストを指導しているが、ゲストからは日本語や俳句への興味が伝わってこないなので、ゲストの人はもう少し考えてほしい。
- 「にっぽんの芸能」は、第1部の「花鳥風月堂」と第2部の「芸能百花繚乱」に分かれている。古典芸能になじみの薄い若い人たちに番組を見てもらいたいという意図で「花鳥風月堂」を放送しているのだと思うが、魅力を感じない。

(NHK側)

日本の古典芸能は若い人になかなか見てもらえないので、「にっぽんの芸能」は去年から、前半の15分を入門編である「花鳥風月堂」、後半の43分はじっくり見てもらう「芸能百花繚乱」という構成に変更した。世帯視聴率に大きな変化

は見られないが、若い人からは、古典芸能についての知らないことがわかり、勉強になったという反響をいただいている。

- 6月10日(日)のBS世界のドキュメンタリー選「ビンラディン追跡の20年～防げなかったテロ攻撃～」(BS1前11:00～11:48、後0:00～0:47)は、さまざまな関係者に深く取材しており、見応えがあった。アメリカ政府の中心人物にもしっかり取材をしていたことに感心した。NHKとBrook Lappingの国際共同制作ということだが、NHKはどのように制作に関わっていたのか。また、共同制作の構造はどのようにになっているのか。

(NHK側)

「BS世界のドキュメンタリー」は、既に制作された番組をNHKが購入して放送することが多いが、「ビンラディン追跡の20年～防げなかったテロ攻撃～」については、国際的な関心が非常に高いテーマだったので、NHKも企画の段階から制作に参加した。そのため、日本人の観点や意見も反映した番組になった。また、NHKから海外に呼びかけて共同制作を行うケースもある。

- 1964年に開催された東京オリンピックは、戦争から立ち直ろうとする日本に元気を与えた。2020年に東京オリンピックが開催されれば、東日本大震災から立ち直ろうとする日本に元気を与えると思う。しかし、国民がオリンピックの開催に積極的ではないことが招致に対するマイナス要因となっていると聞いた。NHKは、オリンピック招致についてどのように取り組んでいくのか。

(NHK側)

NHK会長もオリンピック招致委員会評議会の委員に入っている。その中で、連携を取りながら取り組んでいきたいと考えている。

(NHK側)

IOC(国際オリンピック委員会)の調査では、東京都民のオリンピックの開催支持率は半分程度であり、招致に向けた大きなマイナス要素になっていると言われている。こういった点も踏まえて、さまざまな形で招致を盛り上げていきたい。

- 今回の生活保護の不正受給についての一連の報道は遺憾に感じている。生活保護は、必要とする人に十分に行き届いているとは言えず、生活保護制度の構造的な課題やセーフティネットの在り方について、きちんと議論していかなければならないと思う。生活保護の不正受給を非難するような報道だけでなく、生活保護のありようを考え直すきっかけになる番組を作ってほしい。

(NHK側)

生活保護については、去年、NHKスペシャル「生活保護 3兆円の衝撃」を放送した。

- 東電女性社員殺害事件について、再審の開始が決まった。15年前に起こった事件であり、当時の事件の概要を知らない人が増えているので、どのような事件だったのか、なぜ15年にわたってネパール人の元被告が無実の罪で捕まらなければならなかったのか、このような結果を生んでしまった警察や検察の捜査の仕組みはどのようなになっているのかなどに踏み込んだ番組を放送してほしい。

(NHK側)

東電女性社員殺害事件については、再審開始の決定が出た6月7日(金)に、クローズアップ現代「東電女性社員殺害事件 再審の衝撃」を急ぎよ放送して、事件や捜査、裁判の構造について伝えた。

- 放射能に対する注意報を放送でも取り上げるべきではないか。次に大きな地震が起こった際に、放射能に対する警告や風向きによる被害の状況などを知らせるべきではないか。

(NHK側)

地震が起きた際には、原子力発電所が正常に稼働しているか、さまざまな被害が出ていないかなどを直ちに取材している。東京電力福島第一原発の事故では、放射能の影響予測システム“SPEEDI”など、精度が不確かな情報については伝えるのが遅れてしまうことがあった。今回、原子力災害の緊急報道を検証した。今後は、視聴者が求めている重要な情報になりうる場合があると判断したときは、異なる意見や考え方なども情報として取り上げ、その情報の不確実性を含めて、踏み込んで伝えていきたいと考えている。

- 日本の原子炉建屋は1基も免震構造を採用していないが、地震が少ないフランスでは、ITER（国際熱核融合実験炉）を建設する際に免震構造を採用している。原子力発電を継続するのか、やめるのかという議論があるが、継続するなら、恐れるだけではなく、耐震などに真剣に取り組む必要がある。

- 「平成24～26年度NHK経営計画」の3か年の基本方針で、“新しい時代の文化の創造に貢献します”とある。“新しい時代の文化”には、放送におけるブロードキャスティングからコミュニケーションへという移行があり、若者もそれを求めていると思う。ツイッターやフェイスブックなどのソーシャルメディアはコミュニケーションの最たるものであり、これらを活用して、若者を巻き込むような番組を制作してほしい。また、NHKでは、30秒の映像を募集して入選作品を放送で紹介する「ミニミニ映像大賞」という取り組みを行っているが、若者が自分たちの周りにある課題を見つけ、考え、解決策を示すことを映像で募集し、若者とツールを作るという方法もあるのではないか。若い世代にリーチしづらい部分をNHKが先取りすることによって、新しい時代の文化の創造につながると思う。

（NHK側）

NHKスペシャル「宇宙の渚」に関連して、プロモーション動画コンテストを実施した。視聴者にNHKクリエイティブ・ライブラリーにあるNHKアーカイブスの素材を使って、60秒のPR番組を作ってもらい、応募いただいた。およそ150作品の応募があり、NHKネットクラブで人気投票を行ったほか、GyaO!やYouTube、ニコニコ動画にも掲載し、受賞作品は放送でも紹介した。

大河ドラマ「平清盛」では、担当のプロデューサーが番組の解説をツイッター上で放送と同時に行うSNSとの連携に取り組んでいる。NHKの番組を見てもらうために、さまざまなコミュニケーションのツールを試行している。

NHK編成局
番組審議会事務局

平成24年5月NHK中央放送番組審議会（議事概要）

5月のNHK中央放送番組審議会は、21日（月）、NHK放送センターにおいて、14人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、国内放送番組の種別の実績、種別ごとの放送時間（23年10月～24年3月）について報告があった。

続いて、仕事ハッケン伝「大島麻衣×羽田空港グランドスタッフ」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、6月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	福井 俊彦（前日本銀行総裁）
副委員長	岸本 葉子（エッセイスト）
委員	青柳 正規（国立西洋美術館館長）
	潮田 道夫（毎日新聞社論説委員）
	大軒 由敬（朝日新聞社常勤顧問（論説担当））
	小田 尚（読売新聞東京本社取締役論説委員長）
	駒崎 弘樹（NPO法人フローレンス代表理事）
	紫 舟（書家）
	平 朝彦（独立行政法人海洋研究開発機構理事長）
	龍井 葉二（連合総合生活開発研究所副所長）
	田中ウヰェ京（（株）MJコンテス代表取締役、メンタルトレーナー）
	富士 重夫（全国農業協同組合中央会専務理事）
	若月 壽子（主婦連合会事務局）
	和田 章（社団法人日本建築学会会長）

（主な発言）

<国内放送番組の種別の実績、種別ごとの放送時間について

（23年10月～24年3月）>

- 複数の種別を適用している番組が比較的多いチャンネルがある。これだけ複数の種別を適用していれば、種別の調和を保つことができるのは当然のように思われるが、結果としての種別ごとの割合をどのように評価すればよいのか。

(NHK側)

複数の種別を適用している番組は、等分ではなく、番組の内容に応じてそれぞれの種別の比率を決めている。

年ごとや月ごとの推移を見てもらい、前年や前月から大きな変動があれば注目してほしい。

総合テレビの報道番組の割合は平成24年度は48.6%となっている。22年度、23年度は東日本大震災に関連した番組が多かったため、22年度が51.0%、23年度が50.8%と、50%を超えていた。

- 各チャンネルの種別の比率は、ふだん感じている印象と合っていると思う。
- 教育番組は“学校教育または社会教育のための放送番組”と規定しているが、“社会教育”は“生涯教育”という呼び方をしている場合もある。教養番組についても“教養”ということばの捉え方が揺れ動いている。種別についても、時代に即した内容となるよう、随時見直して行ってほしい。
- 今後も審議会では、半年ごとの報告の都度、番組の種別の分類や比率が適切かどうか議論していきたい。

<仕事ハッケン伝「大島麻衣×羽田空港グランドスタッフ」

(総合 4月12日(木)放送) について>

- 楽しめる番組であったが、たった1週間で飛行機1便を送り出す責任者という大きな仕事を成し遂げるのは現実では難しい。指導している先輩たちが、仕事に挑戦しているタレントを近くで助けてくれているということを番組の中でもきちんとフォローしてほしい。
- タレントたちがやってみたかった仕事に本気で挑み、もう一つの人生を体感する番組という触れ込みだが、職業を紹介する番組であるという印象だ。仕事の内容を広く視聴者に知ってもらうことができるメリットがあるとはいえ、タレントを受け入れる企業はさぞかし大変だろうと思う。
幅広い視聴者の興味を引き付けるために、演出としてスタジオのトークをはさんでいるが、バラエティ番組のようで、少々うるさく感じた。

○ 1週間という短い期間で初めての仕事を成功させるのは難しい。うまくいくようタレントを手助けするのではなく、失敗の場合も含めてありのままの様子を伝えることが大切だと思う。そうすれば、たとえ憧れの仕事であったとしても、現実には大変だということが伝わるのではないか。

○ 自分の子どもと一緒に番組を見たところ、「仕事っておもしろい」と言って、食い入るように見ていた。子どもに仕事の楽しさややりがいを教えることは非常に大切なことである。また、親にとっても、自分の経験と重ね合わせながら、そばで子どもの反応に対してどのように接すればよいのかを学ばせてくれる番組である。

タレントは自分をさらけ出して仕事に挑んでおり、その人柄をうかがい知ることができた。

番組全体はタレントが仕事に本気で挑むという張り詰めた雰囲気だが、スタジオトークの部分は心地よい、リラックスできる演出になっている。

実際に仕事に挑戦したことによって、タレントが学んだことを最後にまとめて紹介していると、これから仕事を選ぼうとしている若者に仕事選びの参考になると思う。

「仕事ハッケン伝」では、取り上げた企業の名前などが映像に映るが、特定の企業のPRにつながるのではないかと気になった。

(NHK側)

企業を紹介するのではなく、仕事の肝となる部分を紹介するという視点で取材している。どれだけ注意しても、会社のロゴなどが映ってしまうことがあるが、企業名はコメントしたりしないようにしている。

○ タレントが挑戦する仕事は、タレントへのアンケートから選ぶのか。

(NHK側)

タレントへのアンケートから選ぶ場合もあるが、企業への取材や、番組を特に見てほしい若い世代がどのような仕事に興味があるのかというアンケートなどをもとに決めている。業種が偏らない配慮もしている。

○ タレントがわずか1週間仕事をしたくらいでは何も成し遂げることはできないだろうという先入観を持っていたが、本気で挑んでいる様子からは仕事の肝となる部分が伝わってきた。仕事に挑んだ大島麻衣さんにも非常に好感が持てた。

- 一つの仕事を取り上げる番組としては、3月まで放送していた「あしたをつかめ～平成若者仕事図鑑～」と同じような印象を受けた。

最近の社会は仕事に対する考え方が変わってきており、仕事を選ぶことへの意識が強くなっているように感じるが、仕事の肝となる部分や大変だけれど楽しそうということが番組から伝わり、仕事を選ぶ助けになればよいと思った。

スタジオのトークは、少し落ち着きがないような印象もあるが、番組の盛り上げに一役買っていたと思う。

- 内容的にはあまり印象に残るものがなく、仕事そのものを紹介する番組としては内容が薄い気がした。しかし、この番組には、憧れの仕事への挑戦という、あり得たかもしれないもう一つの人生を通じて、タレントが自分自身を発見していくという一面があり、その点では興味深いと感じた。

また、夢に向かって進んでいる10代の若者にとっては、タレントと自分を重ね合わせて、憧れの仕事を疑似体験できる、インパクトがある番組といえるのではないか。

- 楽しく見るのができた。若い世代の人たちは、能力が高いがあきらめてしまうのが早いと思うので、あきらめずに努力した人は必ず結果がついてくるといったメッセージが伝わる番組を目指してほしい。初めての仕事でうまくいかず、失敗したり、挫折したりして、能力がない、格好悪い自分を知る中でも、そのような状況から逃げずに向き合った人だけに、人との絆や成長が与えられるといったメッセージも伝えてほしい。

- 空港のグランドスタッフという仕事について知ることができ、制服のスカーフはそれぞれが自由な巻き方をしてよいということは新しい発見だった。

仕事に挑むタレントの姿を通して、若い人たちに、その仕事の具体的な内容や社会的意義を気付かせる有意義な番組だと思う。タレントの緊張した表情や涙も自然に受け入れることができた。

スタジオには現場でタレントと一緒に働いた人たちがいたので、仕事に挑戦したタレントと那些人たちとのトークをもっと詳しく聞きたかった。

(NHK側)

タレントのふだんの表情を知っている友人をゲストに迎え、仕事に挑んでいるときとふだんとの表情などの違いについてのコメントを期待している。また、その仕事に興味がある人などもゲストに迎え、トークにさまざまなバリエーションを持たせることをねらいとしている。

○ 飛行機1便を送り出す責任者という大きな仕事を任されるにあたって不安になっているタレントに対して、先輩のトレーナーが自分とタレントを“母と子”や“自転車に乗る”ことに例えて励ますエピソードや、そのエピソードをその後のナレーションでもうまく使っていたことが印象的だった。このように印象に残るコメントが毎回あると、さらにインパクトがある番組になると思う。

○ 「仕事ハッケン伝」は去年のファーストシーズンの放送から見ている。今回視聴したセカンドシーズンの第1回も印象に残る回であり、仕事に挑戦したタレントの成長がうまく描かれていた。

たった1週間仕事をしただけで、新入社員でもすぐには任せてもらえないようなミッションに挑戦して、成功するはずがないという“虚”の部分と、仕事に挑んでいるタレントの真剣な表情や上司からの厳しい言葉から伝わってくる“実”とのバランスが取れていると思う。

仕事に興味があるから見る人や、挑戦するタレントに興味があるから見る人など、番組を見るきっかけは視聴者によって異なると思うが、仕事をするの大変さ、格好悪いと思われても本気で挑戦することの尊さなど、視聴者の印象に残るものがあればよいと思う。

番組エンディングのスタジオでの「これからは飛行機の出発直前ではなくて、早めにゲートに行こう」という何気ないコメントだが、仕事に対する尊敬の念が伝わる、すばらしいコメントであり、もっと大きく取り上げてほしかった。若い人たちは、仕事を選ぶ意識がある一方で、選べる仕事が少ないという環境に置かれている。お金を出せばサービスが提供されるのが当たり前という意識の中で、仕事に対する距離感が傲慢になりがちであるが、真剣に仕事に挑戦しているタレントの姿を通して、仕事の本質を伝えていた。

タレントが実際に仕事に挑戦したことによって学んだ、その仕事の秘けつや大切なことは何かというまとめと、取り上げた仕事についての収入の額や離職率などの具体的なデータなどの紹介という、2つの要素が加われば、さらによい番組になると思う。

(NHK側)

「仕事ハッケン伝」は去年、ファーストシーズンとして9回放送した。4月からはセカンドシーズンとして放送を開始したところであり、スタジオの演出については試行錯誤しており、非常に参考になった。仕事についてのデータやその仕事の極意などは盛り込んでみたいと思う。

決して成功だけを見せようとしているのではなく、失敗したとしてもありのままに見せるつもりで番組を制作している。

番組として成功するように誘導していないが、仕事に挑戦するタレントの皆さんが非常に器用で優秀なため、あまり失敗がないというのが現状である。

<放送番組一般について>

- 4月1日(日)のNHKスペシャル MEGAQUAKE II 巨大地震 第1回「いま日本の地下で何が起きているのか」では、東北大学の校舎の柱が崩れ落ちる映像や、金華山の神社の鳥居が倒れ、建物が壊れる映像などがCGで再現され紹介されていたが、本物の映像と見間違ふほどリアルな映像であった。誤解を招く恐れがあるので、注記はもっとわかりやすく表示してほしい。
- 4月22日(日)のNHKスペシャル 宇宙の渚 第1集「謎の閃光(せんこう) スプライト」(総合 後 9:00~9:58)では、国際宇宙ステーションから見た夜の地球の映像は非常に鮮明で美しいものであった。その映像には、地球に関する膨大な情報が含まれており、強いインパクトを受けた。国際宇宙ステーションと飛行機による上空と地上それぞれから“スプライト”という閃光を観測し、その本質に迫っていくという番組の作り方自体にも緊迫感のある、見応えのある科学番組だった。宇宙飛行士の古川聡さんの「地球は“電気の星”だと、しみじみ感じた」ということばが印象的であった。5月20日(日)の第2集「天空の女神 オーロラ」もオーロラの映像がすばらしく、第1集、第2集ともに地球を新しい切り口から見せるインパクトの大きな番組であった。宇宙から見た夜の地球の映像は、人間の活動そのものや、人間の活動が地球にどのような影響を与えるかという重要な情報だと思う。地球における人間とは何なのかを宇宙から見た夜の地球の映像を通して描いた番組を作ってほしい。
- 5月5日(土)のNHKスペシャル 震災を生きる子どもたち「21人の輪」(総合 後 9:30~10:43)と6日(日)「ガレキの町の小さな一歩」は、時間と手間をかけるだけではなく、余計な演出を入れず、映像の持つ説得力を前面に出した番組であり、インパクトが強かった。視聴者に見てもらうために番組がバラエティー番組的な演出をする傾向がある中で、この番組はドキュメンタリーとして非常に印象に残る番組だった。タレントの出演、解説者やコメンテーターの人選などは、NHKとして統一的な方針があるのか、または番組ごとに委ねられているのか。

(NHK側)

NHKスペシャル「震災を生きる子どもたち」は、取材対象が子どもであり、時間をかけてじっくりと取材した。「ガレキの町の小さな一歩」は、仙台局が制作した地域放送番組を基に、母親が津波で行方不明になってしまった少女を主人公に描き直したものである。次に向かって行こうという、子どもたちの前向きな気持ちを伝えることができたと思う。

タレント、解説者やコメンテーターの人選などは、基本的には番組ごとに判断している。ただし、平成21～23年度の経営計画では接触者率の向上を経営目標としていたため、タレントを出演させる傾向になりがちだったところもあった。今年度からの新しい経営計画では、接触者率だけではなく、番組の質を多面的に評価や管理していこうと考えており、これについてはNHKとしての統一した方針である。25年度の番組編成についてもこの方針を踏まえて議論していく。

- NHKスペシャル「震災を生きる子どもたち」に関連した協会からの発言にあったように、平成24～26年度の経営計画では、接触者率を追い求めるだけではなく、新たに放送を質的に評価する方法を考えているということであり、大変興味深かった。今後の報告を期待している。
- 5月12日(土)のNHKスペシャル「追跡！世界キティ旋風のナゾ」(総合 後9:00～10:13)は、日本で生まれたキャラクターの“ハローキティ”が世界の109の国と地域で受け入れられていることを取り上げており、非常に興味深く見る事ができた。ハローキティに関わるスタッフたちの生き生きと活動する姿を通して、さまざまな活動の根本は人間であり、どのように活躍するのか、そういった場をどのように与えるのかが大事である、企業に一番大切なのは“人材”であるというメッセージが明確に伝わってきた。日本が世界とどう関わっていくべきかのありようが深く分析されているとともに、人間が作り上げた架空の存在であるキャラクターが世界に与えるインパクトの大きさや影響もよく理解できた。ただ、キャラクターを発展させていった過程はわかりやすく紹介されていたが、そもそも誰がもとのキャラクターを作ったのかという原点の部分についての情報がなく、やや消化不良に感じた
- NHKスペシャル「追跡！世界キティ旋風のナゾ」は、日本のブランド価値を高めていくためには、世界とどのように付き合っていけばよいのかに、さまざまな具体例から迫っていた。大変興味深く番組を見たが、日本のブランディングにとって何

が重要なのかという問題に対する答えは非常に難しく、ヒントはあったが、その本質までは描き切れていなかったのではないかと感じた。

- 4月30日(月)の双方向解説 「そこが知りたい!」 「どうなる消費税・一体改革の行方は」(総合 前 10:05~11:54)は、解説委員が税と社会保障の一体改革をどう進めるべきかを総合的に議論する番組として、画期的であり、大いに評価できる。しかし、内容が欲張り過ぎだったために、論点が深まったとは言い切れず、やや言いつ放しで終わったように感じられた。少子高齢化のため、社会保障は労働者3人で1人の高齢者を支える“騎馬戦型”から、労働者1人で1人の高齢者を支えなければならない“肩車型”に変わることが前提とされていたが、労働力人口と非労働力人口の割合は変わっておらず、こうした前提でよいかどうかについても検証が必要である。さらに、例えば社会保障については確定拠出型年金が主流であるために、急に仕組みを変えることができないといった事情なども丁寧に説明したうえで、議論する必要があるのではないかと感じた。

(NHK側)

「双方向解説 「そこが知りたい!」」は2か月ごとに年6回放送しており、その時に最も社会的に問題になっているテーマを取り上げている。

今回は税と社会保障の一体改革についてさまざまな切り口から議論したが、多くの重要な問題を含んでおり、一つ一つの議論は十分に深めることができなかった。今後も継続的に議論し、国民的議論のきっかけとなるようにしたい。

労働力人口と非労働力人口の割合は変わらないというが、20歳未満と65歳以上にあたる非労働力人口は、将来は65歳以上の人口が20歳未満の人口を大きく上回ると言われている。年金、介護、医療など、社会保障に関する費用の多くは65歳以上に給付が偏っており、20歳から64歳の労働力人口がその費用を支えなければならないため、労働力人口と非労働力人口の割合が変わらないから負担も増えないというのは当てはまらない。世代間の公平感や格差の問題は放置できない。社会保障制度をどう構築して、改善していくかは大きな問題である。今後もできるだけわかりやすく、議論が深まるように取り組んでいきたい。

- 「双方向解説 「そこが知りたい!」」は注目している番組である。視聴者は、結論

を出すことを求めているのではなく、さまざまな情報や考え方を知りたいと思って見ているのだと思う。年配と若い解説委員個々の考え方の違いが明確に出ており、非常によいディベートになっている。

- 「サラメシ」は、働く人たちの昼ごはんをテンポよく紹介しており、毎週楽しみで見ている。時間の制約があり難しいかもしれないが、例えば弁当を紹介する場合、作ってくれた人のことや、農家や漁師など食材の生産者のことなど、もう少し、弁当の中味の一つ一つについて掘り下げて紹介してほしい。また、“あの人が愛した昼メシ”という亡くなった有名人が愛した昼ごはんを紹介するコーナーは、ゆったりとしたテンポの中で、故人がそのごはんを愛した理由がよく伝わり、番組の締めくくりにふさわしいコーナーである。
- 5月13日(日)に広島県福山市で発生したホテル火災を扱ったニュースを見た。そのホテルは昭和62年以降、建築基準法の違反で計5回の指摘を福山市から受けていたにもかかわらず改善されていなかったということであり、ひどいホテルだという印象を受けた。また、そのホテルはいわゆるラブホテルであるが、NHKのニュースでは“ラブホテル”という表現は使わず、“ホテル”と表現していたことが気になった。

(NHK側)

福山市の火災にあったホテルは、営業上は旅館業法のホテルと風俗営業法のラブホテルの両方の届け出を行っていた。実態はラブホテルとしての営業が主だったが、一般的なホテルとしても利用されていたことや、火災で死傷した被害者のプライバシーを考慮して、“ホテル”という表現にした。

- 就職活動に失敗したことを苦に自殺する若者が急増しているという報道をインターネット上などで目にすることが多い。去年は150人の大学生などが就職活動の悩みで自殺しており、2007年の2.5倍に増えているということだった。新卒一括採用や就職活動に失敗すると正社員になることが非常に厳しいといった、雇用システムの構造的な問題が原因であるとも思われ、NHKはこういった問題を取材や分析してほしい。

単に心が弱いからうつ病になってしまったというのではなく、新卒一括採用で就職することができないと正社員になることが難しいという社会的な構造の問題が背景にあることを念頭に置いて報道してほしい。

(NHK側)

就職活動に失敗したことを苦に自殺する若者が急増しているというニュースは放送でも取り上げており、企業の募集が少ないために大学を卒業したがなかなか内定が取れないなど、就職活動全般についての問題も取り上げている。一方で、中小企業は積極的に雇用を募集し、政府やさまざまな機関も中小企業の募集を後押ししていることもあって、中小企業への大卒者の就職が増えたことによって若干就職率が上がったというニュースも伝えた。自殺だけでなく、就職活動がうまくいかないために、うつ病になる人が多いという問題もある。

6月2日(土)に放送予定のNHKスペシャル シリーズ日本新生「“雇用の劣化”を食い止める！」で、日本の雇用について根本から探っていく。

- 就職活動の問題は、司法試験の合格者の就職率が下がったり、教員も自治体の財政状況悪化で定員が減るなど、構造的な問題を抱えている。一方で、海外との比較でいうと、日本は、財政赤字はふくらんでいるもののヨーロッパなどに比べて若年失業率は低いという状況もある。雇用の問題は、国による制度の違いなどもあるため、日本国内だけの問題として捉えるのではなく、多角的な視点から考えてほしい。

(NHK側)

失業に関しては、2006年と2007年に“ワーキングプア”の問題を取り上げた。

イギリスやフランスでは、非常に高い若年失業率が暴動などの社会不安につながっている。アメリカも同様に若年失業率が高く、成熟した市場経済の国で大きな問題になっている。

日本でも、大企業がコストを抑えるために合理化を行う中で新卒の採用も抑えており、政府も企業の合理化を推奨している。個々の企業や組織としては正しい選択かもしれないが、日本社会全体として見ると、若い世代にしわ寄せが行き、雇用の機会を奪うという矛盾が起こってしまっている。このような視点を忘れずに番組を放送していきたい。

- 福井県の関西電力大飯原子力発電所の運転再開は、関西地方の電力供給の問題だけではなく、日本全体がこれからのエネルギーをどうしていくのかという問題である。感情的になったり、あおったりするのではなく、しっかりとしたデータに基づ

いて、原発運転再開のメリットとデメリットをきちんと整理して、運転再開の賛成派と反対派が冷静に議論する番組を放送してほしい。

(NHK側)

「シリーズ日本新生」では以前、日本のエネルギー問題について取り上げ、原発停止について議論した。原発の運転再開については、エネルギー問題の観点からこれからも取り上げていく。

(NHK側)

今後の原発に関する大きなテーマは、運転再開についてである。5月27日(日)の「日曜討論」でも与野党の政策責任者が原発再稼働について議論する予定である。原発の安全性、夏の電力不足などを日本全体のこれからのエネルギーをどうしていくのかという視点で、さまざまな角度から検証していかなくてはならない。

- 東京電力福島第一原子力発電所は1号機から4号機まで廃止となったが、5号機と6号機は定期検査で停止中である。このほか、福島第二原子力発電所の4機は冷温停止中で、東北電力女川原子力発電所の3機も停止中である。廃止となった4機については、放射能による影響を含めて、ニュースや番組で多く取り上げられているが、揺れの大きかった地域にある、ほかの停止中の原発が本当に大丈夫かどうかについても、取材して、正確な情報を伝える必要があるのではないか。
- 原子力発電所の問題は、データに基づいて議論をするという視点、日本だけでなく世界共通の問題であるという視点が入ってくれば、より客観的な議論につながっていくのではないか。
- 4月27日(金)のBS1スペシャル 世界体感! UMIHIKO×YAMAH I KO「4月号 ギリシャ・経済危機の旅」(BS1 後11:00~11:50)は、ギリシャを旅しながら、財政危機と市民の暮らしを交えて伝える情報番組だったが、スタジオのトークについては方向性があいまいで、わかりづらかった。
- 4月28日(土)(BSプレミアム 後4:30~6:00)の「イナサがまた吹く日~仙台市荒浜 風寄せる集落の一年~」は、東日本大震災で被災した、仙台市荒浜地区の漁師や農家などの家族を1年間にわたり、取材した番組であった。東日本大震災によ

る津波が人々の生活に与えた影響の大きさや、人間の力強さを実にうまく描き出した、大変レベルの高いドキュメンタリーであった。

- 5月5日(土)の「青い海と音楽と～第4回沖縄国際映画祭 ラフ&ピース ミュージックフェス～」(BSプレミアム 6日(日)前0:15～1:44)は、沖縄という美しい自然とすばらしい音楽をたっぷり時間をかけて紹介したすばらしい番組であった。
- 東京電力の社外取締役にNHKの経営委員長の就任が内定したという報道があった。放送に影響させないのは当然であり、現場も真摯な報道に取り組むと思うが、NHKの番組制作や報道に疑念を持たれてしまうのではないかという懸念がある。審議会としても、この件がNHKの放送に影響がないかどうか確認していかなければならないと思う。
- NHKの経営委員長が東京電力の社外取締役に就任することが内定したという報道があるが、報道に携わる組織の者が、原発問題で頻繁に報道されている企業の経営に関わるのは、NHKの番組制作や報道に対して視聴者に疑念を持たれるのではないかと感じる。

(NHK側)

経営委員長の判断については、NHK執行部からコメントすることは差し控えたい。NHKとしては、引き続き、放送法に基づいて、自主、自律の立場を堅持し、公平、公正、正確で迅速な報道に努めていくことに変わりはない。

- NHKの経営委員長が東京電力の社外取締役に就任することによって、番組制作や報道に影響があるかどうか、番組審議会としても関心を持って見ていきたい。

NHK編成局
番組審議会事務局

平成24年4月NHK中央放送番組審議会（議事概要）

4月のNHK中央放送番組審議会は、16日(月)、NHK放送センターにおいて、13人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、ららら♪クラシック「ベルリン・フィルの榎本大進 登場！」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、5月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	福井 俊彦（前日本銀行総裁）
副委員長	岸本 葉子（エッセイスト）
委員	青柳 正規（国立西洋美術館館長）
	潮田 道夫（毎日新聞社論説委員）
	大軒 由敬（朝日新聞社常勤顧問（論説担当））
	駒崎 弘樹（NPO法人フローレンス代表理事）
	紫 舟（書家）
	平 朝彦（独立行政法人海洋研究開発機構理事長）
	龍井 葉二（連合総合生活開発研究所副所長）
	富士 重夫（全国農業協同組合中央会専務理事）
	細谷 亮太（聖路加国際病院副院長、小児総合医療センター長）
	若月 壽子（主婦連合会事務局）
	和田 章（社団法人日本建築学会会長）

（主な発言）

くららら♪クラシック「ベルリン・フィルの榎本大進 登場！」

（Eテレ 4月1日(日)放送）について>

- 番組で取り上げたヴィヴァルディ作曲の「四季」は有名な曲なので、親しみを持って番組を見ることができたが、番組で紹介する曲が生まれた時代背景、作曲家の人物像や境遇、楽器についての基礎知識など、付加情報があれば、さらに楽しめるのではないかと思う。

- クラシック音楽の本場のヨーロッパでは、国民的な音楽祭が開催されたり、クラシック音楽を専門に放送するチャンネルがあったりする。日本でもクラシック音楽は身近なものになってきているので、国民全体で盛り上がるような仕掛けを考えてほしい。

また、クラシック音楽の番組は、主に衛星放送で放送しているが、年配の方はいまだに地上放送中心にテレビを見ていると思われるので、Eテレにも一定量のクラシック音楽番組は必要だと感じる。

- 司会の2人に好感が持てて、トーク番組としては楽しめる。ただ、曲はいくつかの楽章を“つまみ食い”的に紹介していて、そういう紹介のしかたも否定はしないが、曲を最初から最後まで聞くことによって得られる魅力を十分に堪能できるような内容にはなっていないと思う。

“ビギナー”から“通”までに満足いただくという趣旨の新しい番組とのことなので、クラシック音楽ファンの多様な要望にどのように応えていくのか、内容についての検証を続けてほしい。

(NHK側)

新番組の1回目ということで、さまざまな要素を盛り込みすぎて、総花的になってしまった。曲の解説や楽器の説明など、ご指摘の点についてはきっちり改善していきたい。また、“つまみ食い”的に曲を放送するだけではなく、長い一曲をまるまる放送するような回も設けたいと考えている。

さらに、ヨーロッパで制作されているクラシック音楽番組の中には非常に素晴らしいものも多いので、そうした番組は主に衛星放送で放送している。「ららら♪クラシック」で見どころを紹介し、衛星放送のクラシック音楽番組で全曲版を放送するというような形で、奥行きを持たせて、クラシック音楽の魅力を伝えていきたい。

- “ビギナー”に親んでもらえるクラシック音楽番組を新設するという考え方はよいが、「N響アワー」を廃止するのではなく、並立させてほしかった。内容についても、“ビギナー”向けの番組として、多くの人に見てもらいたいのであれば、人気のある出演者のトークと音楽でつないでいけばよいというのではなく、かつてベンジャミン・ブリテンが「青少年のための管弦楽入門」を作曲したように、また、レナード・バーンスタインが音楽入門番組に力を入れたように、もっと情熱を持って取り組む必要がある。選曲についても、ヴィヴァルディの「四季」やショスタコー

ヴィッチの「交響曲第5番」などはポピュラーだが、紹介した曲の中には決して有名とは言えない曲もあり、“ビギナー”向けとは言えないものであった。トークもクラシック音楽の本質を語る内容になっていないと感じた。

- これまで、一人の音楽家を案内役にして、その人の個性を全面に出しながら構成していく音楽番組はあったが、このように親しみやすい2人の司会によるトーク形式のクラシック音楽番組もあってよいのではないかと感じた。

番組にとって、ゲストの人選は大変重要な要素だと考えるが、第1回のゲストにベルリン・フィルのコンサートマスターとして活躍している若い日本人の演奏家を呼んだことは非常によい人選であった。

- 非常に盛りだくさんの内容で、それぞれの曲は“つまみ食い”しているようにも感じられたが、榎本さんらの演奏がすばらしいため、クラシック音楽に詳しくない人が見ても飽きない内容になっていた。「“全曲版”はBSプレミアムで〇月〇日放送」という旨の字幕スーパーが出ていたように、Eテレと衛星放送のクラシック音楽番組の連動を図ろうという、NHKの意図がよく伝わってきた。

- 演奏はすばらしかったが、その音をさらによく聞かせるためのテレビならではの視覚的効果はあまり感じられなかった。榎本さんのスタジオでの演奏を紹介する部分でも、ピアノの表面にスタジオが映り込んでいたり、画面の中に司会者が映っていたりと、演奏に集中して曲の世界に入り込むことができず、残念だった。非常にすばらしい演奏だったので、テレビ番組としての視覚的効果の工夫もしてほしい。

- 長年放送してきた「N響アワー」がなくなることを惜しむ声は、いまだに大きいと推測される。

「ららら♪クラシック」は、4月22日に「N響スペシャル(1)巨匠たちとの名演の軌跡」、29日に「バレエの世界へようこそ!」を放送するとのことであるが、今後、さまざまなテーマや演出に取り組んでいくことで番組のスタイルが確立されていくと思う。この番組が定着し、クラシック音楽への需要が増えることで、また、クラシック音楽を取り上げる番組も増えていけばよいと思う。

(NHK側)

「ららら♪クラシック」は、オペラやバレエ、室内楽なども取り上げ、幅広いクラシック音楽ファンの期待に応えたいというねらいで始めた番組である。ご指摘を踏まえて、テーマの選び方や演出の工夫も続けていきたい。

今後のゲストは、NHK交響楽団で長く正指揮者を務めている外山雄三さん、日本を代表するバレエダンサーの首藤康之さん、ピアニストの小曾根真さんや声楽家の佐藤しのぶさん、木管楽器の演奏家のエマニュエル・パユさんやガストン・ルーラーさんなど、多彩で魅力的な方々を招く予定である。

- 「N響アワー」というファンが多い番組が終わる中での難しい環境でのスタートだったと思うが、第1回の「ベルリン・フィルの榎本大進 登場！」のゲストの榎本さんは、親しみやすい人間性がトークから伝わってきて、演奏も聴きごたえがあり、“一流のものをわかりやすく”という番組の趣旨を体現していたと思う。

魅力的なテーマの設定やゲストの人選、さらに、衛星放送との効果的な役割分担で、視聴者がクラシック音楽の番組に求める多様な要望に応えてほしい。

- NHKは、NHK交響楽団の活動とそれを放送で紹介することで、西洋音楽を日本人のバックボーンにしみこませてきたのではないかと思う。視聴者もそれを高く評価しているため、新しく始まった「ららら♪クラシック」は「N響アワー」に替わる番組ということにはならないのではないかと感じる。

ただ、「ららら♪クラシック」の第1回は、非常に興味深く見ることができた。クラシック音楽番組にトークという要素を加えることで番組が成立するのかと思っていたが、“ビギナー”向けとしてはトークが加わることによって親しみが生まれ、見やすい番組になっていた。“ビギナー”から“通”まで、という番組の趣旨であるが、どっちつかずにならないように気を配って、番組を制作してほしい。

(NHK側)

NHK交響楽団は、「ららら♪クラシック」では「N響スペシャル」として毎月一度は取り上げる予定であり、また、そのほかの回でも演奏を紹介することがある。

「N響アワー」は廃止したが、その番組を作っていた制作者が「ららら♪クラシック」を引き続き担当しており、NHK交響楽団の音楽も含めて、クラシック音楽への愛情を番組を通して表現していきたい。

<放送番組一般について>

- 4月1日(日)のNHKスペシャル MEGAQUAKE II 巨大地震「いまの日本の地下で何が起きているのか」は、よく取材されており、本質を捉えた番組だった。今回の番組でも使われていたが、プレートの沈み込みのメカニズムを表したCGやアニメーションは、プレートテクトニクスの説が登場して以来、基本的には変わっていない。この最初に考えたモデルが、どんどん精緻化されていって違うものであるように考えられていたが、結局は最初に考えたモデルと同じものであったというのが今の時点での結論であるが、このような学問上の流れや経緯についても放送で取り上げなければ、今回の地震が学問や研究の世界でどれほどの驚天動地の出来事だったかが伝わらないと思う。
- 4月2日(月)の「ニュースウオッチ9」では、日米関係について大越健介キャスターがアメリカ・ワシントンから中継で伝えていた。NHKが独自に入手したTPP（環太平洋パートナーシップ協定）に関する日本政府の内部文書には「米政府内に失望感が漂い始めている」とあり、アメリカでは“決められない”日本に対していらだちや困惑があると紹介していたが、日本がTPP交渉への参加を決断できないことを非難しているように受け取られかねない表現だった。TPP交渉に参加するかどうかの判断は出ておらず、バランスを欠いたコメントだったのではないかと感じた。TPP交渉への参加は賛否のある問題であり、慎重に報道してほしい。

(NHK側)

TPPを巡る問題はさまざまな意見があり、多角的な観点からの報道が必要であることは認識している。今後もそのような状況を十分に踏まえて、報道していきたい。

- 4月8日(日)のNHKアーカイブス「歴史に見る社会保障改革 “少子高齢化”をどう支えるか」(総合 後 1:05~2:58)では、社会保障改革についてどのように議論されてきたのかを40年前の貴重なアーカイブス映像で振り返っていた。改革がうまくいっていない現在にも通じる内容もあり、優れた番組であった。

「NHKアーカイブス」で取り上げるテーマは、どのように決めているのか。

(NHK側)

番組の内容は、「NHKアーカイブス」の制作担当者が提案する形で決めている。“シリーズ原子力”や今回取り上げた“税”といった時事的なテーマを取り上げることもある。また、視聴

者からの要望に応える形でテーマを決める場合もある。

- テレビは“同時性”が最大の特徴だが、過去の番組を“今日的”な視点で再発掘して放送することで、時間軸が加わり奥行きが出ている。

また、過去の番組を学術研究に役立てることも重要である。NHKは過去の番組を放送のみならず、広く一般に活用できる試みも行っているということで、こうした取り組みは今後も続けてほしい。

(NHK側)

ご指摘の施策は、「NHKアーカイブス 学術利用トライアル研究」と銘打ったもので、メディア研究を専門とする研究者からのNHKの過去の放送番組やニュースを学術研究で使いたいという働きかけをきっかけに、平成22年3月に開始したものである。現在は研究者が論文を執筆中であり、劇作家の寺山修司の分析や水俣病の研究など、興味深いテーマもある。すでに完成した論文もいくつかあり、NHKとしても放送につなげることができるかどうかを検討しているところである。貴重な放送資産をどのように利用するかをNHK内部だけではなく、外部の人たちと一緒に検討し、今後のメディアの発展に役立てていきたい。

- 「NEWS WEB 24」は、視聴者からのツイートを画面上で紹介するという取り組みが印象的な番組である。紹介されるツイートは番組を見た感想や意見などの“反応”であり、これによって議論が深まることはないが、ツイートの積み重ねによって、視聴者の“民意”が浮き出てくるのではないか。ツイッターを見ながら番組を見ている人は、番組では紹介されなかったツイッター上のもっと多くの反応を共有しているはずであり、このようなテレビの視聴スタイルは、若い世代に向けた番組を作る際に意識しなければならないと思う。
- 「バリバラ～障害者情報バラエティー～」は、タブー視されがちな障害者によるお笑いに挑戦しながら、障害がある人のアイデンティティーについて真剣に考えている番組である。障害がある人が自身の身体的な障害を題材にした笑いも紹介しているが、「気の毒である」や「差別している」というような感じは全くない。番組の制作者のバリアフリー社会の実現に向けた思いが伝わってくる。
- 「100分de名著」は、昔から知っているが読んだことがない“名著”のポイン

トをわかりやすく解説するというテーマが興味深い番組である。ただ、昨年度までは、スタジオでのゲストの講師とのやり取りが予定調和で終わってしまっている印象があり、名著の内容もあまり伝わってこなかったが、4月からは司会や演出などがリニューアルされたので期待したい。

「コロンビア白熱教室」で講義をしていたシーナ・アイエンガー教授のように、教える側の優秀な人材を取り上げた番組が増えている。このように、本当のプロフェッショナルと言えるような先生の授業を番組で見ることができたら、若い人たちもNHKをもっと見るようになるのではないかと感じる。

このほか、4月7日(土)からの「フローズン プラネット 最後の未踏の大自然」(BSプレミアム 後9:00~10:59)、3月26日(月)~28日(水)の「テクネ 映像の教室」(Eテレ (27~29日)前0:50~1:05)、「スーパープレゼンテーション」、仕事学のすすめ「宮本亜門 舞台流コミュニケーション術」、「ティーンズプロジェクトフレ☆フレ」、「バリバラ~障害者情報バラエティー~」、「東北発☆未来塾」はいずれもよい番組であった。

- 最近、NHKの番組も世代や性別ごとに視聴対象を分けた番組作りをしているように感じられるが、そうした考え方に疑問を感じる。

例えば、作家の司馬遼太郎の命日に合わせて開かれたシンポジウムを収録した、3月31日(土)のTVシンポジウム「3.11後の“この国のかたち”~第16回菜の花忌シンポジウム~」(Eテレ 後1:00~2:00)は、東日本大震災以降の日本がどのように変わり、これからどのように進んでいけばよいのかについての問題提起がされており、テレビで久々に大人の討論が聞けたと感じさせる番組であった。

一方、同日の新世代が解く!ニッポンのジレンマ「決められないニッポン~民主主義の限界?~」(Eテレ 後11:55~4月1日(日)前1:55)は、1970年以降に生まれた論客たちがスタジオで議論し、それぞれの意見を主張していたが、かみ合っていない印象を受けた。

また、「第2回オンバト+チャンピオン大会」(総合 後10:55~4月1日(日)前0:24)は、若手のお笑いタレントたちが自分たちで考えた“ネタ”を披露していたが、「日本の話芸」などで取り上げる落語や講談などの何度も聞いてみたいと思わせてくれる古典とは、同じ“笑い”でもまったく異なる内容であった。

3月11日(日)の東北発☆未来塾 キックオフ「夢を描くチカラ~コミュニティデザイナー 山崎亮~」(Eテレ 後8:00~9:00)は、東北の大学生たちが山崎さんに学び、10年後の東北をどのようにしたいかということについてプレゼンテーションするという番組だったが、プレゼンの内容を成熟させるには時間が足りなかったと思う。

個々の世代のニーズに合わせた番組作りを進める中で、“若者向け”の番組につ

いては“手軽で見やすい”ことが重視されているといった印象を受ける。世代や性別ごとに分けて考えるのではなく、それらを越えた番組の制作や編成を検討してほしい。

(NHK側)

指摘の点はまさにそのとおりであり、視聴者がいま見たいと思っている番組を届けることも重要だが、さらにその先を見すえて、「こういう番組が見たかった」と思ってもらえるような番組を届けていかなければならないと思う。その際に世代や性別ごとに区切って考えるのではなく、生活環境や家族構成などの環境も立体的に捉えて、検討していかなければならないと考えている。

- 新世代が解く！ニッポンのジレンマ「決められないニッポン～民主主義の限界？～」は、放送時間内では民主主義は限界なのか、日本の社会をどのようにしていけばよいかなどについての答えは出ていなかったが、答えを出すことが大切なのではなく、若い世代の人たちがこのような議論に参加したこと、また、参加してよいのだという空気を作ったことに大きな意義があると思う。

1月1日(日)に「新世代が解く！ニッポンのジレンマ～震災の年から希望の年へ～」を放送した後、ネット上で大きな反響を呼び、再放送もされている。若者たちに大きな反響を与えた番組だったと思う。

(NHK側)

この番組の1970年以降に生まれた論客たちによる議論は、若い世代が考え、求めているものの一歩先を示すことができたと考えている。

- 若い世代に番組を見てもらいたいという問題意識はわかるが、民放と同じような番組作りをしても若い世代がNHKを見してくれるわけではなく、一方で、今までNHKを見ていた年配の視聴者が離れていってしまうということにもつながりかねない。新しい視聴者獲得に向けた努力は必要であるが、今まで番組を見てくれていた視聴者も大切にしてほしい。
- 変化の激しい世の中で、価値観も速いスピードで変化しており、アイデンティティーの確認や継承がその速さについていけずに、結果として世代間のギャップが生まれてしまっている。そのギャップの中で、どちらに向けた番組を作ればよいの

か、あるいは、どちらかに向けた番組を作ることで、さらにギャップが広がってしまうのではないかという葛藤があると思う。

(NHK側)

メディアの変化のスピードも非常に速くなっており、NHKも公共放送の原点とは何かを考えながらも、そのスピードについていかなくてはならない。アイデンティティーや価値観、理念を共有することが非常に難しくなっているが、常にそのことに挑戦していかなければならない。

- 個性は、世代や性別で区切られるものではなく、個人個人にあるものである。真摯（しんし）によい番組を作り、発信していくことによって、世代を越えて受け入れられていくと思う。
- 特定の世代向けの番組を作ることの是非が議論になっていたが、“若い世代”と“ネット世代”を同じ対象として捉えるのは違うのではないかと思う。10代や20代の若い人たちの間にも、情報に接する環境や興味を引かれるものに個々の差があるため、年齢だけでなく、情報に接する環境の違いなども考慮することが必要である。
- 東京電力福島第一原子力発電所の事故発生からしばらくの間は、事故についての情報が精査されていない状況で、適切な報道や解説がされていたかをしっかり検証して、今後の報道に生かしてほしい。

(NHK側)

原発事故に関する報道に関しては、政府、電力会社ともに状況を正確に把握できていなかった事故発生初期の段階で、深刻な事態を的確に伝えることができたのかということについて、課題があると認識している。

事故についての情報が少ない段階では、把握できていることとできていないことを精査し、解説者に必要以上に評価や見解を求めることはせず、可能なかぎり複数の解説者の意見を紹介するなどの改善をしていきたい。

- 中国の四川大地震は2008年の発生から4年がたつが、被災者の人たちは3年の間に何もなかった土地に新しい街をつくって復興を遂げている。直接の参考になる

かどうかは別にして、中国での復興への歩み取材して、東日本大震災との違いも紹介してほしい。

- およそ10万人もの人がフォローしていた堀潤アナウンサーのツイッターのアカウントが、担当番組の「Bizスポ」が終わることに合わせて閉鎖された。

その後、“NHKアナウンサー”のアカウントを設け、その中で堀潤アナウンサーもつぶやくということが周知されたが、それぞれのアナウンサーの個性を出しづらくなってしまっているのではないかと感じた。失言した際に組織としてどのように対応するのかといった課題はあるが、個人として積極的に発言することができるルール作りや組織文化を築いてほしい。ツイッターなど、インターネット上での交流が活発になれば、NHKが力を入れている若年層との回路作りにもつながるのではないかと感じた。

組織で管理することは必要なことであるが、今回の堀潤アナウンサーのツイッターは多くの方がフォローしていたので、「Bizスポ」としてのアカウントの役割は終わったが、フォローしていた人々とのつながりを維持していく手段は考えてほしかった。

(NHK側)

NHKには、107個のツイッターのアカウントがあるが、組織で管理するという方針のもと、内容を精査したうえで実施している。現時点では、組織として管理するという方針や運用のしかたを変えることは考えていない。

NHK編成局
番組審議会事務局